宮崎県文化財調査報告書

第　26　集

昭和５８年３月

宮崎県教育委員会

正誤表

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
序	12	分部啓秋	分部哲秋	89	表15	最小周 2 77.00	最小周 2 74.00	118	21	上顎示数は50.75	上顎示数は(50.75)と
6	8	湮滅	湮滅	90	3	示数位	示数値	119	12～13	19.8mm(右)、横径16.8mm(右)骨体周57.5mmで断面示数は84.85(右)となる	19.8mm(左)、横径16.8mm(左)骨体周57.5mm(左)で断面示数は84.85(左)となる
34	第6図	8 (M)	8 (N)	〃	10	大腿骨から	大腿骨からの				
49	9	蓑方政義	蓑方政幾	〃	表18	上脱骨(左)	上脱骨(右)	120	1	中央周440mm	中央周40.0mm
55	5	比ぶて	比べて	〃	〃	橈骨(左)	橈骨(右)	〃	15	いづれも	いずれも
56	5	巡くもの	巡るもの	93	6	Marfin	Martin	〃	20	場合145.59cmとなる	場合151.82cmとなると仮定した場合145.59cmとなる
65	第1図	2	削除	〃	〃	Anthropologie	Anthropologie				
68	右上		第3図前半地区遺跡周辺地形図	〃	27	SuzuKi	Suzuki	121	9	人類学的	人類学的
70	第6図	40 cm	40 m	95	11(表23)	最前頭幅	最大前頭幅	122	表2	17/1 頭蓋幅高示数	17/8 頭蓋幅高示数
71	2	第図1～14	第9図1～14	97	3(表25)	n M	n M u²	〃	〃	頭蓋最大幅127	頭蓋最大幅
〃	13	第図15～19	第9図15～19	〃	26	鼻高35	鼻高45	125	表6	22.9	12.9
80	1	Marfin-Saller	Martin-Saller	98	2(表26)	12-4	12-4 平均	126	表9	(○骨癒合完了△	(○骨癒合完了△
〃	5	比比較資料	比較資料	100	2	I-A 左右左	I-A 平均 左右左	128	写真	加台11-2四肢骨の写真	上下が逆になっている
81	6	正中矢弧長	正中矢状弧長	〃	15(表29)	3 35.16	3 85.16	130	24	土師器製作所跡	土器焼成跡
〃	17	対称的	対照的	103	6(表38)	2. 自然位全長	2. 自然位全長 1,370				
82	20	上顔高65mm	上顎高65.00mm	104	表41	左右右左	9-1 9-5 11-3 左右右左				
83	4	(低眼高)	(低眼窩)	112	資料4	関する人類学的研究	関する人類学的研究				
〃	12	低頭の傾向	低顔の傾向	〃	〃 8	Marfin-Saller	Martin-Saller				
84	5	(表7)中顔幅	(表7)、中顔幅	114	2	116.00となる	117.06となる				
〃	10	低頭の傾向	低顔の傾向	〃	8	77.45となり	77.45(右)となり				
85	30	大きいのが	大きいが	116	8	中顔幅は	中顔幅は78mmで				
88	表14	2. 自然位全長	2. 自然位全長 1,370(左)	117	4	71.4(左)となる	71.49(左)となる				
〃	33	83.75mm(左.1,191)、最小値	83.75mm(左.1,191)、最小値	117	25	右側大腿 および	右側大腿骨および				

宮崎県文化財調査報告書

第　26　集

昭和５８年３月

宮崎県教育委員会

序

宮崎県教育委員会におきましては，文化財指定のための調査，また，開発工事等によって発見された遺跡についての緊急発掘調査の結果をまとめて，毎年報告書を刊行しております。

今回は，延岡市の苺田窯跡，高崎町の柏ノ木遺跡，北迫遺跡，田野町前平地区遺跡，高原町旭台地下式横穴群の人骨について報告するものであります。

本書は，本県の歴史解明のための学術資料として研究に活用していただくとともに，社会教育・学校教育の資料として役立てていただきたいと存じます。

なお，本書発行にあたり執筆いただいた小田富士雄氏松下孝幸氏，野田耕一氏，分部啓秋氏および調査にあたり御協力いただいた地元の方々，地元教育委員会の方々に深甚の謝意を表します。

昭和５８年３月３１日

宮崎県教育委員会

教育長　　後　藤　賢　三　郎

例　　言

1. この報告書は，宮崎県教育委員会が実施した埋蔵文化財緊急発掘調査の報告書であるが，北迫遺跡，前平地区遺跡については，地元教育委員会において調査されたもので，依頼により掲載するものである。
2. 掲載しているのは，縄文時代関係遺跡３，地下式横穴関係１，平安時代関係１の計５件についてである。
3. 執筆者，調査期日等は下記のとおりで，本書の編集は，宮崎県教育庁文化課が担当した。

記

番号	遺跡名	所在地	調査期日	執筆者
1	苺田窯跡	延岡市	41. 3. 8～14	小田富士雄
2	柏ノ木遺跡	高崎町	49.12.22～24	岩永哲夫
3	北迫遺跡	〃	57. 2.23～27	面高哲郎
4	前平地区遺跡	田野町	57. 5.10～22	面高哲郎　長津宗重
5	旭台地下式横穴群 人骨編	高原町	50.12. 4～12	松下孝幸・分部哲秋 野田耕一

総　　目　　次

Ⅰ　延岡市苅田窯跡 …… 1
（延岡市行縢町古野）

Ⅱ　柏ノ木遺跡発掘調査報告 …… 25
（北諸県郡高崎町大字大牟田字柏ノ木）

Ⅲ　北迫遺跡発掘調査報告 …… 47
（北諸県郡高崎町大字大牟田字北迫）

Ⅳ　前平地区遺跡発掘調査報告 …… 61
（宮崎郡田野町字芳ケ迫）

Ⅴ　旭台地下式横穴群発掘調査報告 …… 75
（西諸県郡高原町大字広原旭台）

（付）昭和56，57年度埋蔵文化財発掘調査一覧 …… 129

延岡市・苺田窯跡

延岡市行縢町古野

例　言

1. 本報告は，昭和41年3月8日から14日まで宮崎県教育委員会が実施した苺田窯跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は，九州大学文学部助手（現北九州市立歴史博物館主幹）小田富士雄氏，宮崎県立博物館学芸員（現埼玉県立歴史資料館）栗原文蔵氏，延岡市教育委員会社会教育課主事（現延岡市立文化センター長）甲斐常美氏の3名が担当した。
3. 出土遺物は，宮崎県総合博物館で保管している。
4. 本報告の執筆は，小田富士雄氏が行い編集は，宮崎県教育庁文化課があたった。

本　文　目　次

1.　遺跡の環境 …… 5
2.　調査の構成と経過 …… 6
3.　窯跡の立地と構造 …… 8
4.　遺　物 …… 11
5.　結　語 …… 15

挿　図　目　次

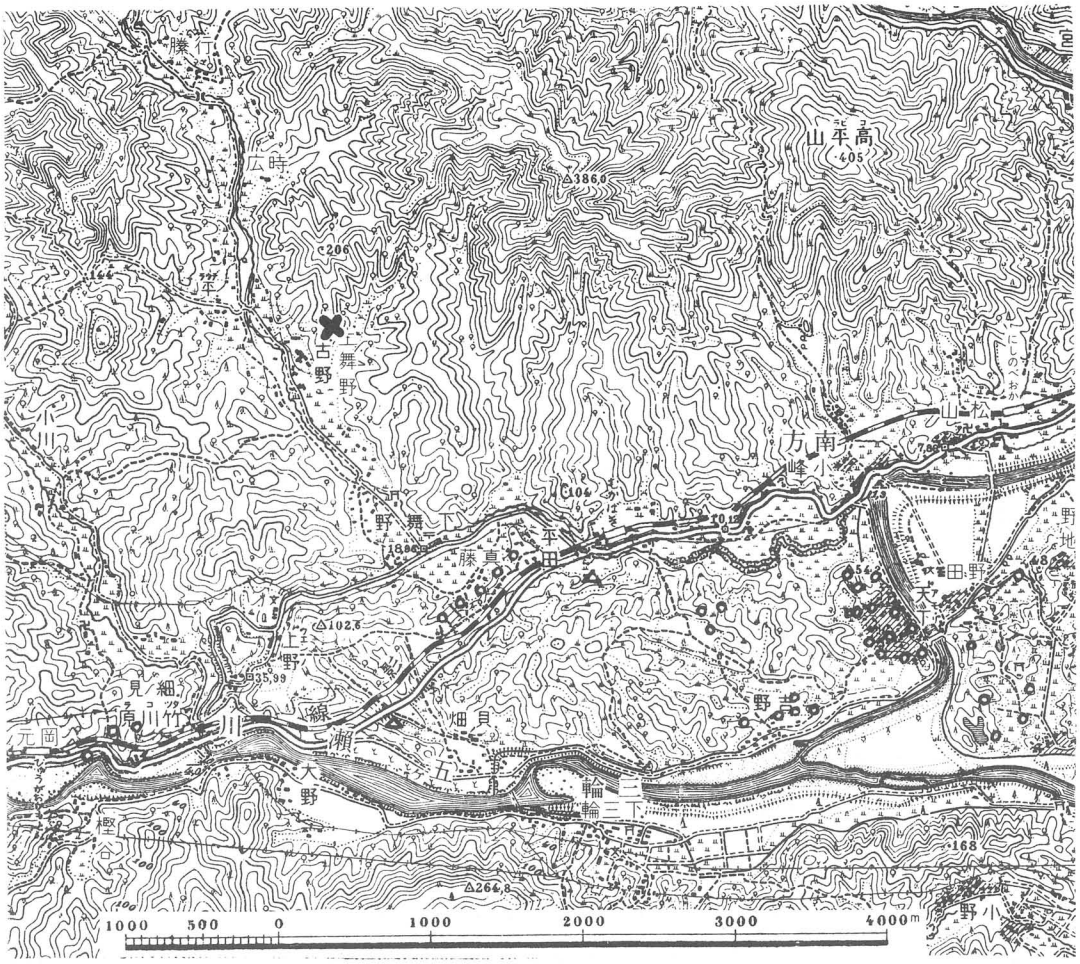
第1図　苺田窯跡の地形環境地図 …… 5
第2図　苺田窯跡付近地形実測図 …… 9
第3図　苺田窯跡（1号）実測図 …… 10
第4図　苺田窯跡出土須恵器実測図 …… 12
第5図　苺田1号窯跡出土大甕片拓影 …… 13
第6図　苺田2号窯跡出土大甕片拓影 …… 14

図　版　目　次

図版1　苺田窯跡遠望 …… 17
図版2　苺田窯跡遺跡 …… 18
上・遺跡近景
下・発掘調査終了時の窯跡遺構
図版3　苺田窯跡遺物(1)　椀・蓋 …… 19
図版4　苺田窯跡遺物(2)　広口瓶・甕 …… 20
図版5　苺田窯跡遺物(3)　椀・甕・杯 …… 21
図版6　苺田窯跡遺物(4)　甕 …… 22
図版7　苺田窯跡遺物(5)　焼台 …… 23

1. 遺跡の環境（第1図）

国鉄日豊本線延岡駅から分岐して，東西に貫流する五ケ瀬川沿いにさかのぼる国鉄日の影線で西延岡駅を経て二つ目が行滕（むかばき）駅である。西延岡以西は川の両岸まで急俊な山裾が迫り，さらに山奥に通ずるいくつかの谷地形のなかにわずかな谷水田がみられる程度の山岳地帯である。本稿であつかう須恵器窯跡が所在する延岡市行滕町古野の地は行滕駅の西北 2.5 粁の山中にあたる。この地域の調査は，１９１３年（大正２）つづいて１９２５～２９年（大正１４～昭和４）に故鳥居龍蔵博士が延岡市周辺の調査を行われたのが最初である。現在南方（みなみがた）古墳群として国指定史跡となっている４２基にのぼる多くの古墳群[1]の存在は，まず鳥居博士によ



第１図　苺田窯跡の地形環境地図

って紹介せられ，その後今日の数量が登録されるにいたったのである。鳥居博士はこれらのうちのいくつかについて発掘調査を実施され，１９１３年以来の調査をまとめた『上代の日向延岡』の単行書として１９３５年刊行された。(2) 今日南方古墳群として登録されている古墳群は五ケ瀬川とその南を流れる大瀬川にはさまれた中洲に位置する野地・大貫・野田などの独立丘陵，さらに五ケ瀬川沿いの天下（あもり）・吉野・行縢駅西方の平田・赤木など広範囲に分布している。その多くは円墳であるが，天下の柄鏡式前方後円墳は１９１３年に鳥居氏によって発掘され，粘土郭内に刀剣・玉・櫛などが発見されて五世紀代にさかのぼる畿内型古墳であることが知られている。また行縢駅の南台地上にはすでに湮滅した弥生時代の高野貝塚、貝ノ畑には石川恒太郎氏らによって調査された弥生終末期の住居跡などがある。しかしながら，歴史的な生活の主要舞台には南方古墳群の多くが集中する分布状態にもみられるように，五ケ瀬川と大瀬川が分岐するあたりから東側，現在の延岡市街が発達している地域にかけての河川流域であった。五ケ瀬川流域は大瀬川と合流する吉野付近以東の平野地域と，以西の山岳地域に大別できる。前者は平野（農村）・漁村の生活圏であり，後者は山村の生活圏である。本稿でとりあげる苅田窯跡の地域は後者に属する。この地域における考古学的調査はまだほとんど未開拓の段階にあり，将来の調査の進展によって新しい研究が期待されるところである。

註(1)　延岡史談会編『資料・国指定南方古墳群概説』（プリント版）による。本資料は１９６２年（昭和３７）８月延岡市教委備付の古墳台帳によって作成されたものである。

(2)　『鳥居龍蔵全集』第四巻（１９７６）収録

2.　調査の構成と経過

１９６６年（昭和４１）３月，宮崎県教委の主催による延岡市貝ノ畑住居遺跡の調査が実施されることになり，次のような調査団が構成された。

石　川　恒太郎	県文化財専門委員
日　高　正　晴	同　　上
栗　原　文　蔵	県立博物館学芸員
小　田　富士雄	九州大学文学部助手
黒　木　清三郎	県教育委員会社会教育課主事
甲　斐　常　美	延岡市教育委員会社会教育課主事

調査は3月8日から14日の間実施されたが，調査前にこの地域の分布調査をされた石川恒太郎氏が貝ノ畑遺跡の北方約2.5粁の行縢町古野の山麓道路による切断面に登り窯の窯体が横断されているのを発見された。この前後，日本考古学協会に生産技術特別委員会が設置され，その窯業部会の事業として小田らが九州の古代窯跡発掘調査に関与していたことを配慮された石川氏が，貝ノ畑遺跡の調査にあわせてこの新発見の窯跡を調査することを提案された。当時宮崎県下ではまだ須恵器窯跡の発掘などは行われていなかったので，県下の古代窯跡の実態を知るためにも必要性が痛感されていた折でもあった。そこで，貝ノ畑遺跡の調査には石川，日高両氏があたり，本窯跡の調査には小田，栗原，甲斐らがあたることとなった。

窯跡の発掘は3月9日午後から開始され，人夫3名の協力を得てとりかかったのであったが，予想外に表面から浅い位置に窯体が存在したために，その日のうちにはほぼ発掘を完了した。

翌10日には清掃，写真撮影を行い，灰原の発掘を午後まで継続する一方で，栗原，小田らによる窯跡の20分の1実側図作成が行われた。さらに道路面にもう一基の窯跡が存在することを確認したので，発掘した窯跡を1号窯とし，新たに発見された窯跡を2号窯跡とした。またこれら窯跡を含む地形測量図を作成する必要上，急拠九州大学考古学研究室に連絡をとり応援を求め，石松好雄，前川威洋両君が出張することとなった。

11日は延岡市内藤記念館で同館保管資料の調査と，窯跡発掘資料の水洗を行った。前者には小田が、後者には栗原があたった。

12日も午前中同館の資料調査を行い，九州大学からの応援の到着を待った。14時35分延岡着急行「日向」で石松，前川両君が到着したので窯跡付近の地形測量百分の一図面作成にとりかかり，夕刻終了することができた。

13日には石川氏らの発掘による貝ノ畑住居跡付近の地形測量を行った。午後は甲斐主事の案内で南方古墳群を見学，住居跡の発掘完了を待って16時より住居跡の40分の1平板測量図を作成した。

14日は午前中宿舎で窯跡関係発掘資料の整理・実測，写真撮影を行って完了し，午後延岡市を出発した。

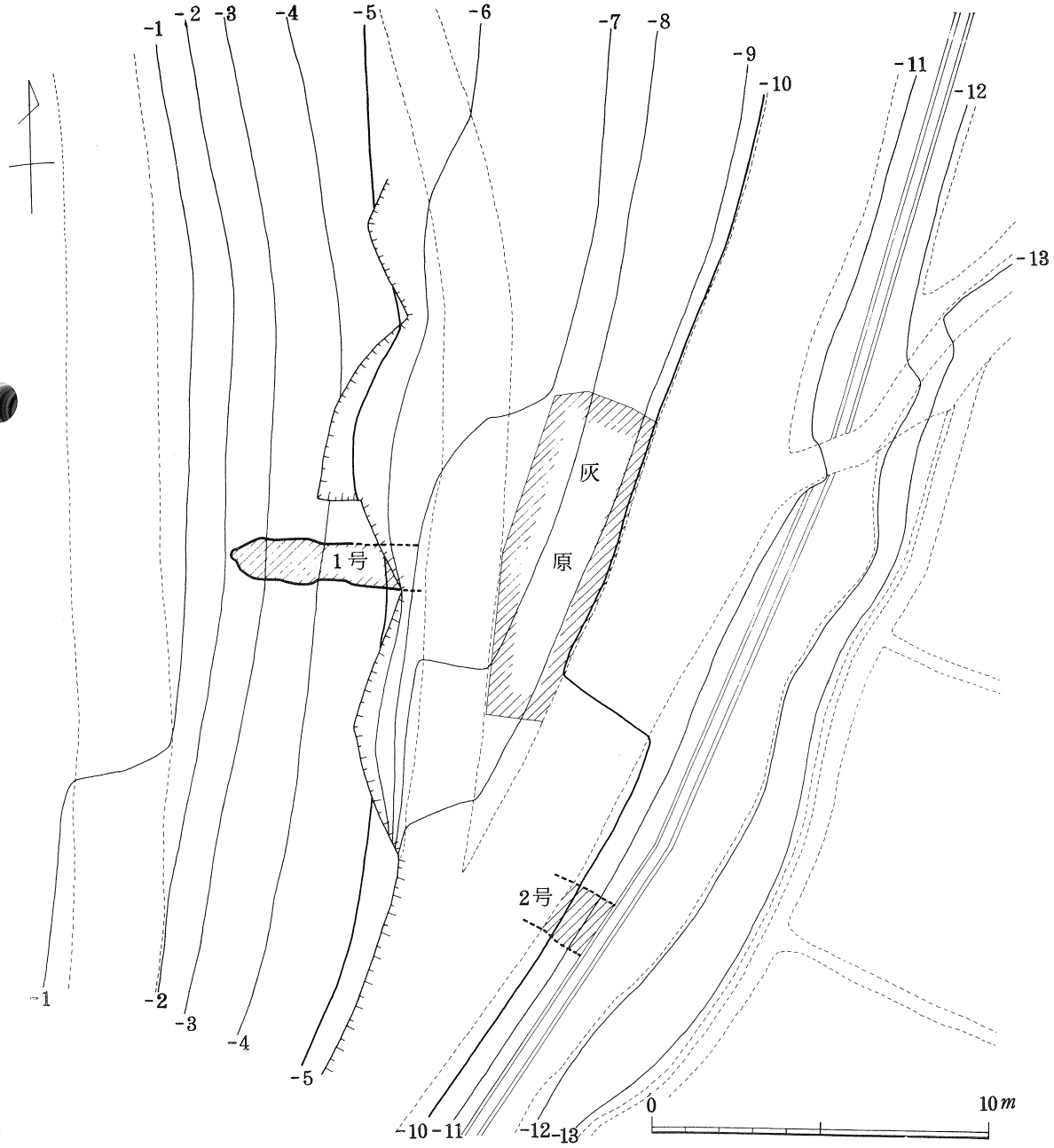
3. 窯跡の立地と構造（図版１・２、第２・３図）

南北に延びる山丘の東斜面中腹に設けられた半地下式の登り窯である。丘陵頂上には尾根上を南北に走る平坦な山道があり，ここを基点として６ｍほど下に等高線に沿って切通された新道が設けられている。この切通した燃焼部の大部分から焚口を削りとられた窯体の横断面が露出している。雑木におおわれた山丘の傾斜は比較的ゆるやかで，窯跡の深さが現地表にちかいところから発掘もさしたる労働力を要しないであろうことが予想された。この１号窯跡を切断して走る幅２ｍの山道は，窯跡の西８ｍほどのところでさらに二叉に分岐して－１０ｍの等高線沿いに東下方へと下って山麓の水田に接近してゆく。山丘上の基点から水田までの等高線差は－１２ｍほどである。この山道が分岐する位置の道下斜面に２号窯跡の横断面がのぞいており，ここでも若干の須恵器片を採集することができた。１号窯跡の下方，丁度二叉になった上下の二道にはさまれてのこされている－７～－１０ｍ等高線の範囲内に１号窯跡の灰原が広がっている。その広がりは南北幅約１０ｍに及ぶが，灰や須恵器の包含量は浅く少ない。操業期間が短期間であったことを示している。

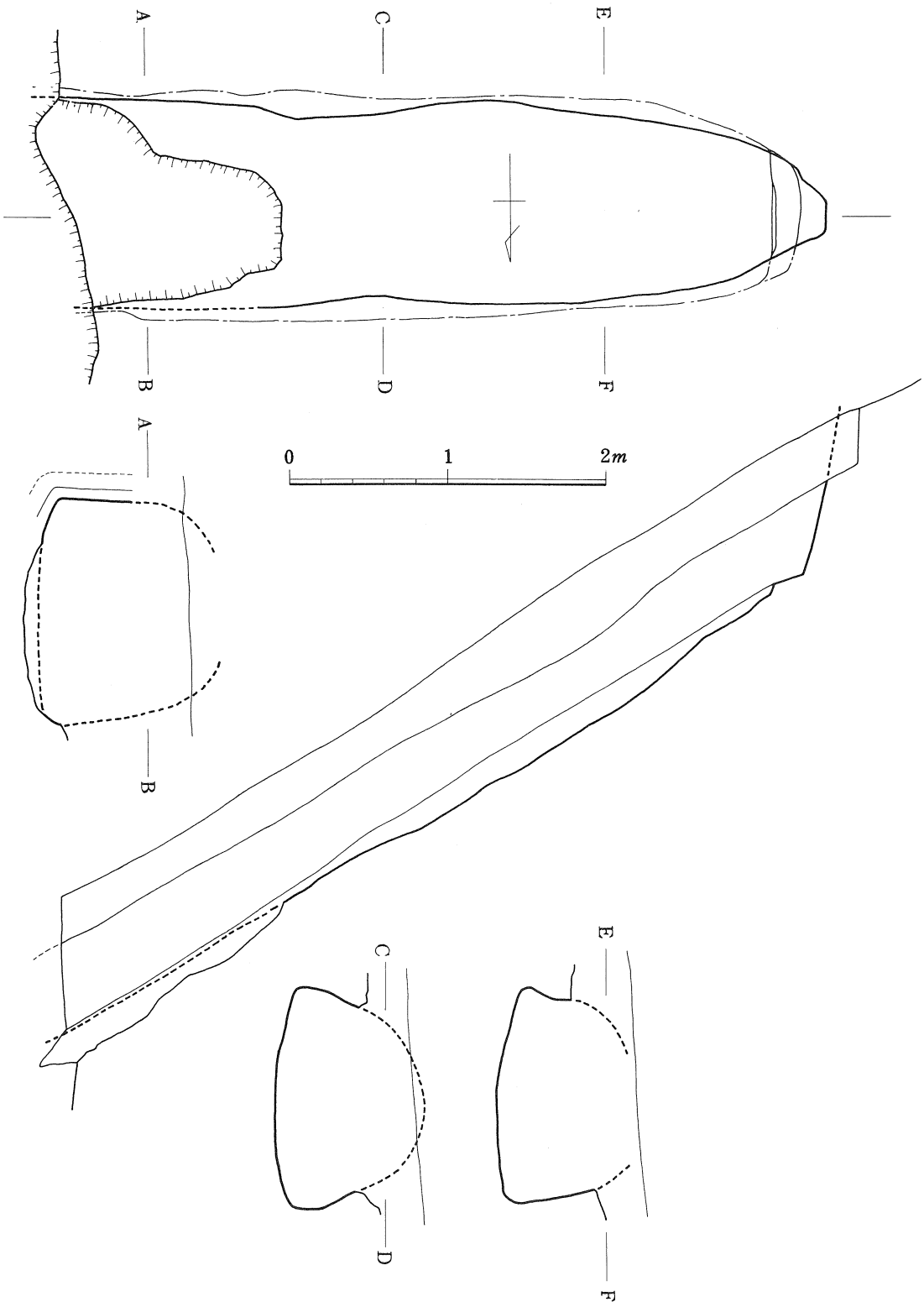
完掘された１号窯跡の窯体は焼成部にあたり，現存平面長５ｍ，平均幅1.4 ｍである。等高線に直交して設けられた窯体の主軸方位は正南北，傾斜角は２８度である。現地表から窯床まで平均８０㎝であるが，窯体の天井部はすでに陥没していて，壁面の現存する床面からの高さは平均４０㎝である。道路に近い切断面のあたりではほぼ垂直にちかい壁面の立上りをみせ，壁の厚み７～８㎝であるが，煙道に向って登るほどに窯体幅も徐々にせばめられ，壁面の立上りも内傾して半球形天井に仕上げられていったと思われる。推定復原高は８０㎝前後であったと思われ，半地下式構造であったと推定される。床面はほぼ同一傾斜で煙道に到るが，末端では奥行２０㎝ばかりの棚状テラスを設け，壁面をやや外傾させて立上る煙道が構成されている。この無段式登り窯は道路切断面よりさらに東にのびて燃焼部，焚口につながっていたはずである。おそらくもう２ｍ前後窯体はのびていたと思われる。本来の窯体の全長は７ｍくらいであったと考えられる。現存する窯体の道路切断面にちかい部分では，床面が発見時に不用意に鍬などで掘られたために１０～２０㎝ばかり床面が掘りあらされている。このあたりでは須恵器片が多く発見されている。このあたりから焚口方向にかけてが燃焼部にあたるものと思われる。

尾根
され
横断
地表
1号
て一
水田
の横
方，
内に
包含

。等
ら窯
から
上り
れ，
0 cm
道に
煙道
につ
窯体
は，
れて
てが



第２図　苺田窯跡付近地形実測図



第３図　苺田窯跡（１号）実測図

4. 遺　物（図版3～7、第4～6図）

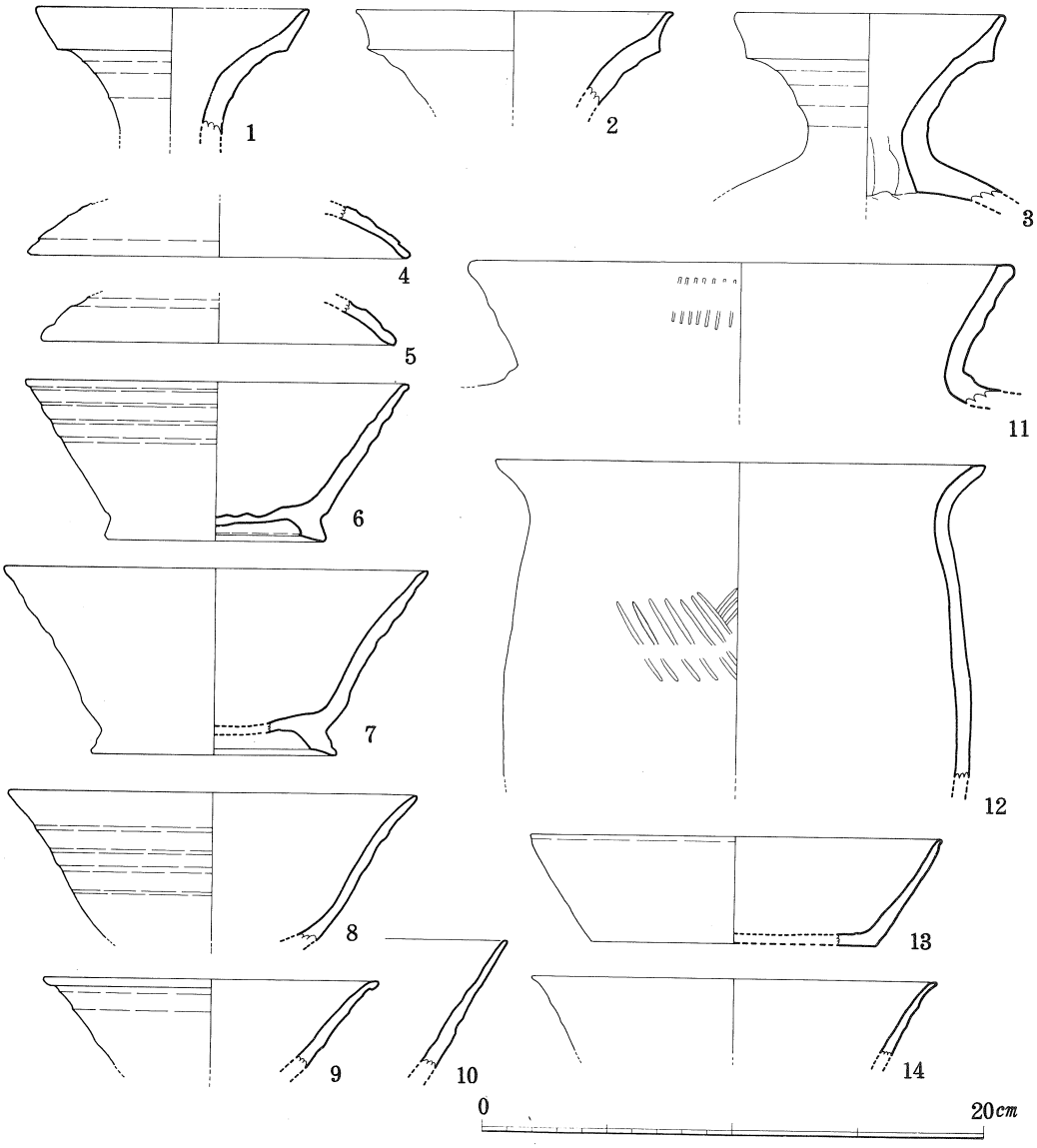
窯の内外，灰原などから須恵器が収集されているが量的には多くなく，同一時期に生産された一セットをなすものであろうと考えられる。以下器種別に説明しておこう。

広口瓶（図版4－1～6，第4図1～3）　口径5.4～6.4㎝，高さ6㎝前後の外反する口頸部を付した広口瓶形をなすであろう。全形のうかがえる資料はないが，肩部の広がり具合からみて，長胴形器体に直立する径4～5㎝の細頸が付き，ゆるやかに外反し，さらに外側には稜を設けて1.5～2㎝の高さに外傾する立上りをみせて広口を形成している。口唇部は丸く仕上げられている。器体と頸部の接合部は器壁も1㎝をこえる厚さで，内面には綟りの痕跡をとどめている。頸部にはヘラによる回転ナデ調整がなされ，灰白～鼠色の堅い焼成である。おそらく全高は20㎝をこえるものとなろう。

蓋（図版3－右端，第4図4・5）　口径6.1～7.6㎝の傘蓋形式である。完形品がないので中心部の形態は不明であるが，口唇部は丸く仕上げられ，表面は回転ナデ調整された際の凹凸がのこされている。後述する椀とセットをなすものであろう。器壁の厚さ5㎜で，鼠色を呈する堅い焼成である。

椀（図版3，図版5－最上段，第4図6～10）　口径7.7～8.5㎝，高さ6.4㎝～7.5㎝の高台を付した椀形である。付高台の高さ1㎝，台径4.4～4.9㎝で底面は内上りに削られた張り出し形式である。器体部は腰張りなどなく，高台からいきなり外傾して直線的にのび上るものが多いが，底部ちかくでやや外側に丸味をもつような形態のものも少量みられる。口唇部は丸く仕上げられ，器壁の外側にやや粗い回転ヘラ調整がみられることは他の器種と同様である。灰色～鼠色を呈する堅い焼成である。

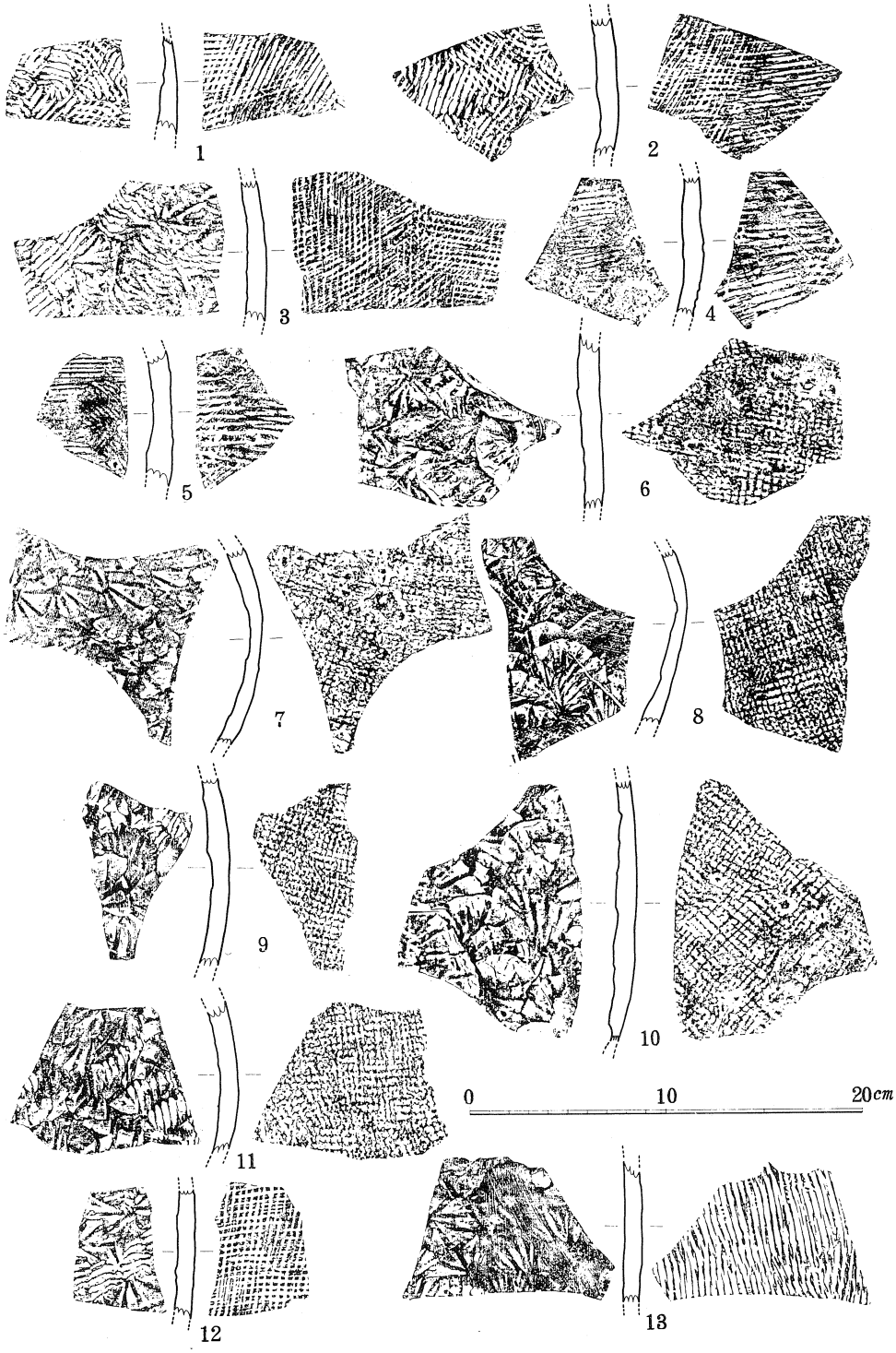
甕（図版4－7・8，図版5・6，第4図11・12，第5図）　二種ある。一（図版4－8，第4図11）は外傾する広口短頸の胴を大きく広げる大甕形態である。復原口径21.8㎝で広い肩部から立上る短頸は高さ4㎝ほどで，外傾する立上りは直線的に平坦な口縁に到る。口頸部表面には上下方向の平行条線叩きしめののちに回転ナデ消しして仕上げられている。褐色を呈する堅い焼成である。貯蔵形態の用途に供されたと思われる。二（図版4－7，第4図12）は胴張りのない長胴形甕でゆるやかに外反する短頸がついている。復原口径19.6㎝，胴径18.8㎝で推定復原高20㎝くらいになるであろう。口縁上面は平坦面をなし，器壁はほぼ6㎜の平均的厚さに仕上げられている。内面はよこナデ調整，表面は斜め方向の平行条線叩きが施されており，口縁下5㎝くらいまではこの叩きがナデ消されている。鼠色を呈する堅い焼成である。煮沸形態に適している。



第4図　苺田窯跡出土須恵器実測図

（1～12は1号窯跡、13・14は2号窯跡）

（1～3・広口瓶、4・5・蓋、6～10・14・椀、11・12・甕、13・杯）

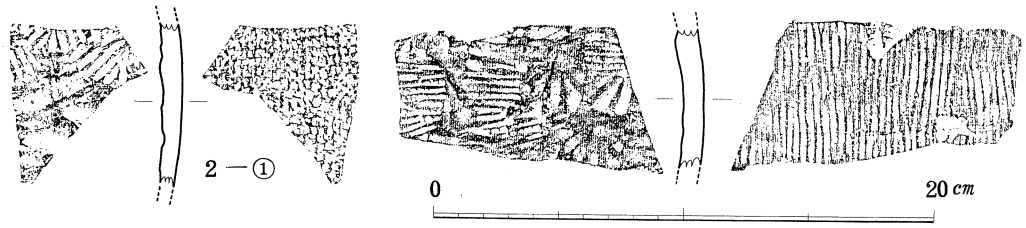


第５図　苺田１号窯跡出土大甕片拓影

このほか多く発見されているのは大甕の器体にあたる破片である（図版５・６，第５図）。平均１㎝の厚さを有し，灰～鼠色の堅い焼成で自然釉を被るものもあり，通じて内外両面に叩きしめが施されている。表面には平行条線（第５図１～５・１２・１３）と格子目（第５図６～１１）の二種がある。内面にも平行条線（第５図１～５）と，車輪状放射線（第５図６～１３）の二種がある。両者を混用した状態もみられる。また放射線文叩きは径５㎝ほどの当て具に刻まれたものらしいが，７世紀前後の須恵器内面にみられる放射線文にくらべてやや粗いのが特徴である。内外面叩きしめのあと，内面ではさらにナデ仕上げを加えられた痕跡をとどめている。表面は回転カキ目調整が加えられたことを示すものもあるが大部分はカキ目痕はみられない。

焼土（図版７）　窯内や灰原から発見されているもので，不整形の粘土の焼土塊がある。上述した平行条線や格子目叩きしめ痕のある甕破片が焼着いているものが少くない。なかには餅状の粘土が二重・三重と重ね餅のようにくっついている状態もみられる。窯内焼成部床面が２８度の傾斜面をなす状態であるから，各種須恵器の窯詰めする際に安定させるために使用された即製の詰め物，すなわち焼台である。古墳時代の須恵器窯以来同様のものが発見されており，窯構造とともに伝統の永い生産技術がしのばれる。

２号窯跡付近で採集された資料が若干ある。椀（径8.1㎝，図版５－右端下，第４図１４）大甕片（図版５，第６図）など１号窯跡の出土品と同一技法のものがみられる。新しい器種として杯１点が検出された（図版５－右端上，第４図１３），口径１６.４㎝，高さ4.3㎝，底径１１.４㎝の平底である。削り仕上げの底面から外傾しながら直線的に立上る器壁の口唇は丸く仕上げられ，外側にヘラによるおさえが横線状にめぐっている。表面は比較的丁寧なナデ仕上げである。



第６図　苺田２号窯跡出土大甕片拓影

5. 結　　語

苅田窯跡の概要は１９６７年刊行の『日本の考古学』VI[1]に紹介したことがある。当時東，南九州では発掘調査された須恵器窯跡については鹿児島県川内市鶴峯３号窯跡[2]と宮崎県における本例以外に知られていないという実情であったからである。なかでも本窯跡が注目されたのは，９世紀以降の平安時代になると北部九州でも急速に須恵器生産窯跡が減少してゆく傾向がみられるので，その空白を埋める数少ない実例として注目されたからにほかならない。その後熊本県下における生産遺跡の総括的調査によって，９～１０世紀代に急激に須恵器生産が増大することが明らかになった[3]。この時期における熊本県下の製品は福岡県・鹿児島県にまで流通していることが知られてきたのである。

さて苅田窯跡（１号窯）は発掘調査の結果，推定復原長７ｍ前後，幅 1.4 ｍ，推定復原高８０㎝，傾斜角２８度の半地下式無段登り窯の形態をとるものである事実が明らかにされた。このような測定値でみるかぎり，８世紀代の須恵器窯跡と特別異なる点は指摘できない。窯幅も一様であり，傾斜角などからみても特別な新技術が加えられたと思われるふしも認められない。

ところが，生産された須恵器についてみれば，広口瓶，蓋，椀，甕（大型品＝貯蔵用，小形長胴品＝煮沸用），杯の器種が認定されたが，器壁を一様の厚さに仕上げるための回転ヘラナデ調整がみられるが，その技法は粗く，８世紀代までにみられたような入念な表面整形技法は省略されている。このような技法は９世紀後半頃から次第に顕著になってくるが，本窯跡の資料についてみれば，ロクロから切離すにあたって糸切技法はまだ現われていない。

以上のような器形や製作技法の特徴を示す事例をさがせば，佐賀県杵島郡北方町大崎・牧窯跡群[3]，熊本県北部の荒尾窯跡群[4]，南部の球磨窯跡群[4]などがあげられる。牧窯跡群では広口瓶，椀，甕，杯，皿などの器種があがっている。熊本県下の諸窯では，広口瓶，蓋，椀，甕杯，皿，高杯などがある。熊本県下の場合窯構造は無段登り窯で苅田窯跡と共通しているが牧窯跡群のうち３号窯跡は全長 3.０７ｍで円形平面の三室を連結したような特殊な形態であったと報じられている。また熊本県・北山浦Ａ窯跡では全長 7.５ｍ，幅 1.６㎝の徳利形プランを呈する無段登り窯で，傾斜角３０度を測る。母岩片などを粘土で固めた７段からなる焼成段が設けられ，広口瓶，盤，蓋などが並べられた状態で発見された。焼成途中で崩壊したために廃窯となったものであり，焼成部の下段寄りには広口瓶約２０個，上段寄りには蓋・盤約３０個が配置されてあったと報じられている。窯跡の構造，出土品，あいちかい時期に比定される点などで，苅田窯跡を復原的に考える上で最も参考となるであろう。以上の諸例

をあわせ考えて苅田窯跡群は１０世紀中頃より下らない時期の短期間に操業された須恵器窯であったと考えられる。このような山深いところで生産された須恵器がどの程度の流通圏をもっていたかは今後の検証すべき課題であるが，五ケ瀬川を利用しての流通経路などはまず有力な候補となるであろう。

註(1)　小田富士雄「歴史時代―九州」（『日本の考古学』Ⅵ）１９６７

(2)　河口貞徳・小田富士雄ほか『薩摩国府・国分寺跡』１９７５

(3)　佐賀県立博物館編『地下の遺宝 ― 解明されてゆく郷土の歴史―』１９７９

(4)　松本健郎ほか『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ― 須恵器窯跡・瓦窯跡・陶磁器窯跡 ―』（熊本県文化財調査報告第４８集）１９８０

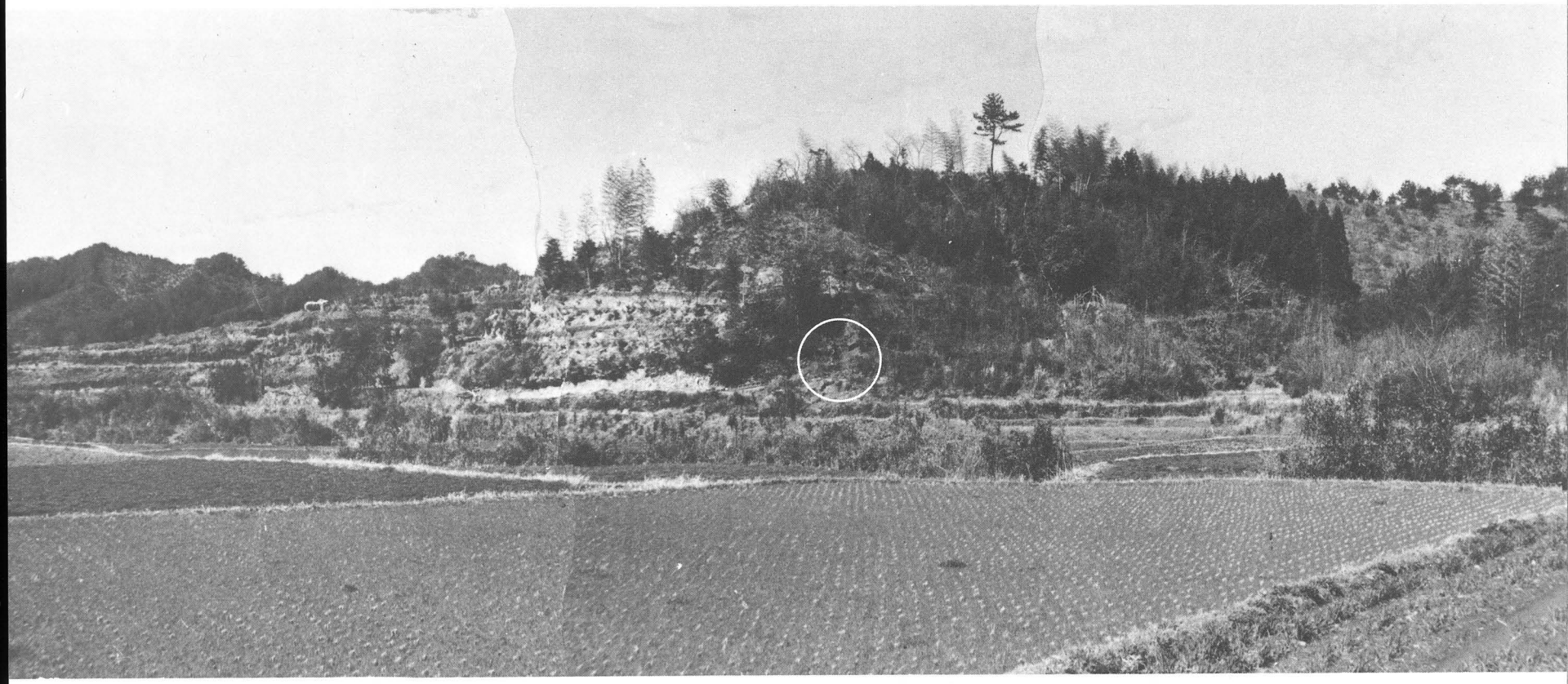
(5)　坂本経堯「小代山麓古窯址郡調査報告」（『肥後上代文化の研究』）１９７９

〔あとがき〕苅田窯跡の発掘調査以来１６年の歳月を経過してしまった。調査当時すぐにも報告書を発刊する予定で，周辺遺跡，遺物の調査とあわせて図面を浄書し，一部の原稿までまとめていたのであったが，県側の事情で延引してしまい今日にいたったのであった。今般県教委より改めて発刊の希望が寄せられたので、再度旧資料を検討して稿を起したのであるが，すでに当時の関係者のうち，前川威洋君，黒木清三郎氏は物故され，また栗原文蔵氏も埼玉県教委に去っており，倉卒の間に当初の予定にしたがって稿了することは不可能となった。そこで苅田窯跡にかぎって調査報告文を草して責めを果すこととした。あわせて物故された関係諸氏の霊にも捧げたい。なお本稿の作成にあたり，付図の浄書その他では武末純一（北九州市立歴史博物館），松永幸男（九州大学文学部大学院学生）両君の援助をうけ，さらに，連絡事務から印刷にいたるまで県教委文化課の北郷泰道、面高哲郎両君にお世話いただいたことを感謝申しあげる。（１９８２．１２．２８稿了）

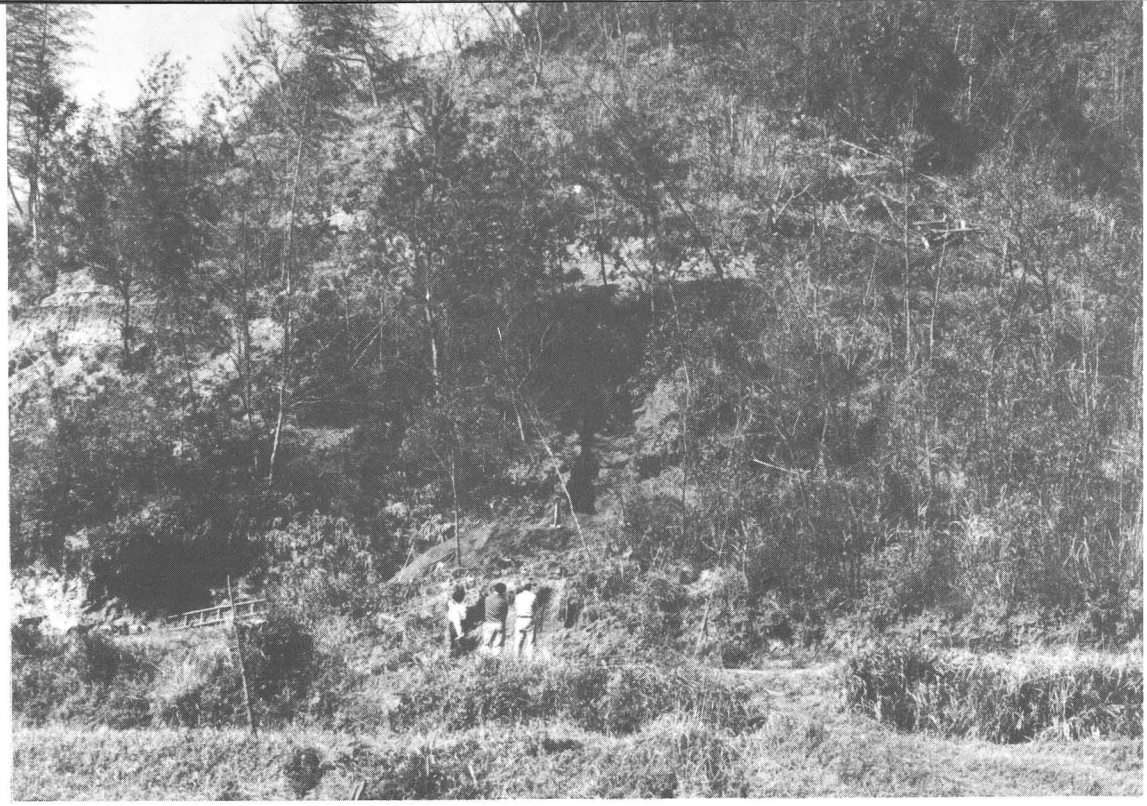
窯器園を
ます

一』

ぐに
高ま
今
であ
藏氏
とな
物故
未釉
け，
話い



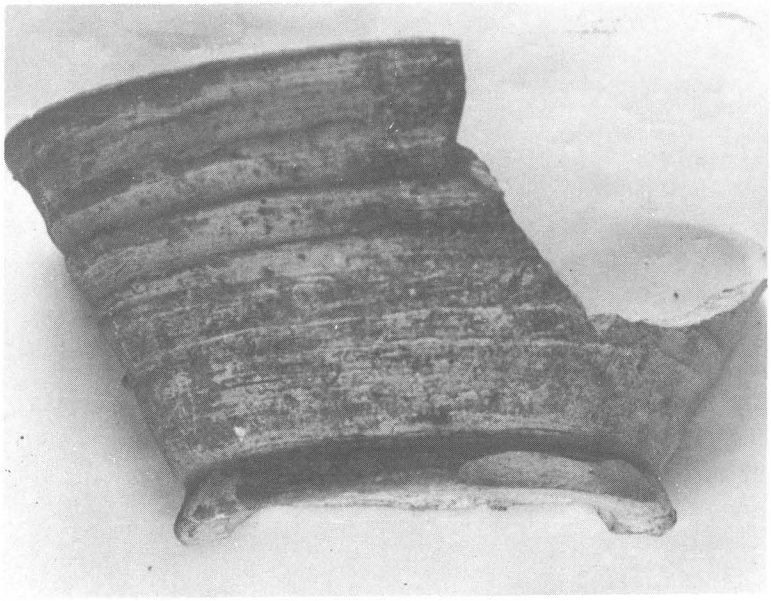
図版1　苺田窯跡遠望



図版2　苺田窯跡　遺跡

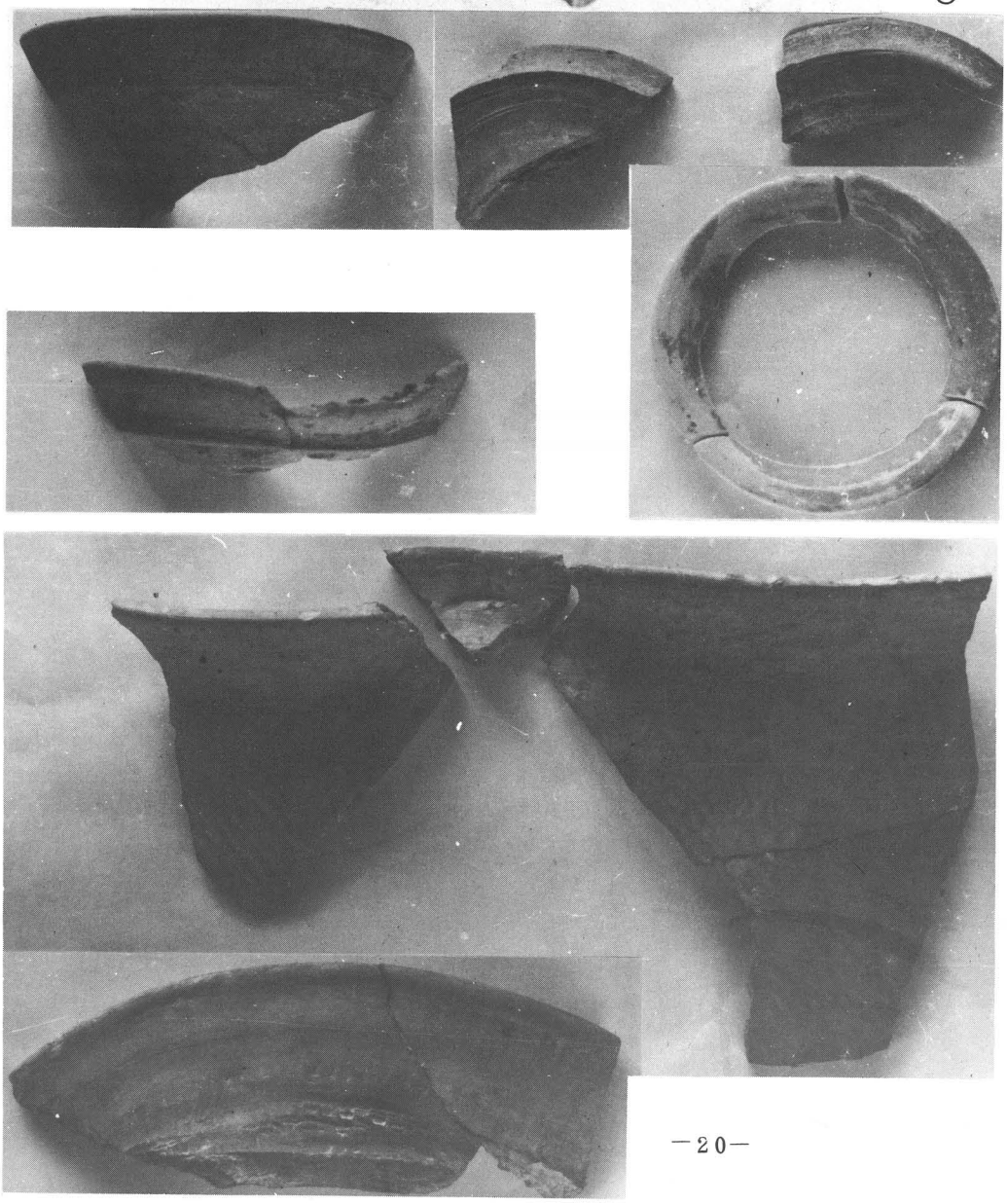
下・発掘調査終了時の窯跡遺構
上・遺跡近景

図版３　苺田窯跡　遺物（1）　椀・蓋



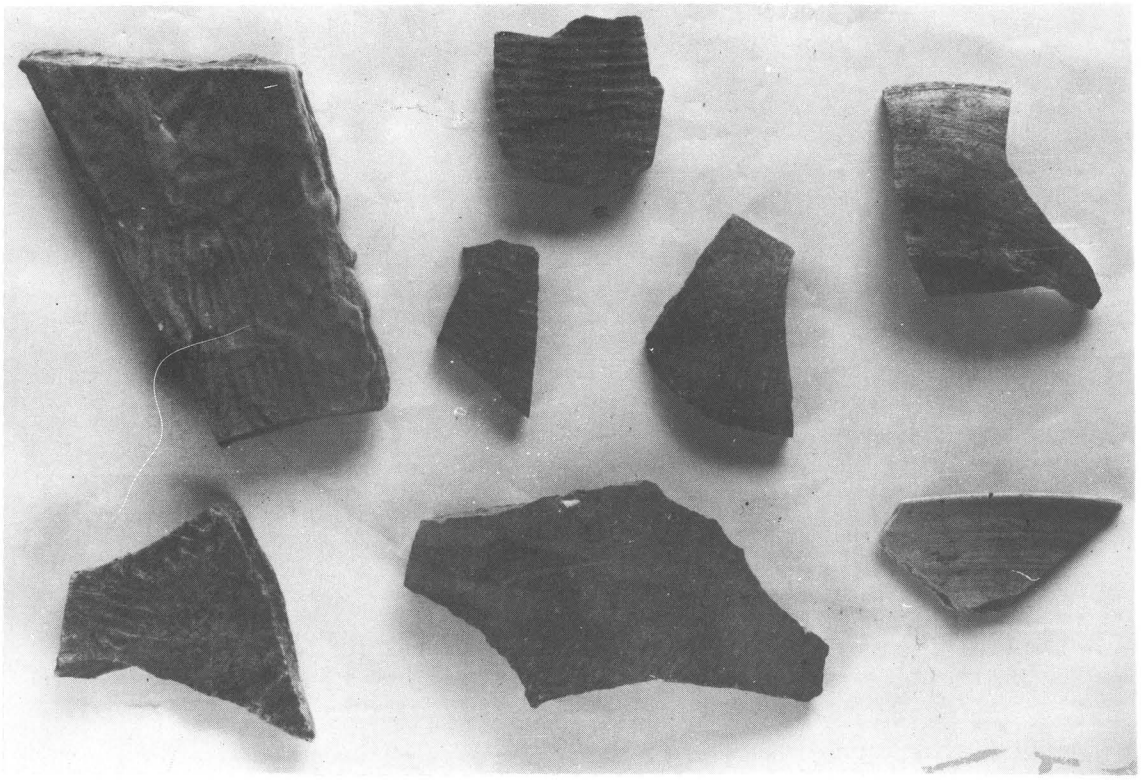
（右端は蓋）

図版4　苺田窯跡　遺物（2）広口瓶（1～6）・甕（7・8）



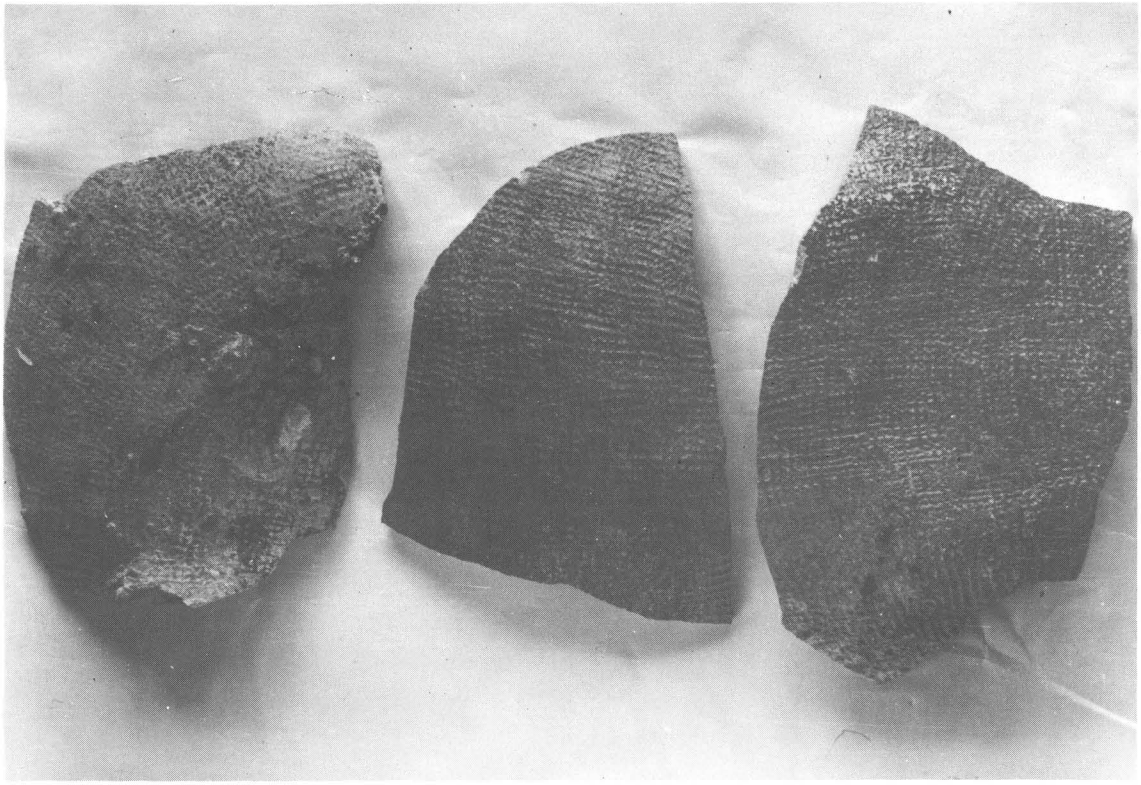
図版５　苺田窯跡　遺物（3）　椀・甕・杯

椀（最上段）・甕　　（１号窯跡）

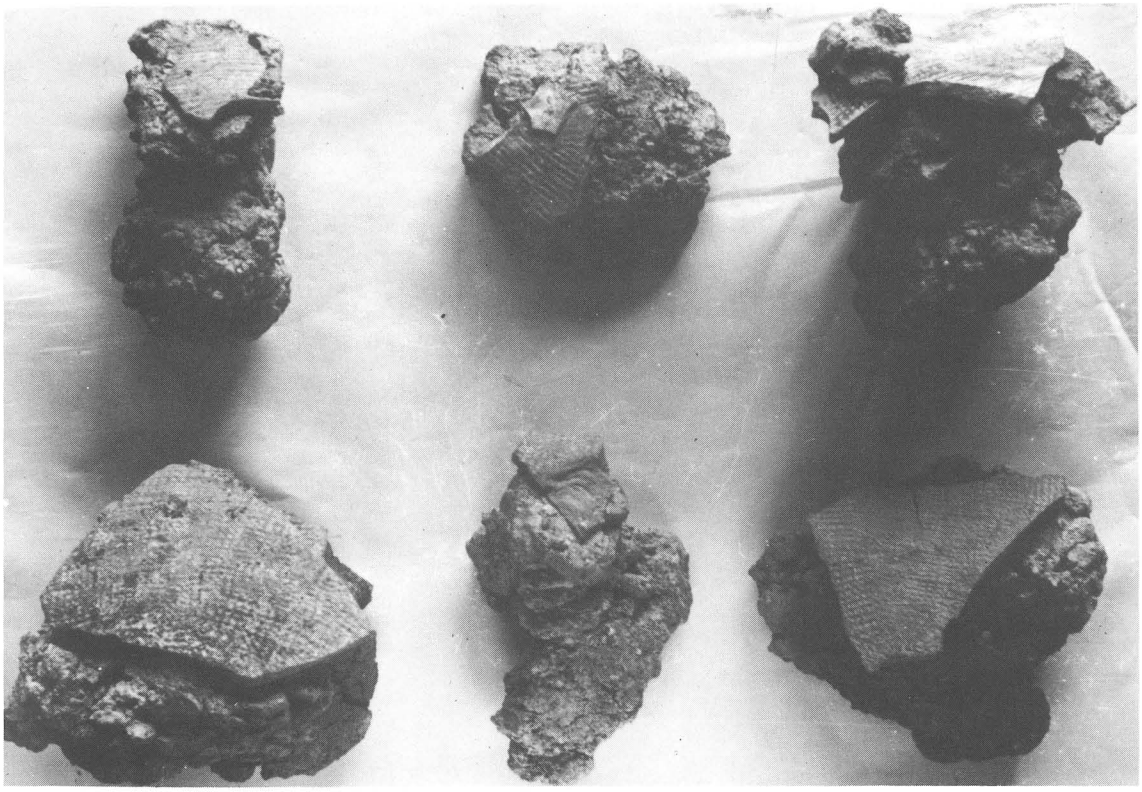


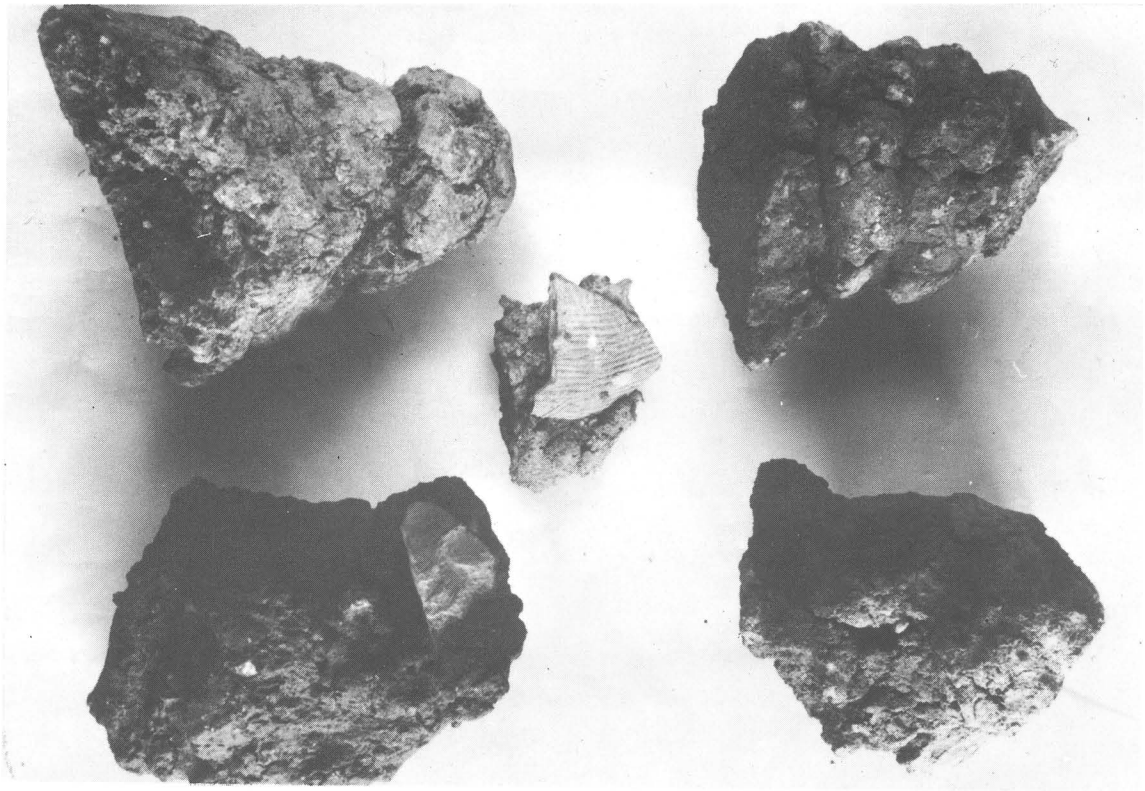
甕・杯（右端上）・椀（右端下）　　（２号窯跡）

図版６　苺田窯跡　遺物（4）　甕



図版７　苺田窯跡　遺物（５）　焼台





柏ノ木遺跡発掘調査報告

かやのき

北諸県郡高崎町大字大牟田柏ノ木

例　言

1. 本報告は昭和４９年１２月２２日から同月２４日まで宮崎県教育委員会が実施した北諸県郡高崎町大字大牟田柏(かや)ノ木遺跡緊急発掘調査の報告である。
2. 調査に当たっては，発掘作業員の準備など高崎町教育委員会の全面的な協力を得た。記して感謝申し上げる。
3. 遺物の実測については埋蔵文化財センター津隈久美子氏に協力いただいた。
4. 執筆・編集は宮崎県総合博物館埋蔵文化財センター主任主事岩永哲夫が行った。

本　文　目　次

Ⅰ　所　在　地 …… 29
Ⅱ　発見の契機と調査経過 …… 29
Ⅲ　調査の結果 …… 29
Ⅳ　結　　語 …… 38

挿　図　目　次

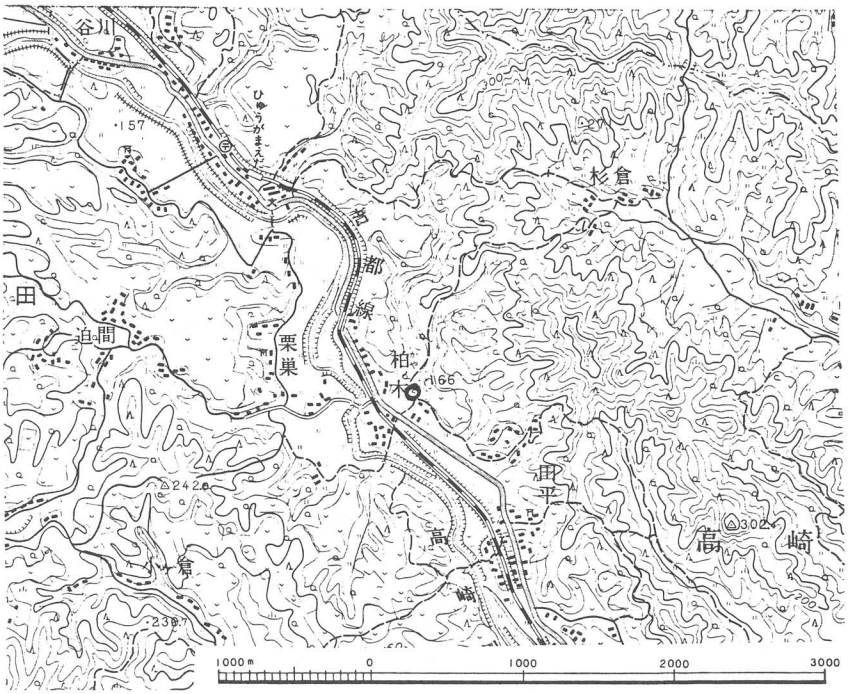
第1図　遺跡所在地 …… 29
第2図　柏ノ木遺跡周辺図 …… 30
第3図　住居跡実測図 …… 31
第4図　縄文土器実測図 1 …… 32
第5図　〃　2 …… 33
第6図　〃　3 …… 34
第7図　〃　4 …… 35
第8図　縄文土器底部実測図 …… 35
第9図　トレンチおよび付近出土土器実測図 …… 37

図　版　目　次

図版1　(1)遺跡付近風景 …… 41
　　(2)発掘風景 …… 41
図版2　(1)発掘作業風景 …… 42
　　(2)遺物出土状況 …… 42
図版3　縄文土器(1) …… 43
図版4　〃　(2) …… 44
図版5　土師器，須恵器 …… 45

Ⅰ　所在地（第１図）

北諸県郡高崎町大字大牟田柏（かや）ノ木



第１図　遺跡所在地（○印）

Ⅱ　発見の契機と調査経過

宮崎県が施行する広域営農団地農道整備事業の工事中に多くの土器等が出土しているとの旨，高崎町教育委員会黒木昭三氏から県文化課に報告があった。

県教育委員会においては，早速緊急発掘調査として対処することになり，昭和４９年１２月２２日岩永が現地に赴いた。

調査は昭和４９年１２月２２日から２４日までの３日間，黒木昭三氏とともに実施した。

Ⅲ　調査の結果

新設農道の工事区内から縄文時代後期の住居跡（第２・３図）が発見されたが，御池ボラ

層にまで掘り込んでいるため，残存状況は良いものではなかった。住居跡は方形状を呈し，２８６×２７０㎝の規模である。壁面上部は削平されているが，現状では約５０㎝を測る。

また，遺構は確認できなかったが，住居跡の南５ｍに設定したトレンチから土師器，須恵器片が出土した。

遺　　物

(1)　縄文土器（第４～８図）

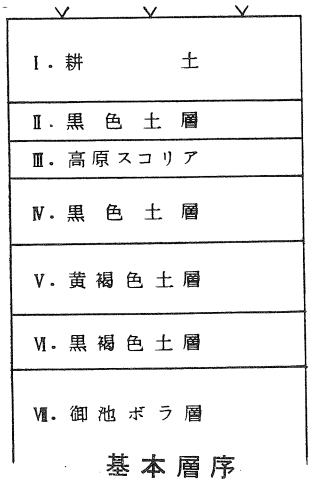
縄文土器は住居跡出土が大半を占め，Ａ類からＱ類まで１７分類できる。

Ａ類（第４図１）

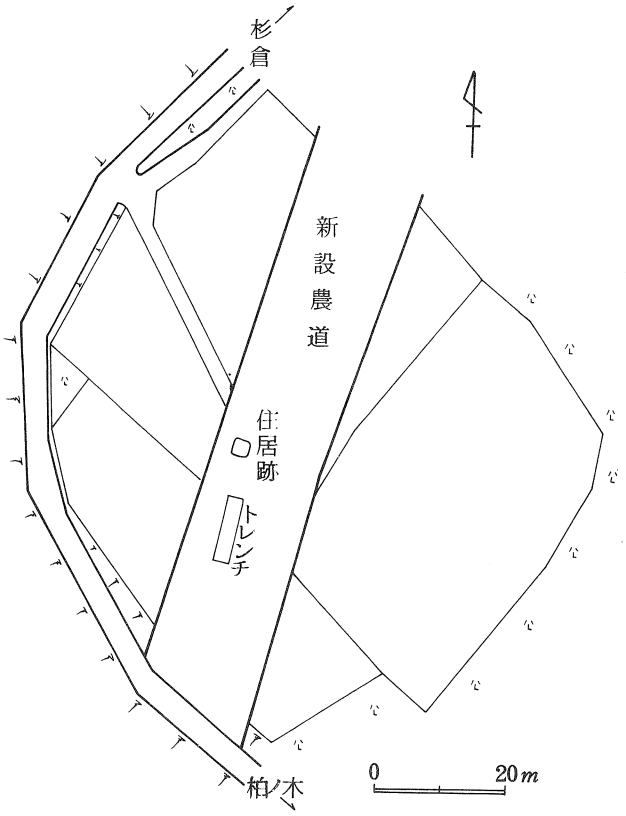
口縁部が外反した平縁の深鉢形土器である。口唇部に凹みをもち，頸部を中心に棒状施文具によると思われる凹線文を横走・斜走させている。屈折部から上部はやや太目，下部は細目の凹線である。口唇部は肥厚し，厚さ１１㎜，頸部は薄く７㎜を測り，胴部にかけて厚みを増している。器面調整は内・外面ともに粗い。焼成良く，暗褐色を呈している。

Ｂ類（第４図２，３，２１）

やや深めの凹線を施した平縁の土器である。２は平らな口唇部に部分的に円形刺突文，外面には平均した太さの凹線を施した焼成良好な黄褐色土器である。器面調整は粗い。



基本層序



第２図　柏ノ木遺跡周辺図

C類（第4図4～8）

口縁部が波状を呈し，口唇に大きめの刻みを施している一群である。4は頸部屈折し，外反している。波形の山の部分に三ケ所丸い施文具で押圧している。頸部下には返り文，先端の曲がる凹線文を施している。器厚8～9㎜。焼成良好な暗褐色土器である。5は口縁端が極めて肥厚している。4に同じく山の部分に3本の刻みをやや斜めに押圧している。文様は先端の曲がる凹線を施し，X字状の構成である。6はわずかに波状を呈するものとみられ，同様に口唇部を押圧している。しかし，押圧の窪みと窪みの間の隆起部分に貝殻縁による2本の押圧文を施している点に特徴がある。また，口縁端に近く，上から下へ押し引く列点文を施文し，その下部に凹線文を横走させる文様構成をなしている。7，8は口唇部に何個もの刻みを入れた土器であり，口縁端部を貼り付けているのではないかとみられるものである。

D類（第4図9～20，22，23，第5図1，2）

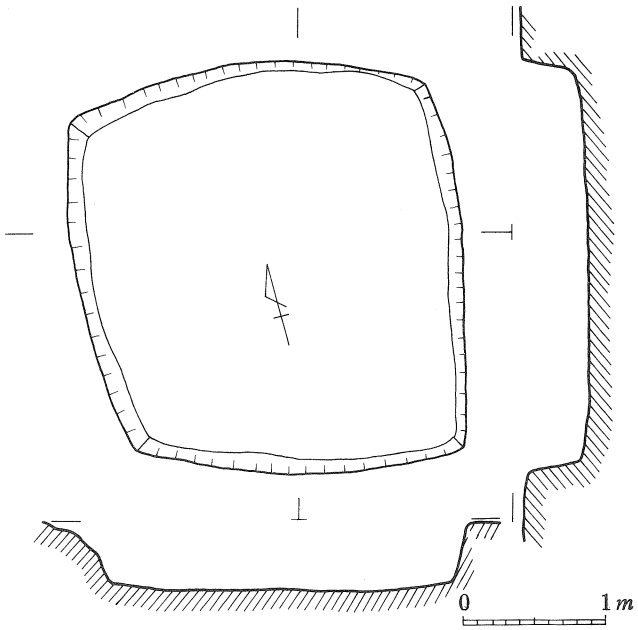
直線，曲線等の凹線文を施した胴部の一群であり，これらはA～C類の胴部にあたるものと考えられる。

E類（第5図3，4）

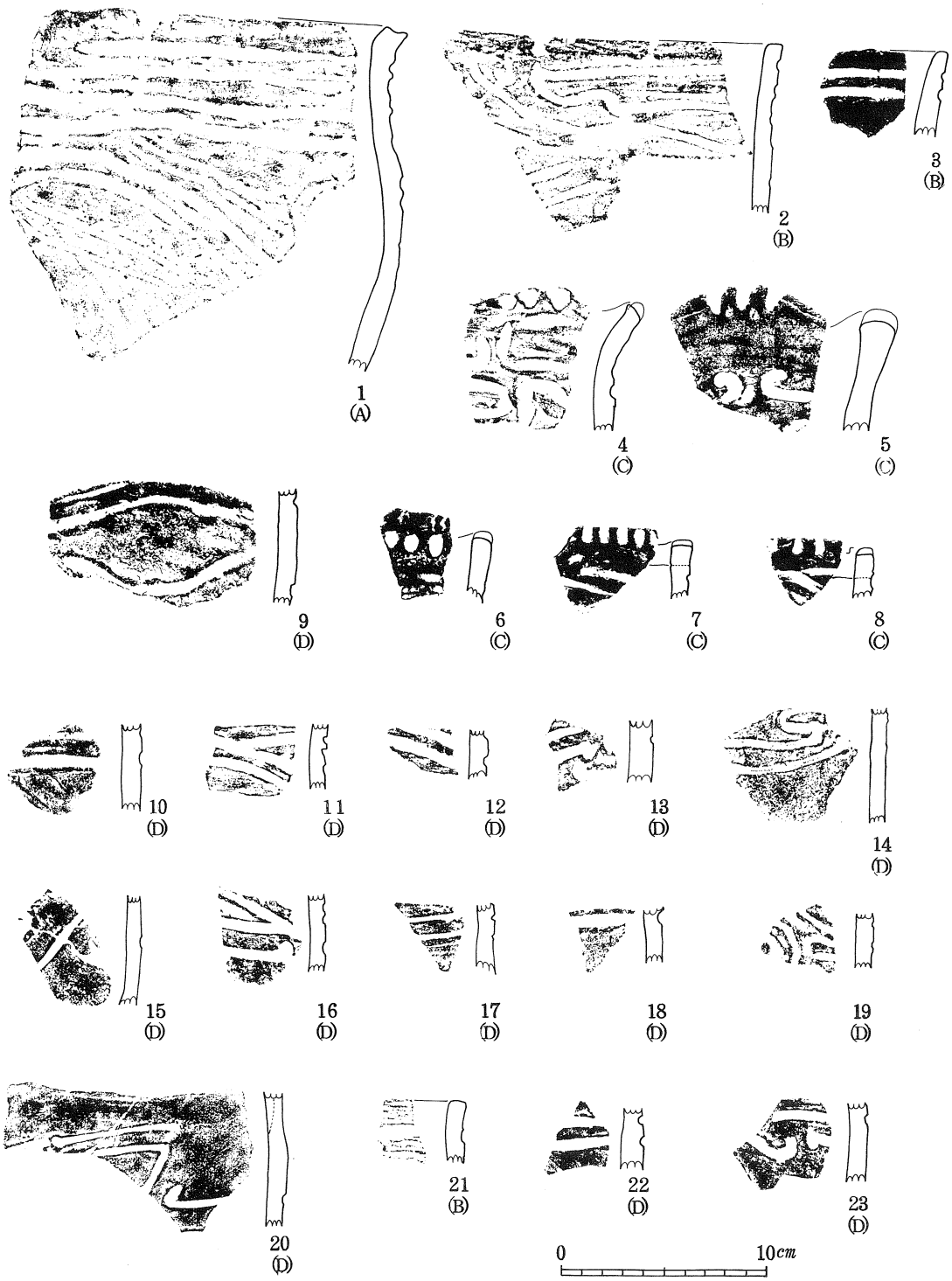
凹線は浅いが端正な文様的構図の頸部から胴部にかけての土器片である。3は頸部直下とみられ，横に浅い凹線を施した後にその凹線に接して下方に同じ凹線を斜行させている。焼成良く，内外面とも暗褐色を呈している。器厚6～7㎜。部分的にススが付着している。4は3に類似しており，おそらく同一個体のものであろう。

F類（第5図5～8，12）

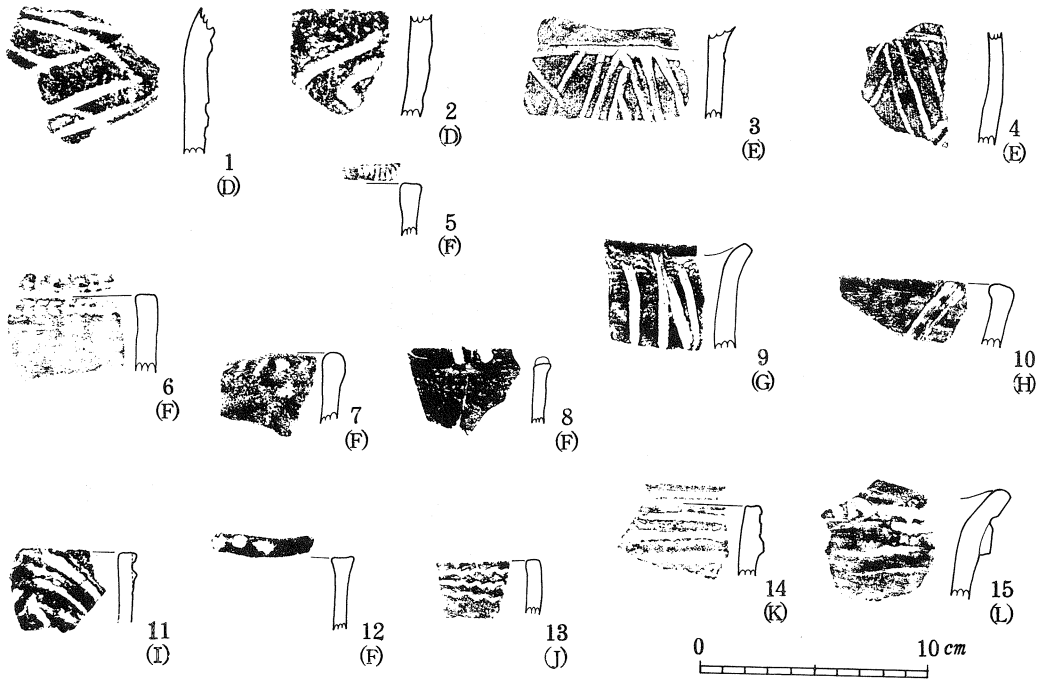
口縁端若しくは口唇部に施文する土器を一括した。5は平らな口唇部に押型様の文様を有している。焼成良好な黄褐色を呈した小破片である。6は直立する口縁部で口縁端および口唇に半截竹管様施文具で左から右に一列だけ押引きしている。7は器面風化が著しく，



第3図　住居跡実測図



第4図　縄文土器実測図1（21～23は表採、他は住居跡出土）



第５図　縄文土器実測図２（９は表採、他は住居跡出土）

焼成も良いものとは言えないが，肥厚した口縁端にヘラ状施文具による刺突文を施している。８は堅緻な薄手土器で口唇部に深く棒状文具による押圧刻み目を施している。１２は口縁端が肥厚し平らな口唇部と鋭角をなしている。口唇部には円形の刺突文を施している。焼成良好。

Ｇ類（第５図９）

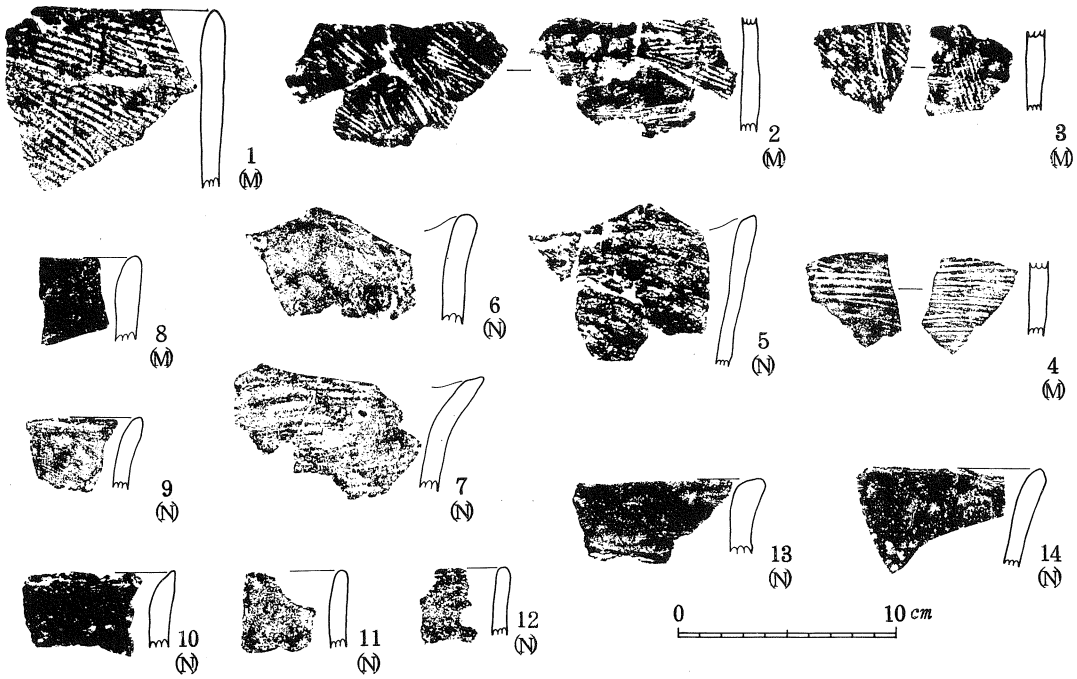
１点だけであるが，口縁端に近い部分が強く外反している。文様は半截竹管様の施文具で斜めに条痕を付しているが，その状況は雑である。内・外面ともに黒褐色を呈している。

Ｈ類（第５図１０）

口唇部の整形によって口縁端が内側に張り出している。器形は若干内湾気味を呈する。ヘラの押引きによって幅広い条痕を斜行させている。焼成良好，褐色の土器である。

Ｉ類（第５図１１）

平端な口唇部をもつ直立口縁部である。貼り付け器面に凹線文を施している。貼り付けは器面調整上必要とされたのか，焼成の度合いによってそう見えるのか定かでない。



第６図　縄文土器実測図３（住居跡出土）

Ｊ類（第５図１３）

口縁上部に三条の沈線を平行に引き，同一ケ所で上下に押圧して文様としたものである。薄手で若干内湾している。焼成良好，褐色を呈する。

Ｋ類（第５図１４）

口縁部がく字形に近く肥厚している。ヘラにより口唇部に一条，口縁上部に二条の条痕を施している。器形的には波状口縁を呈するようにも思われる。焼成良好，褐色。

Ｌ類（第５図１５）

貼付突帯をもつ波状口縁土器である。突帯の上位に棒状施文具により上方向，横方向に雑な凹線を施している。器形的には市来式に類似している。焼成良好，外面は暗褐色をしている。

Ｍ類（第６図１～４）

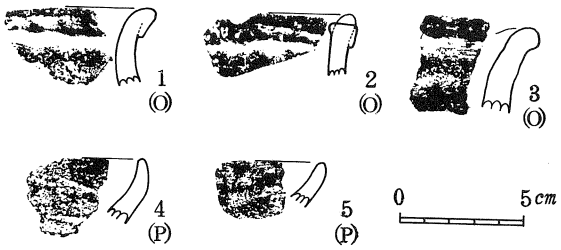
器面の全体に調整痕として条痕が明瞭に残っている一群である。

１は口唇部の尖る直立した口縁部で，貝殻による条痕を斜走させている。内面はハケ調整である。器厚８～１１㎜。部分的にススの付着がみられる。焼成良好，外面暗褐色。２，３

は同一個体と思われる。施文具は不明確であるが，条痕を横・斜走させている。内面も同様である。

N類（第6図5～14）

無文の口縁部で波状口縁（5～7）と平縁（8～14）に分かれる。直立するもの，外傾のもの，外反するものの3種がある。いずれも焼成良好。



第7図　縄文土器実測図4（住居跡出土）

O類（第7図1～3）

口縁端を外に折り曲げることによって口縁部を肥厚させた土器である。1は強く外反し，丸い口唇部をもっている。2も同じ成形であるが，外反度は弱く，口唇部に指頭による押圧がみられる。3は1，2ほど折り返しは明瞭ではない。また，内から外への貼り付けともみられる。いずれも焼成良好，褐色を呈している。

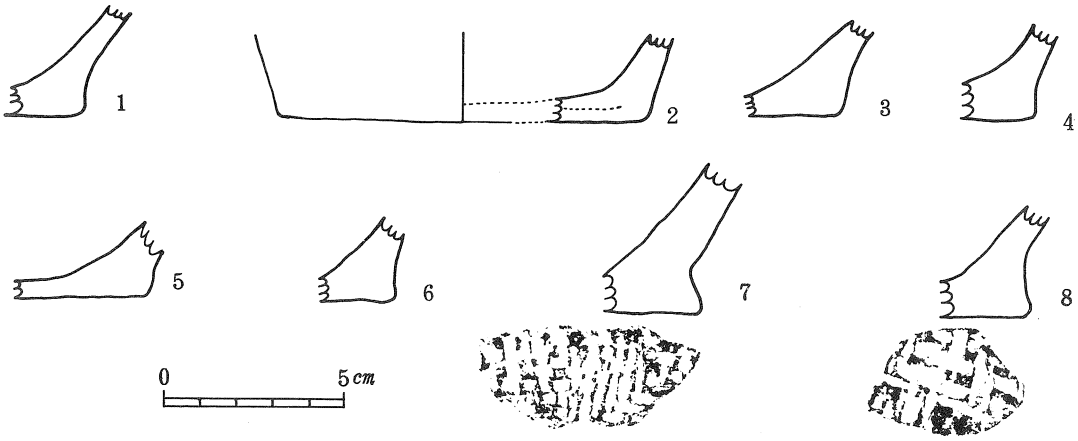
P類（第7図4，5）

この形態は2点のみであるが，口縁端が強く内湾し，浅鉢ではないかと思われる。

Q類（第8図1～8）

底部を一括した。すべて平底でA類からO類までの底部を構成するものと考えられる。7，8は網代底である。

以上，縄文土器を17類に分類したが，ほとんどの土器は住居跡に伴うものと見て良い。概して堅緻なものは少なく，文様施文においても粗い。また，多類に分けたように，文様の種類も多種にわたっている。その中で，最も多くを占めるのは凹線文を主体にしたものであ



第8図　縄文土器底部実測図（7は採集品、他は住居跡内出土）

り，後期の特徴を示している。

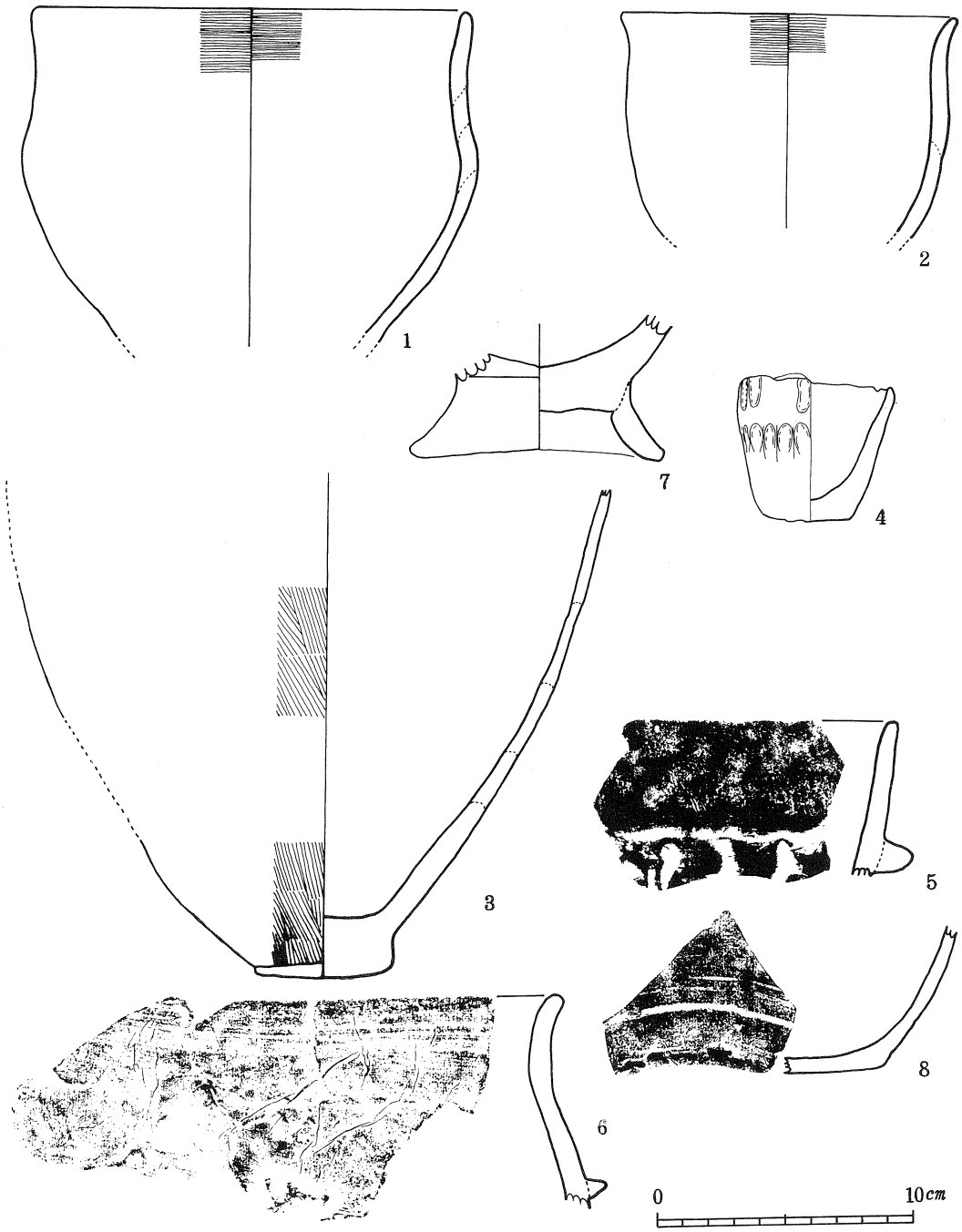
南九州の縄文後期土器は西北九州系と貝殻施文具に特徴的な南九州系との接触融合がみられ，更に地域的に各々その実現化において複雑な個性を有し，斉一的ではない。型式化されている九州縄文後期土器の中にそのものを柏ノ木遺跡においてみることは難しい。出土土器群は少量ながらそれぞれに特徴をもっている。このことは日向南西内陸部の地理的環境が産んだ文化内容の複雑さをも示すものと言えよう。少片が多いことから器形の全体についても明確なものがなく，住居跡を含めて時期的結論を提出することは控えておくが，南九州地方における大まかな系統からうかがい見るならば，岩崎上層式，下層式，指宿式等の類似点などから南九州後期前半の時期比定はできよう。

(2) 土師器（第9図1～7）

トレンチ内および周辺出土のものである。甕形土器（1～3，5～7），手づくね土器（4），ほかに長頸壷と思われる丹塗土器，椀形土器の胴部片の出土がある。

1は胴部が張り，ややくびれながらまっすぐに立ちあがっている。口径17㎝，最大径部は肩部にあり18㎝を測る。口縁部はハケメ仕上げ，肩部以下はナデ仕上げである。口縁部にススが付着している。2は胴部の張りがなく，わずかに外反した口縁をなしている。口径13㎝の小型である。調整は1と同様であり，ススの付着もみられる。3はやや不安定な厚めの平底をなし，底部から開きながら胴部へ続く甕形と思われる土器である。底径5.5㎝。器面の風化が著しいが，ハケメ調整であろう。5，6は頸部に断面三角形の凸帯をもち，刻みを入れている。口縁部は，5はまっすぐに立ちあがっているが，6はゆるやかに外反している。7は成川式甕形土器の特徴とされる中空の脚台底部である。4は小型の手づくね土器で口径6㎝，底部3.5㎝をはかる。底部が厚く，口唇部へと急激に薄くなっており，指調整痕が明瞭である。

以上，述べた土師器に伴う遺構は状況的に確認できなかったが，周辺にその存在を予測することはかたくない。出土品の器形，胎土，焼成等から南九州に分布の中心をもつ「成川式土器」を構成する一群であることが分かる。「成川式土器」は弥生時代の土器であるとされていたものであるが，以前から古墳時代にまでの時代幅が考えられること，細分化の可能性があり，その必要性があることなど言われてきた。最近，その細分化が鹿児島県を中心とする諸学によって試みられ，いくつかの論考が発表されている。多々良友博氏のⅦ期細分案（注1）に依ると，柏ノ木出土はⅥ～Ⅶ期に相当すると考えられる。しかし，長頸壷の丹塗に関しては



第９図　トレンチおよび付近出土土器実測図

推定される器形からもっとさかのぼる可能性が強く，全ての出土土器を同一時期視することはできない。

(3)　須恵器（第９図８）

表採品として，須恵質の底部片が一点採集されている。部分的であり，時期比定はできない。

Ⅳ 結　　語

柏ノ木遺跡は時期的に縄文時代後期と土師器の時期の複合遺跡であった。

本県における縄文後・晩期の遺跡で調査されたものは意外に少ない。後期の串間市下弓田遺跡，東諸県郡綾町尾立遺跡，都城市成山遺跡，晩期の西臼杵郡高千穂町陣内遺跡などであり様相把握さえ未だ不十分の状況である。そのような中で，工事中に発見され，調査に限界があったとは言うものの柏ノ木遺跡で住居跡を確認できたことは意義深いことであった。

高崎町には他に数多くの縄文時代遺跡の所在が確認されている。その内容は次第に明らかにされていくであろうし，大淀川の支流高崎川流域の遺跡群解明に期待がもたれる。

最近，時期的幅の広い「成川式土器」について，鹿児島県を中心として細分化が試みられている。「成川式土器」の分布圏は薩摩，大隅，日向・肥後の南部に限られ，南九州特有の地域性の強い内容として注目されるものである。

宮崎県においてはその分布は現在までのところ，諸県地方・霧島山麓を中心とした地域に限られている。出土地は，えびの市灰塚遺跡(注2)，西諸県郡野尻町大萩遺跡(注3)，北諸県郡高崎町上示野原遺跡(注4)，同町栗巣上原遺跡(注5)，下原遺跡(注6)，今村遺跡(注7)，都城市丸谷第1遺跡(注8)ほかであるが，多くは「成川式」に視点を当てて編年作業をすすめるには乏しいものがある。ただ，最近の宮崎県内における発掘調査例として弥生中・後期から古墳初頭にかけての遺跡が相ついでいることから近い将来南部九州のあり様についての把握が可能となろう。ことに，丸谷第1遺跡，大萩遺跡，都城市祝吉遺跡(注9)などは良好な遺跡であり，東九州系，南九州系の接触地域としての様相を土器群にみることができ，南西部における弥生終末から古墳初頭にかけての政治的・文化的変動の反映として重要な課題を提示しているようである。

おわりに

先に報告書は刊行されたが（宮崎県文化財調査報告書第２２集），同じ成川系土器を出土した「高崎町上示野原遺跡」の発掘調査にあたり，町教委黒木昭三氏をはじめ，次の町文化財保存調査委員の方々に参加していただき多大な協力を得た。ここに記して感謝申し上げます。

高崎町文化財保存調査委員，永友幸守，三雲清則，荒場秋一，今村泉の各氏。

“注”

1. 多々良友博「成川式土器の検討」鹿児島考古第１５号　１９８１鹿児島県考古学会
2. 宮崎県教育委員会「灰塚遺跡」九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(2)　１９７３
3. 〃　「大萩遺跡(1)」瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　１９７４
   「大萩遺跡(2)」　同上　１９７５
4. 〃　「上示野原遺跡」宮崎県文化財調査報告書第２２集　１９８０
5. 〃　「栗巣上原遺跡」九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(3)　１９７９
6. 同　上　書
7. 〃
8. 〃
9. 都城市教育委員会「祝吉遺跡」都城市文化財調査報告書第１集　１９８１
   「祝吉遺跡」　〃　第２集　１９８２

その他参考文献

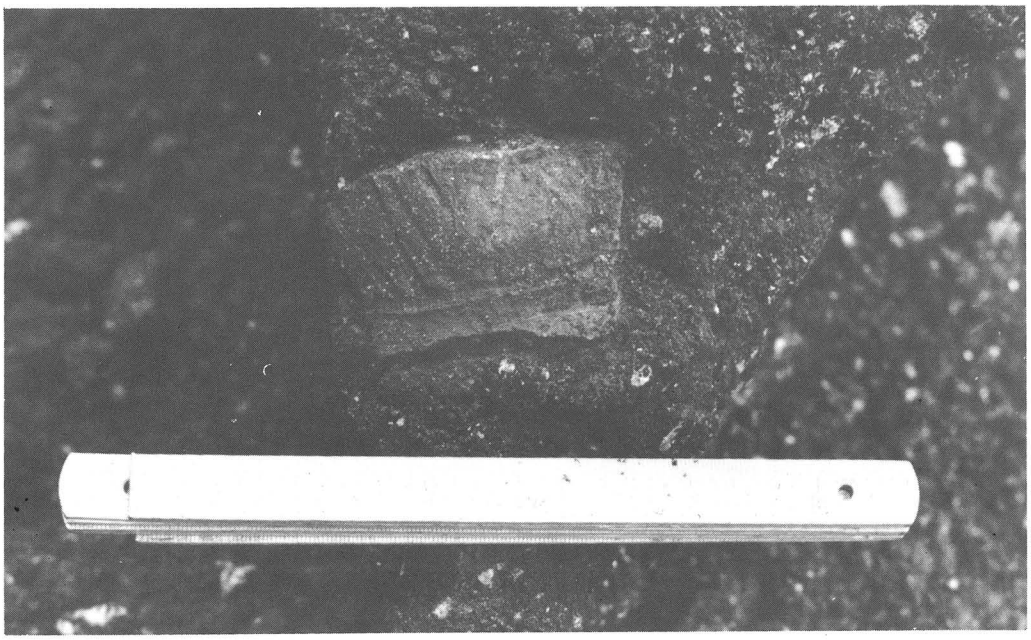
前川威洋「九州縄文文化の研究」　昭５４

池畑耕一「成川式土器の細分編年試案」鹿児島考古第１４号　１９８０
鹿児島県考古学会

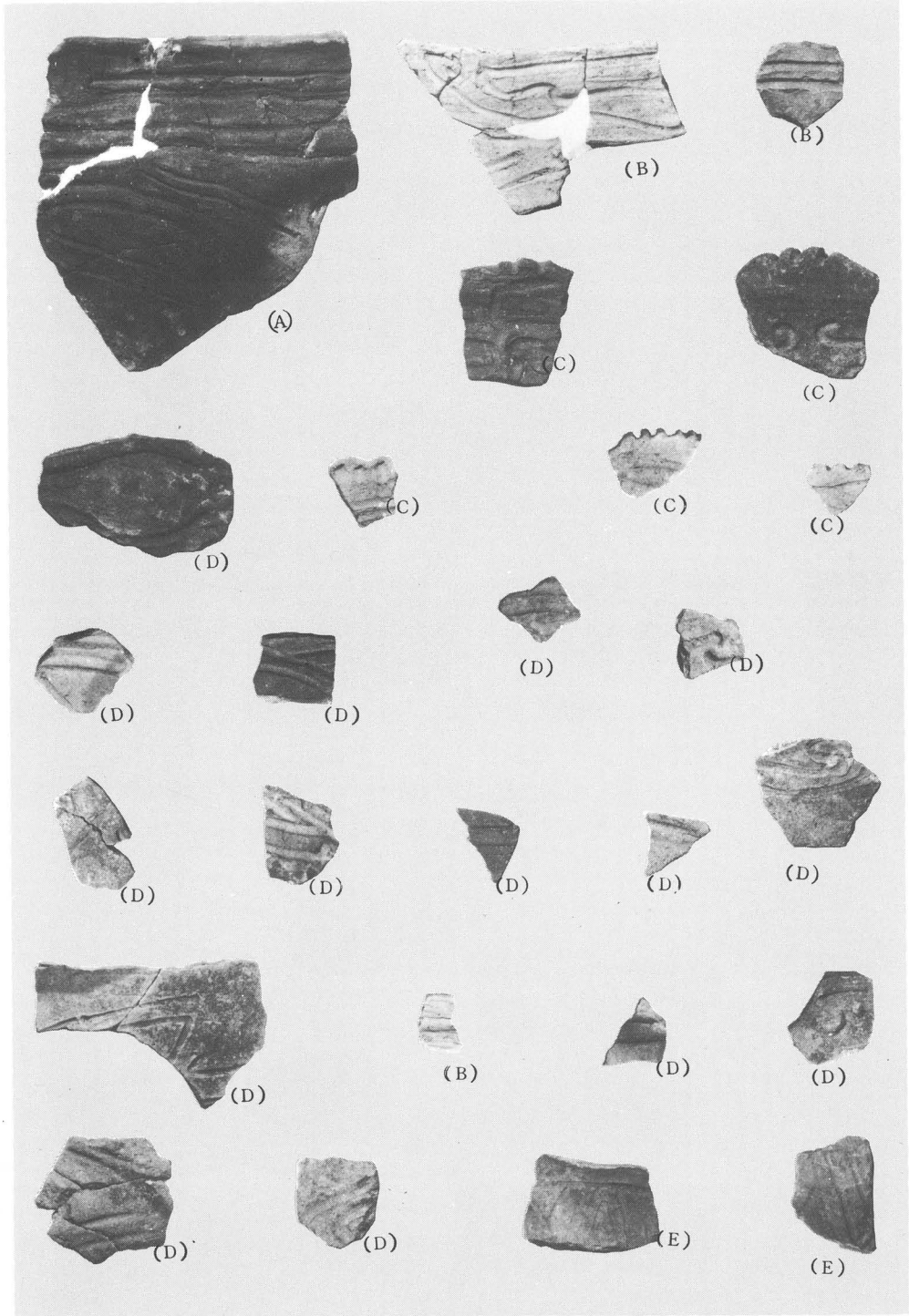
(1) 遺跡付近風景

(2) 発掘風景

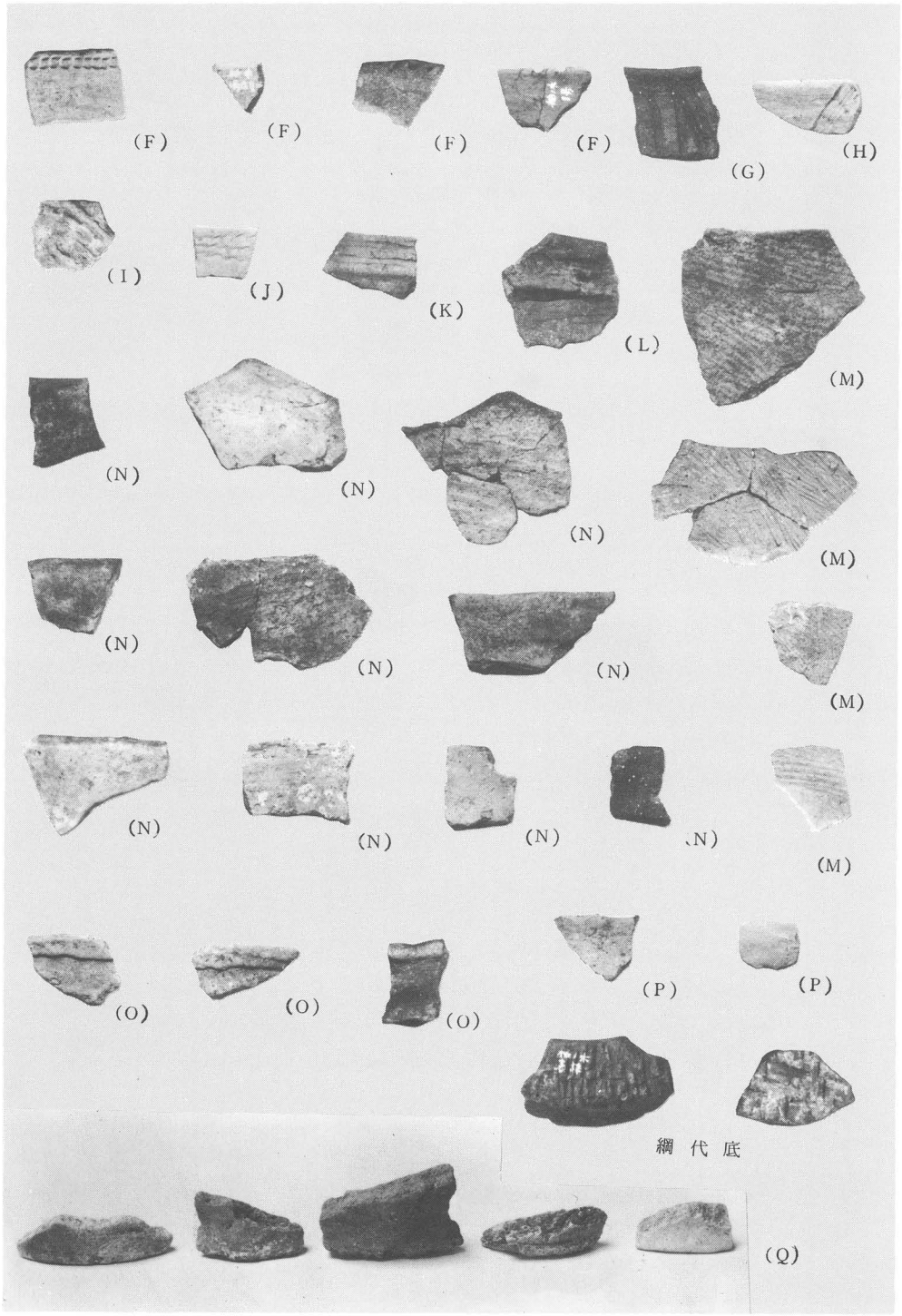
（1） 作 業 風 景



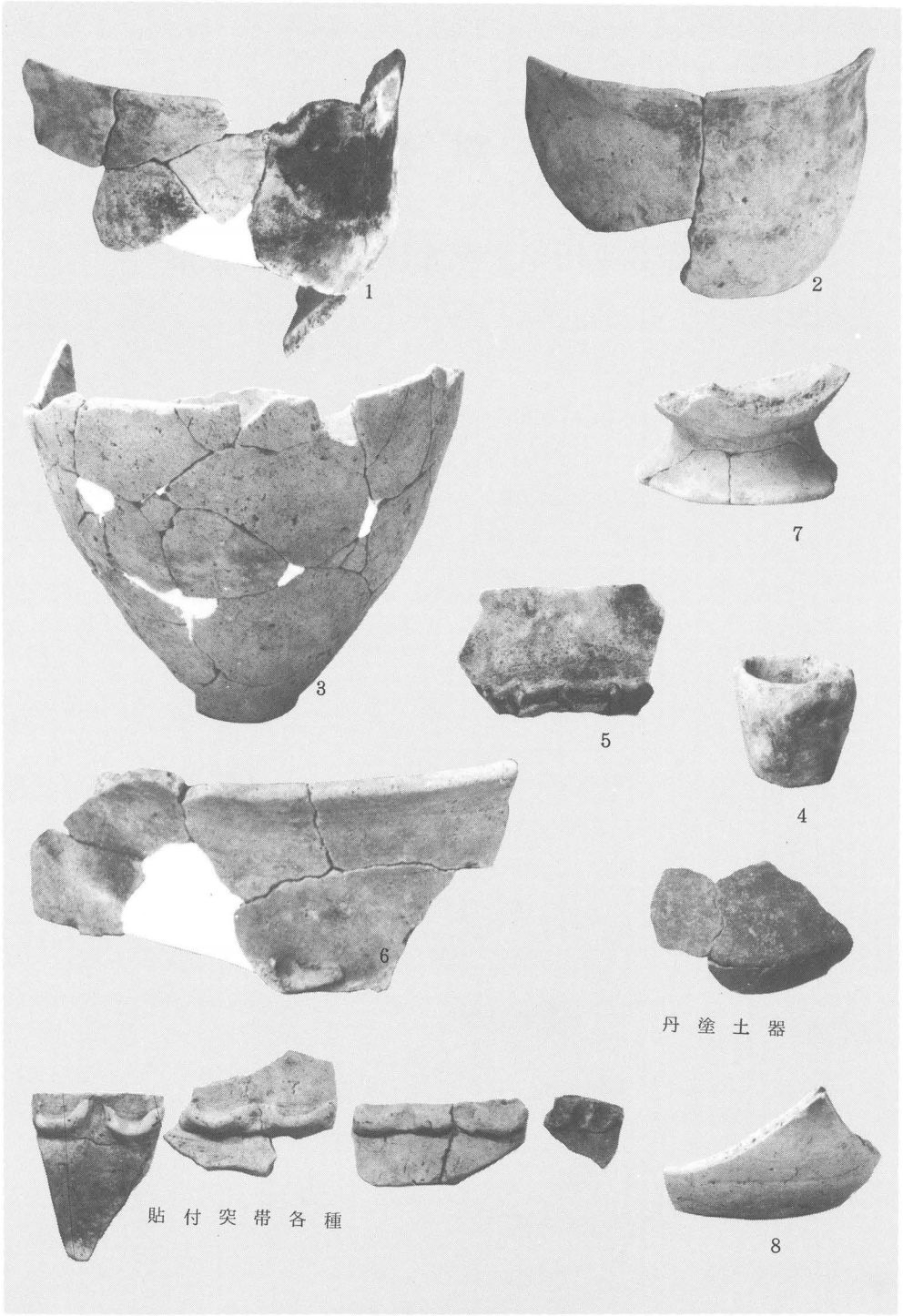
（2） 遺 物 出 土 状 況



縄 文 土 器 (1)



縄文土器（2）



土師器・須恵器（番号は第9図に対応）

北迫（きたざこ）遺跡発掘調査報告

北諸県郡高崎町大字大牟田字北迫

例　　言

1. 本報告は，昭和５７年２月２３日から２７日まで高崎町教育委員会が実施した北迫遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は，県文化課主事面高哲郎が担当した。
3. 出土遺物は，高崎町教育委員会で保管している。
4. 本報告の遺物実測は，蓑方政義，酒井晴子氏が行い，トレース，執筆，編集は面高があたった。

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに
1.　遺跡の環境 …… 51
2.　調査に至る経過 …… 52
Ⅱ　調査の概要 …… 54
1.　土　層 …… 55
2.　遺　構 …… 55
3.　出土遺物 …… 56
Ⅱ　ま と め …… 59

挿　図　目　次

第１図　高崎町内の遺跡分布図 …… 53
第２図　地形図及びトレンチ配置図 …… 54
第３図　第５トレンチ東壁土層図 …… 55
第４図　出土遺物　(1) …… 56
第５図　出土遺物　(2) …… 57
第６図　出土遺物　(3) …… 58

I　はじめに

1.　遺跡の環境

北迫遺跡は，北諸県郡高崎町大字大牟田字北迫に所在する。高崎町は，霧島山の北東裾に開ける町である。町内の地勢は，丘陵，台地，沖積地等から成り，可耕地となる台地や沖積地など平坦地の比率はあまり高くない。特に沖積地は，丘陵や台地の間を南東へ流路をとる高崎川，木下川，炭床川などの両岸に開けるのみである。

高崎町内の遺跡は，町教育委員会文化財担当黒木昭三氏により縄文時代から歴史時代の遺跡が約６０ケ所確認されている。

旧石器時代の遺跡は，当地方が御池軽石層（御池ボラ）などの霧島山の火山灰等に厚く覆われているために発見されにくいが，池山口遺跡出土のボラ・ストーンは旧石器時代のものと言われている。縄文時代の遺跡は，１６ケ所確認されている。楕円押型文土器を出土した砂子田遺跡[1]，縄文後期前半の沈線文土器を出土する権現ケ宇都遺跡，柏ノ木遺跡[2]，後期後半の黒色磨研土器を出土する宇都口遺跡などがある。宇都口遺跡は，遺物の散布状態から集落の存在が予想されている。弥生時代の遺跡は，河川沿いに発達する河岸段丘上などで発見されている。昭和５１年調査された今村遺跡では，前～中期の凸帯文土器が出土しているが[3]，その遺跡については，詳細は不明である。

古墳時代の遺跡は，塚原古墳群[4]，横尾地下式横穴群[5]，横谷原村上地下式横穴群[6]，日守地下式横穴群[7]などの墳墓の他１０数ケ所の散布地が知られている。当地の地下式の構造は，平入りの北・西諸県に多く見られるタイプである。北・西諸県の地下式は，構造・副葬品等が宮崎平野部の地下式を差異が認められる[8]。地下式横穴により地域性の示される北・西諸県地方において，前方後円墳は，塚原古墳群と高城町牧原古墳群[9]の２古墳群のみで，このことは，当地方の古墳文化を考えるうえでも注目される。

高崎町の古墳時代の墳墓は，地下式横穴に代表されるが，当時代の集落の調査例は，昭和５０年調査された上示野原遺跡がある[10]。上示野原で検出された竪穴式住居跡は，長方形，隅丸方形プランである。２号住居跡は，隅丸方形プランで床面積が約８０㎡と予想されている。内部施設として間仕切り的機能を有する突出部をもつが突出部をもつ住居跡は，近年，野尻町大萩[11]，都城市丸谷第１[12]，祝吉[13]，宮崎市学園都市[14]，新富町新田原[15]等の弥生中期後半から古墳初頭にかけての遺跡で発見されている。上示野原の例は，弥生からの系譜のうえに位置づけられると思われる。突出部をもつ住居跡は，宮崎中央部以北では，発見例

の少ないタイプであるが，この分布状態と地下式横穴の分布とが類似することは興味深い。

歴史時代の遺跡は，平安前半の越州窯青磁碗を出土した政所第2遺跡[16]，中世と推定されるカマドが検出された下原遺跡等[17]がある。

高崎町内に所在する60数ケ所の遺跡の中で，調査された遺跡は少ないが，この少ない調査例の中で貴重な資料が得られており，今後の調査：研究を期待したい。

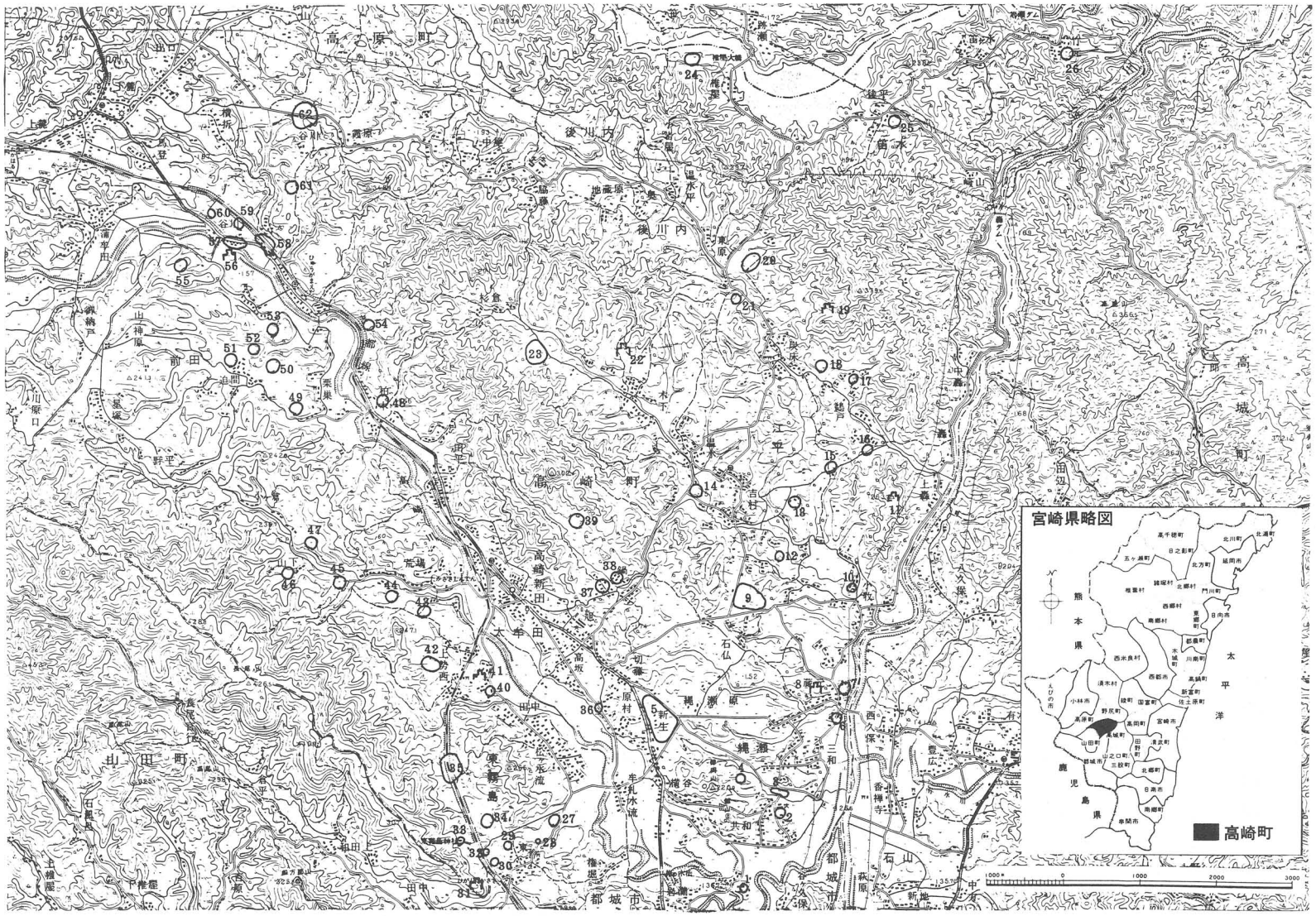
2. 調査に至る経過

高崎町北迫において，田ノ上栄蔵氏が所有する畑地を昭和55年8月，約50cmほど削平したところ，町教委黒木昭三氏によって多数の遺物が散乱しているのが確認された。遺物は，西平式系土器，黒色磨研土器の他，偏平打製石斧，磨石，石皿等があり，縄文後・晩期の有望な遺跡と考えられた。遺跡の北西500mの台地においては，数年前，ほ場整備事業が実施されており，今回，発見された台地においても同事業が近い将来実施されることが予想された。そこで町教育委員会では，遺跡の性格等を把握するため発掘調査を行うことになった。調査は，町教育委員会が主体となり，県文化課主事面高哲郎の担当で昭和57年2月23日から同月27日まで5日間実施した。

調査の際，協力をいただいた高山和明，岩崎真一氏には深く感謝する。

高崎町内の遺跡

番号	遺跡名	所在地（大字・字）	時代	番号	遺跡名	所在地（大字・字）	時代
1	樋之口	縄瀬・樋之口	古墳	32	中野第2	東霧島・中野	弥～古
2	横尾地下式横穴群	〃・横尾	古墳	33	東霧島神社	〃・鳩園	中世
3	横尾	〃・〃	不詳	34	下原	〃・下原	中世
4	山尻	〃・山尻	弥生	35	豆付迫	〃・豆付迫	弥～古
5	横谷原村上地下式横穴群	〃・原村上	古墳	36	高坂前	大牟田・高坂前	古墳
6	鳩越第1	〃・鳩越	〃	37	鍋前第1	〃・鍋前	弥生
7	〃第2	〃・〃	縄文	38	〃第2	〃・〃	〃
8	柳の城	〃・蔵元	中世	39	鍋上	〃・鍋上	不詳
9	塚原古墳群	〃・塚原	古墳	40	一向	〃・一向	縄文
10	小牧	〃・小牧	不詳	41	浮城	〃・西村前	中世
11	木場城	〃・宮谷	中世	42	北迫	〃・北迫	縄文
12	池ノ友	江平・池ノ友	弥生	43	上示野原	〃・上示野原	古墳
13	大砂	〃・大砂	不詳	44	黒勢戸	〃・黒勢戸	〃
14	佐渡	〃・坂元	弥生	45	永迫第1	〃・永迫	縄文
15	鵜ノ原地下式横穴群	〃・西原	古墳	46	山下	〃・大坪	〃
16	鵜戸	〃・鵜戸	弥生	47	永迫第2	〃・永迫	弥生
17	大川毛A	〃・大川毛	縄文	48	柏木	〃・柏木	縄文
18	〃B	〃・〃	弥生？	49	栗須	前田・栗須上原	古墳
19	すかしの城	〃・柳田	中世	50	栗須第2	〃・〃	弥生
20	鵜戸口	〃・鵜戸口	縄文	51	源太	〃・源太	縄文
21	砂子田	〃・砂子田	〃	52	上所迫	〃・上所迫	古墳
22	城の岡	〃・木下	中世	53	下朝倉	〃・下朝倉	縄文
23	権現ケ宇都	〃・権現ケ宇都	縄文	54	青木	〃・下原	古墳
24	上原	笛水・上原	〃	55	池山口	〃・池山口	旧石器？
25	池田	〃・池田	弥生	56	高崎城	〃・丸岡	中世
26	竹元	〃・笛水東原	縄文	57	様屋敷	〃・谷川	弥生
27	政所第1	東霧島・政所	古墳	58	鳥越前	〃・鳥越前	〃
28	政所第2	〃・〃	平安	59	鳥越	〃・鳥越	縄文
29	今村	〃・今村	弥生	60	鳥井原	〃・鳥井原	〃
30	中野第1	〃・中野	古墳	61	仮屋尾	〃・仮屋尾	弥～古
31	陣の端	〃・中野	中世	62	日守地下式横穴群	〃・仮屋尾	古墳



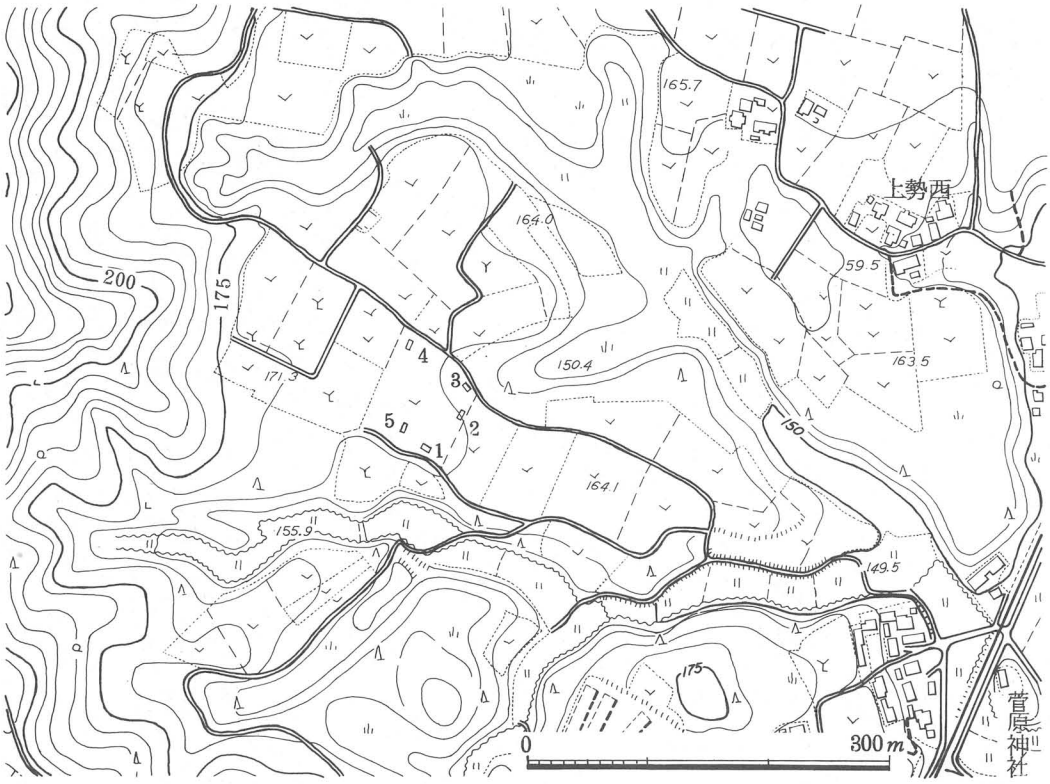
第１図　　高崎町の遺跡分布図

Ⅱ　調査の概要

高崎町街の南西・高崎川の右岸には，標高175ｍから160ｍの台地があり，南東部は，浸蝕により舌状の台地となっている。北迫遺跡は，その南端の東南東へ緩かに傾斜する舌状台地上に立地する。当地の南・北の小谷には湧水もあり，遺跡の立地としては好条件を備えている。

調査は，昭和５５年，遺物が発見された畑の西に隣接する部分において行う。トレンチは，台地の縁辺部，中央部に２ｍ×４ｍを５ケ所設定する。その結果，第Ⅰトレンチで竪穴遺構，第Ⅲトレンチで溝状遺構が検出された。竪穴遺構及び溝状遺構からは，縄文後・晩期の遺物が出土し，他のトレンチにおいても同時期の遺物が出土している。第Ⅳトレンチは，出土量も少なく，土層も自然層に近いと推定される。

第Ⅴトレンチからは，縄文包含層の上層から土師器も少量出土し，北迫遺跡は，縄文後・晩期及び古墳時代の遺跡であることが確認された。

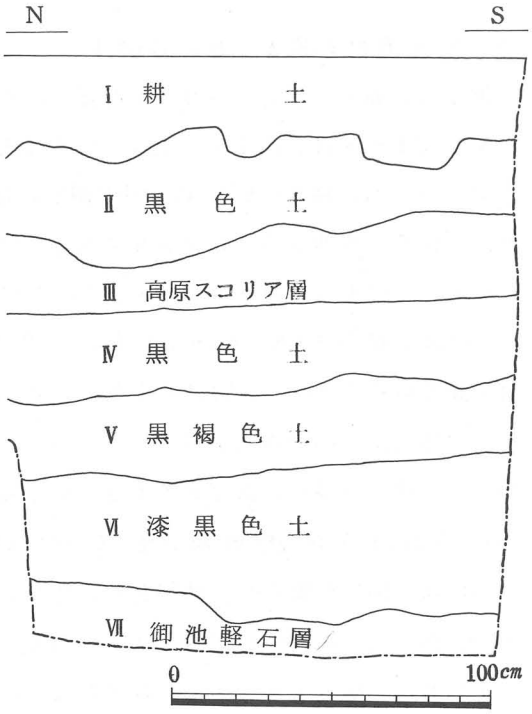


第２図　地形図及びトレンチの配置図

1. 土　層

北迫遺跡の土層は，第Ⅰ層は耕土，第Ⅱ層はスコリアを含む黒色土，第Ⅲ層は高原スコリア層，第Ⅳ層はボラを若干含む黒色土，第Ⅴ層は黒褐色土，第Ⅵ層は第Ⅳ層に比ぶてボラを多く含む漆黒色土，第Ⅶ層は御池軽石層（御池ボラ）となっている。第Ⅳ層の下層及び第Ⅴ層において縄文後・晩期の遺物が出土し，特に第Ⅴ層において多く出土するから，第Ⅴ層黒褐色土が縄文後・晩期の包含層と考えられる。

第５トレンチでは，古墳時代の遺物も出土しているが，第Ⅳ層ボラを若干含む黒色土が包含層となっている。

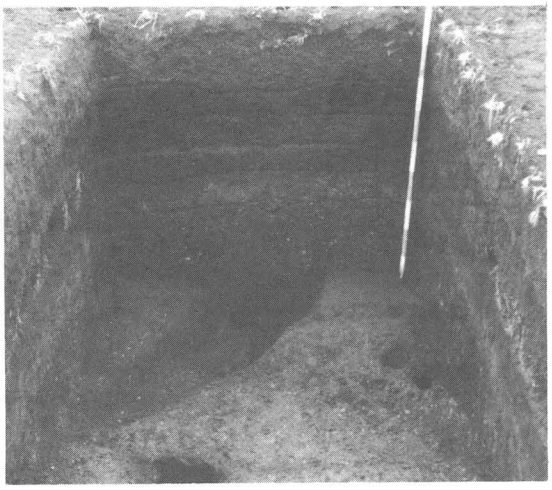


第３図　第５トレンチ東壁土層図

2. 遺　構

遺構は，縄文後・晩期の竪穴状遺構が第１トレンチで，溝状遺構が第３トレンチで検出される。竪穴状遺構はプラン不明の竪穴と，さらにこの竪穴内に隅丸方形プランと考えられる竪穴の一部がトレンチ南壁で検出されている。後者の竪穴の壁際には径約３０cmのピットがある。２つの竪穴の床面は，御池軽石層中にあり，特に踏み締められた痕跡はなく，住居跡と考えにくい。

溝状遺構は，Ｖ字状をなし，深さ約５０cmである。弧状に1.８mが確認され，台地北縁に平行に走行するが，確認された長さが短いため詳細は不明である。溝内の埋土は黒色土を含むボラで，溝の南壁には薄い砂層が見られた。



第３トレンチ　溝状遺構

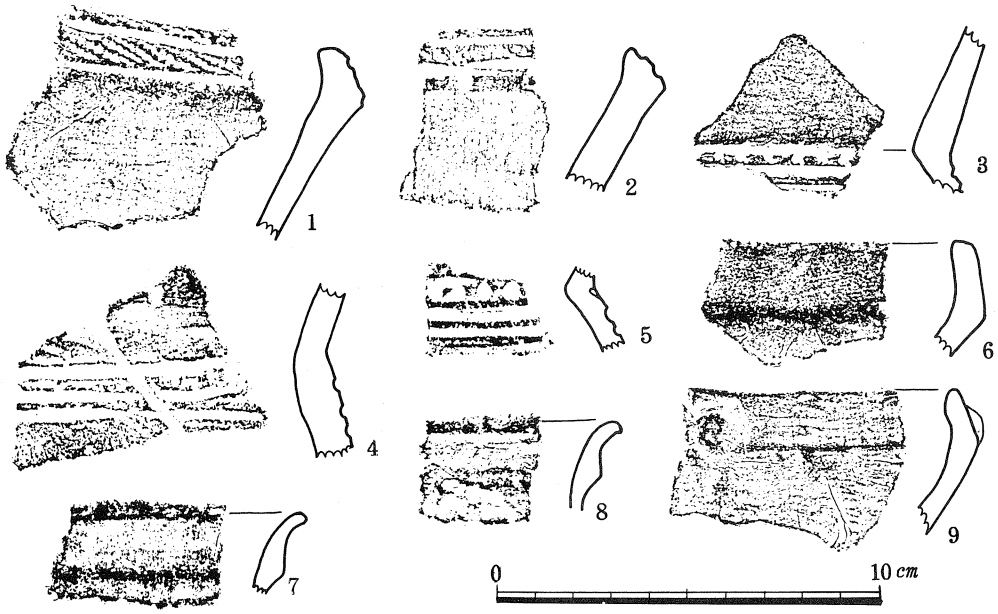
3. 出土遺物（第4，5，6図）

遺物は，縄文土器，石器及び土師器が出土するが，大半は，縄文時代の遺物である。

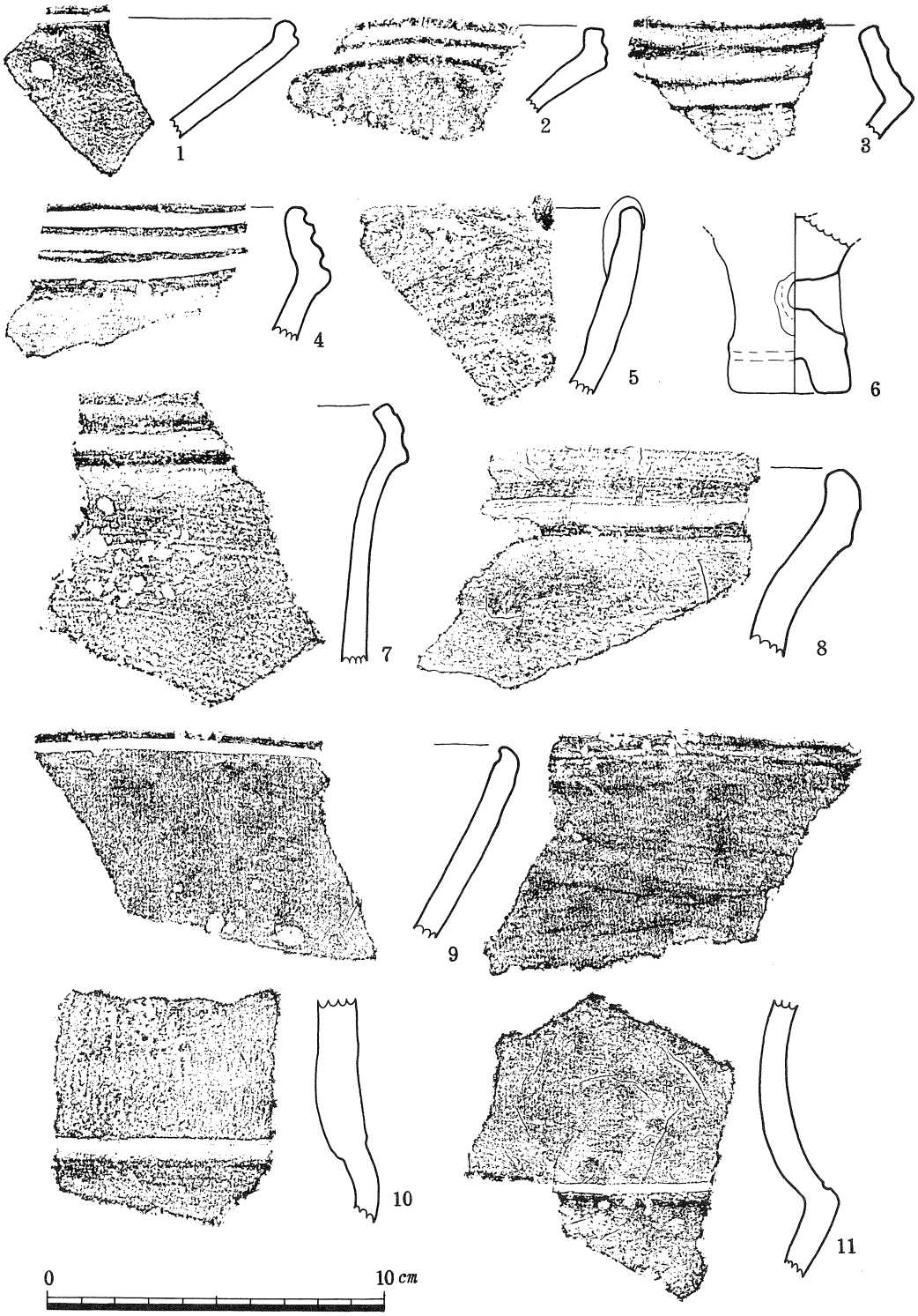
第4図1～5は，西平式系土器で肩部に沈線文，連点文，口縁反転部に2条の沈線文が施文されている。1は，縄文が施文されたのち沈線分が施文されている。 第4図6～9，第5図1・2は，浅鉢で口縁部の形態から3類に分類できる。口縁部が短く直立し，沈線文が巡くもの(1, 2)，口縁部が内傾するもの（6，9），口縁部が外反するもの（7，8）があり，淡褐色を呈し，ナデ調整の6.9以外は黒褐色ないし褐色を呈し研磨されている。 第5図3～5，7～11，第6図8は深鉢で頸部が長く外反し，胴はあまり張らず，口縁部に数条の凹線文や沈線文が施文されている。肩部上に1条の界線が巡るものもある。第6図1～4は底部であげ底，平底があるが，出土した底部は多くはあげ底である。第5図6は表採されていた高杯の脚部で中央に穿孔があり，その下に1条の浅い沈線が巡っている。第6図5は，貝殻条痕文土器で1点のみ出土した。

石器は，扁平打製石斧，磨製石斧，磨石，石鏃等が出土している。扁平打製石斧は撥形が多く，磨石には砂岩製や熔岩製などがある。

土師器は，No.5トレンチで高坪の脚部片等が出土する。図化したのは表採資料で，第6図7は高杯の杯部，6は，絡縄突帯をもつ甕の口縁部である。

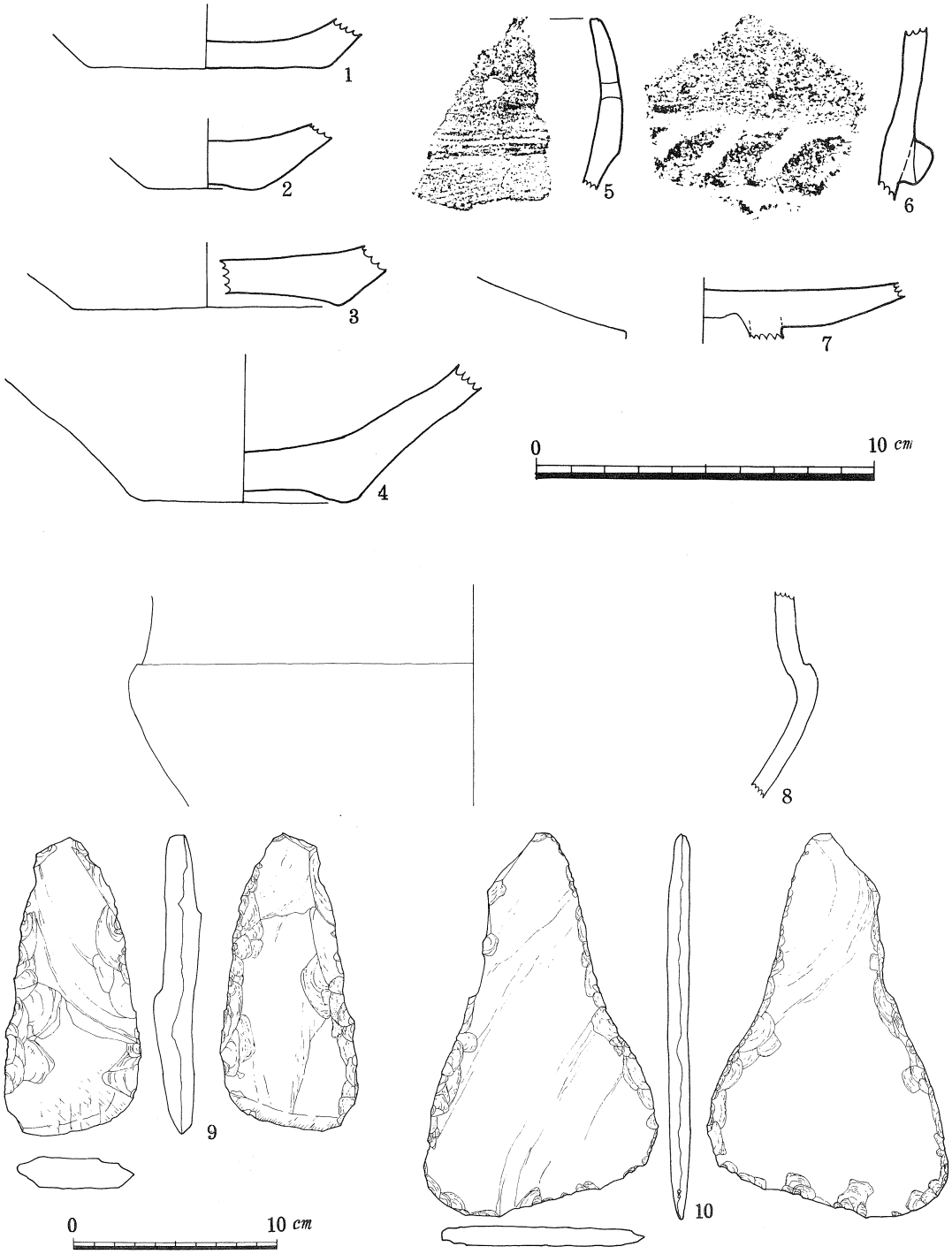


第4図　出土遺物（1）



第5図　出土遺物 (2)

（ 11は表採資料）



第６図　出土遺物（3）
（６・７は表採資料）

4. ま と め

調査の結果，出土した縄文土器は，縄文後・晩期に比定され，溝状遺構及び竪穴遺構は，この時期のものと考えられる。遺物の中で，特に扁平打製石斧が多く出土しているが，このことは遺跡の性格を考えるうえで注目される。

今回の調査では，縄文時代の遺物の他，土師器も出土していることから，北迫遺跡は，縄文後・晩期及び古墳時代の複合遺跡であることを知ることができる。遺跡の範囲については，調査が限定された範囲であったため明確に把握しがたいが，地形，遺物の散布状況から，北に隣接する舌状台地に及ぶかなり広範囲の遺跡であると推定される。

"註"

(1) 石川恒太郎「高崎町炭床出土の縄文土器について」宮崎県文化財調査報告書第１６集，宮崎県教育委員会　１９７２

(2) 本書報告

(3) 茂山護「今村遺跡」九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(3)　宮崎県教育委員会　１９７９

(4) 前方後円墳(1)，方墳(1)，円墳などから成る古墳群で，地下式横穴も共存する。

(5) 石川恒太郎「高崎町大字縄瀬字横尾地下式古墳調査報告」宮崎県文化財調査報告書第16集　１９７２

(6) 日高正晴「横谷原村地下式墳発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第１９集　１９７７

(7) 石川恒太郎「高崎町仮屋尾地下式古墳調査報告」宮崎県文化財調査報告書第１５集　１９７０

(8) 宮崎県南部から鹿児島県の一部に分布する地下式横穴分布圏の中で，大野重昭氏，福尾正彦氏，北郷泰道氏，面高等により，３地域から５地域が設定され，その地域は各自において異なるが，宮崎平野部と北諸県・西諸県を分ける点においては共通している。

(9) 北諸県郡高城町大井手に所在する古墳群で，前方後円墳，円墳，箱式石棺，地下式横穴から成っている。

(10) 茂山護「上示野原遺跡発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第２２集　１９８０

(11) 石川恒太郎他「大萩遺跡(2)」宮崎県教育委員会　１９７４

⑿ 面高哲郎「丸谷第１遺跡」九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(3)　宮崎県教育委員会　１９７９

⒀ 北郷泰道「祝吉遺跡」都城市文化財調査報告書第１集　都城教育委員会　１９８１
面高哲郎「祝吉遺跡」　〃　第２集　〃　１９８２

⒁ 永友良典，山中悦雄「２０号地遺跡」宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報（Ⅱ）宮崎県教育委員会　１９８１

⒂ 昭和５６年（１９８１）から，３次にわたり新富町教育委員会により発掘調査され，弥生中期後半から後期前半の竪穴住居跡が検出されている。未報告。

⒃ 面高哲郎「高崎町東霧島出土の輸入陶磁器」宮崎考古第６号　１９８０

⒄ 茂山護「下原遺跡」九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(3)　１９７９

前平（まえびら）地区遺跡発掘調査報告

宮崎郡田野町字芳ヶ迫

例　言

1. 本報告は，昭和55年5月10日から22日まで田野町教育委員会が実施した前平地区遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は，県文化課主事面高哲郎，同長津宗重が担当した。
3. 出土遺物は，田野町教育委員会で保管している。
4. 本報告の実測，トレース，執筆は，1号地を面高，3号地を長津で行い，編集は面高があたった。

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに
1.　遺跡の環境 …… 63
2.　調査に至る経過 …… 64
Ⅱ　調査の概要
1.　前平地区遺跡 …… 65
2.　1号地
調査区の設定と概要 …… 66
出土遺物 …… 67
3.　3号地
調査区の設定と概要 …… 68
遺物
(1)　縄文土器 …… 69
(2)　石　　器 …… 69
Ⅲ　まとめ

挿　図　目　次

第1図　田野町内の遺跡分布図 …… 63
第2図　前平地区遺跡地形図 …… 65
第3図　前平地区遺跡1号地トレンチ配置図 …… 66
第4図　C－3トレンチ北壁土層図 …… 66
第5図　1号地出土遺物 …… 67
第6図　前平地区遺跡3号地トレンチ配置図 …… 68
第7図　2トレンチ西壁土層図 …… 69
第8図　6トレンチ遺構実測図 …… 69
第9図　3号地出土遺物 …… 70

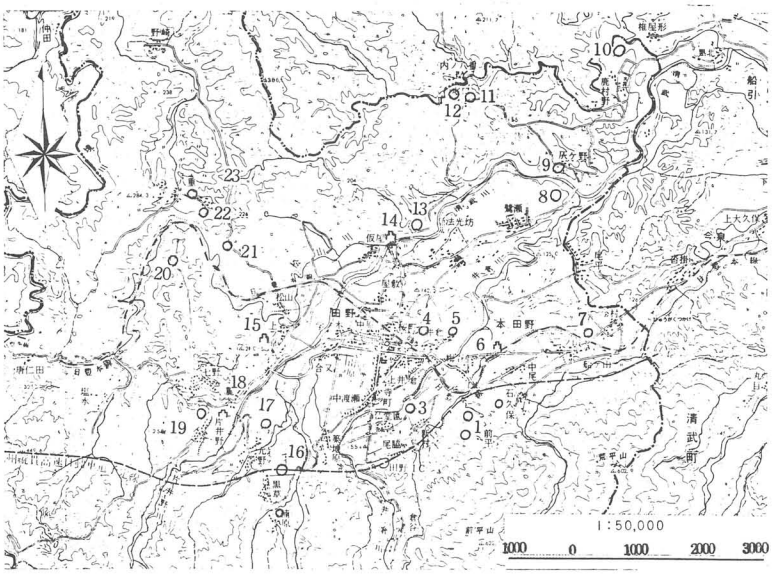
Ⅰ　はじめに

1.　遺跡の環境

前平地区遺跡は，田野町字芳ケ迫９２６８番地他に所在する。田野町は，宮崎市南西約14㎞にあり，町域を田野盆地を中心とする町である。田野盆地は，鰐塚山系，青井岳山系などを外輪山として，南西から北東へ楕円状（長径７㎞，短径３㎞）に開ける小盆地である。河川は，盆地北縁を片井野川が，南縁を井倉川が北流し，盆地北端の灰ケ野付近で合流して清武川となって日向灘へと注いでいる。盆地周辺に形成された扇状地は，片井野川，井倉川及びその支流によって開析されて舌状の台地となっている。盆地内に所在する遺跡の大半はこの舌状台地上に立地している。

現在まで確認されている遺跡は，約２０ケ所であるが，その数は多いとはいえず，また，発掘調査された遺跡も少なく，遺跡の性格についても不明な点が多い。

旧石器時代の遺跡は，ナイフ形石器を出土した萩ケ瀬遺跡がある。縄文時代の遺跡は，９ケ所確認されている。早期の遺跡としては，羽状の貝殻条痕文土器を出土した前畑遺跡があり[(1)]，後期の遺跡には，発掘調査の行れている黒草遺跡，青木遺跡がある。黒草遺跡からは，昭和４６年の宮崎大学の調査で綾Ａ式，Ｂ式，市来式が出土し，昭和５３年の県教委の調査



1.前平地区遺跡	2.	3.青木遺跡	4.桜町遺跡	5.井倉洞穴遺跡
6.梅谷城址	7.船ケ山遺跡	8.灰ケ野遺跡	9灰ケ野地下式	10.ズクノ山遺跡
11.堀口Ｂ遺跡	12.堀口Ａ遺跡	13.萩ケ瀬遺跡	14.田野城址	15.天建社跡
16.黒草遺跡	17.高野原地下式横穴	18.ヒダカン城址	19.片井野遺跡	20.丸野遺跡
	21.前畑遺跡	22.八重Ａ遺跡	23.八重Ｂ遺跡	

第１図　田野町内の遺跡分布図

では，綾式，下弓田式の他，前期の曽畑式，晩期の黒色磨研土器，および弥生終末に近い弥生土器が出土しているが，遺構等は検出されていない。[2] 昭和38年，賀川光夫，鈴木重治氏等により調査された青木遺跡からは，指宿式，綾式，市来式，下弓田式等が出土し，指宿式，綾式と市来式，下弓田式の中間形式として，青木式土器が設定されている。遺構としては，不整円形プランの配石遺構，トチの実が出土し，貯蔵穴と推定される竪穴等が検出されている。[3]

弥生時代の遺跡は，現在までほとんど確認されていず，黒草出土弥生土器は貴重な資料となっている。

古墳時代の遺跡は，地下式横穴が発見されている灰ケ野[4]，高野原[5]，箱式石棺が確認されている前平遺跡[6]がある。当時代の確認された遺跡は墳墓のみで，集落等は知られていないが，これは，調査等が少ないためと考えられる。

町内で発見されている遺跡は，縄文時代の遺跡が多く，弥生以降の遺跡は少ない。明治中ごろの地誌である平部嶠南の「日向地誌」によると，田野町は，水利は極めて便ならず，住々に旱害があり，土地はやせていたとあり，弥生以降が少ないことは，この田野町の地勢によるものかと思われる。

宮崎平野部の中で大淀川以南の宮崎市，清武町では地下式横穴が現在のところ未発見である。この中にあって，田野町で地下式横穴が発見されていることに対して，延喜式に記された古代の官道，救磨駅（宮崎市熊野）から水俣駅（北諸郡三股町）の中継地として注目されている。[7] この点については，箱式石棺が宮崎南部の内陸部においては，田野町前平，三股町に隣接する高城町牧ノ原古墳群[8]において発見されており，今後，この箱式石棺の分布にも注意する必要があろうと思われる。

2. 調査に至る経過

昭和５６年４月，宮崎県農業開発公社が農地造成を行うため，田野町東部の前平地区で土地購入の計画があり，当地区では，以前箱式石棺が確認されており，また，地形等からその他の遺跡の存在が予想された。そこで町教育委員会，県文化課で分布調査を実施したところ，購入計画地に数ケ所の遺跡が確認される。町教育委員会では，県文化課の指導により，確認調査を行うことになり昭和５７年５月１０日から２２日までの１０日間調査を実施した。調査は，田野町教育委員会が主体となり，県文化課主事面高哲郎，同長津宗重の２名が調査を担当した。調査協力として，農業開発公社から作業員や重機の提供があった。

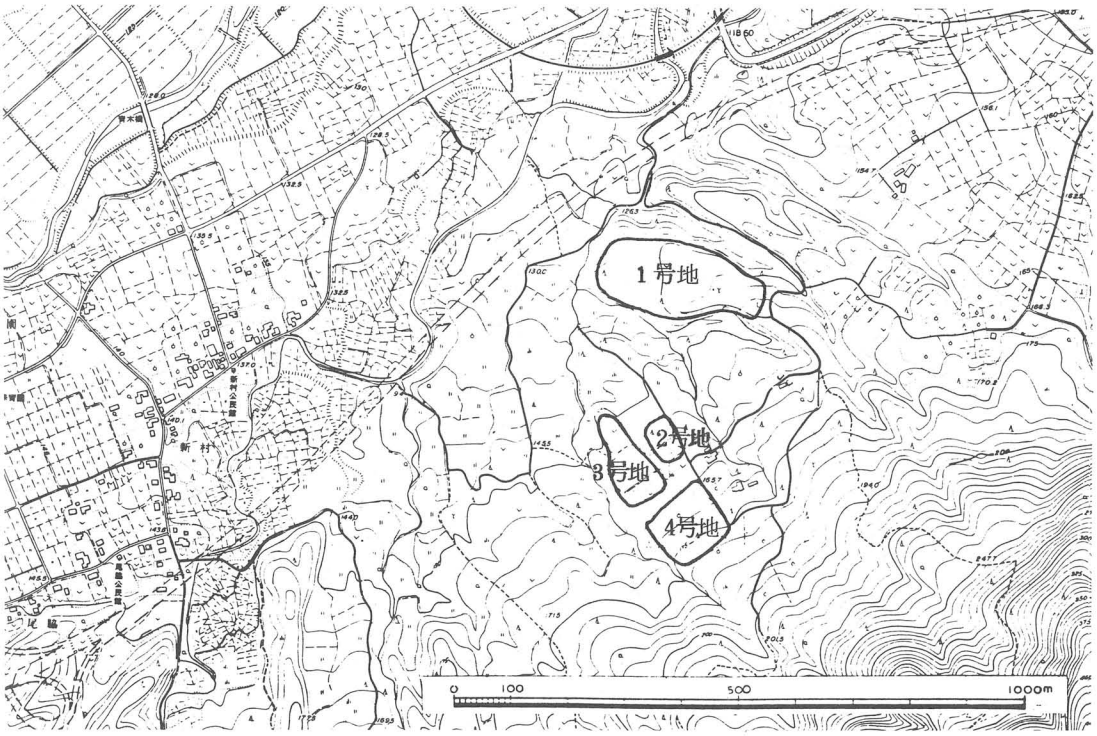
Ⅱ　調査の概要

1.　前平地区遺跡

田野町前平地区は，田野盆地東部，前平山の北西裾に位置する。付近は，西面する扇状地で，各所には扇状地特有の湧水が見られ，湧水は小川となり井倉川へと注いでいる。扇状地は，この小川により開析され，北西へ延びる舌状の台地となっており，遺跡はこの台地上に立地する。

以前，前平地区では，九州縦貫自動車道建設に伴う分布調査の際，箱式石棺が確認されている。[(9)] 昭和５６年の分布調査により新たに２ケ所の遺物散布地が発見され，さらに１ケ所で墳墓の遺構の存在が予想された。そこで４ケ所を北から１号地遺跡，２号地遺跡と仮称することにした。

１号地は，前平地区で最大面積を有する舌状台地に立地している。昭和５６年の分布調査の際，中央部で土師器が採集されている。２号地は，墳墓等の存在が推定された地区である。３号地では，昭和５６年の調査で縄文後期の沈線文土器が採集されている。４号地は，以前，箱式石棺の存在が確認されていた地区[(9)]で，昭和５６年の調査でも土器片が採集されている。

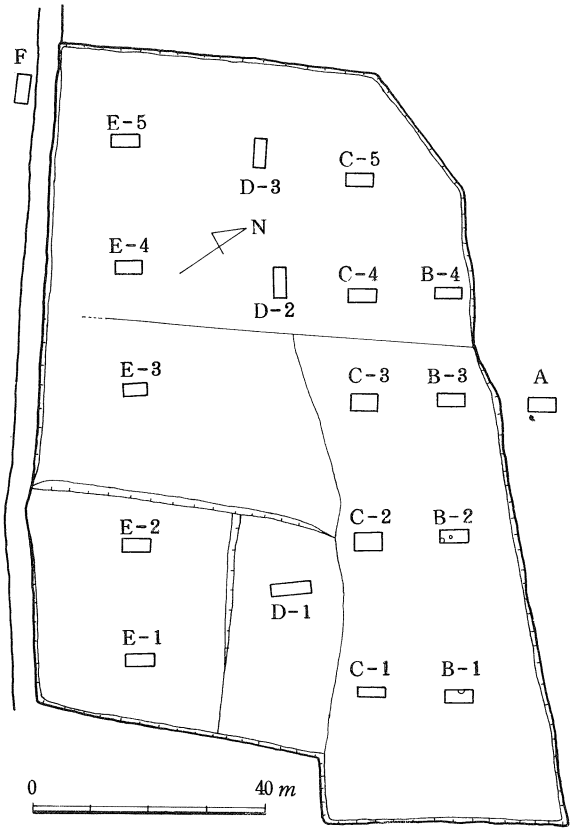


第２図　前平地区遺跡

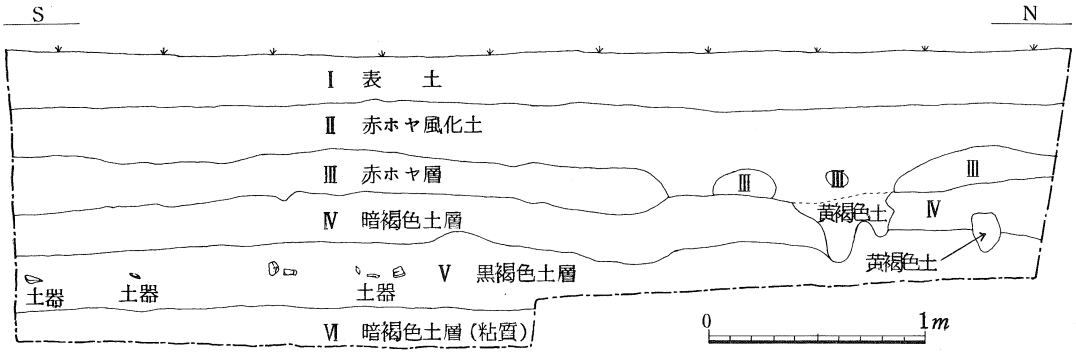
2. 1 号 地

調査区の設定と概要

1号地の調査は，4 m × 1.5 m～2 m のトレンチを南北に4列設定して行う，（第3図）。当地の基本層序は，第Ⅰ層表土，第Ⅱ層黒色土層，第Ⅲ層赤ホヤ層（第1オレンヂ），第Ⅳ層硬質褐色土層，第Ⅴ層黒褐色土層，第Ⅵ層暗褐色土層となっている。台地中央部の1～4区までは，後世の開発により第Ⅲ層直上まで削平を受け，昭和56年の分布調査の際採集された土師器の包含層は大半が攪乱を受けていることが判明する。E－5区のみで第Ⅱ層の残存が見られ，布痕土器等が出土し，焼土も検出された。分布調査の際の土師器は，布痕土器を伴うものと推定される。この時期の柱穴等の遺構は確認されていない。



赤ホヤ層下の第Ⅵ層黒褐色土層では，縄文早期の集石遺構等が検出され，吉田，前平式系の貝殻文土器が出土している。B－1・2で検出された集石遺構は，径60cmの円形に挙大の角礫が集石するが，宮崎県内の集石遺構上部にみられる角礫の層の面的拡がりはみられない。



第4図　C－3トレンチ北壁土層図

この他，C－5区ではピット状遺構が，E－3区では，トレンチ南壁の近くで南へ拡がると推定される竪穴状遺構が確認されている。

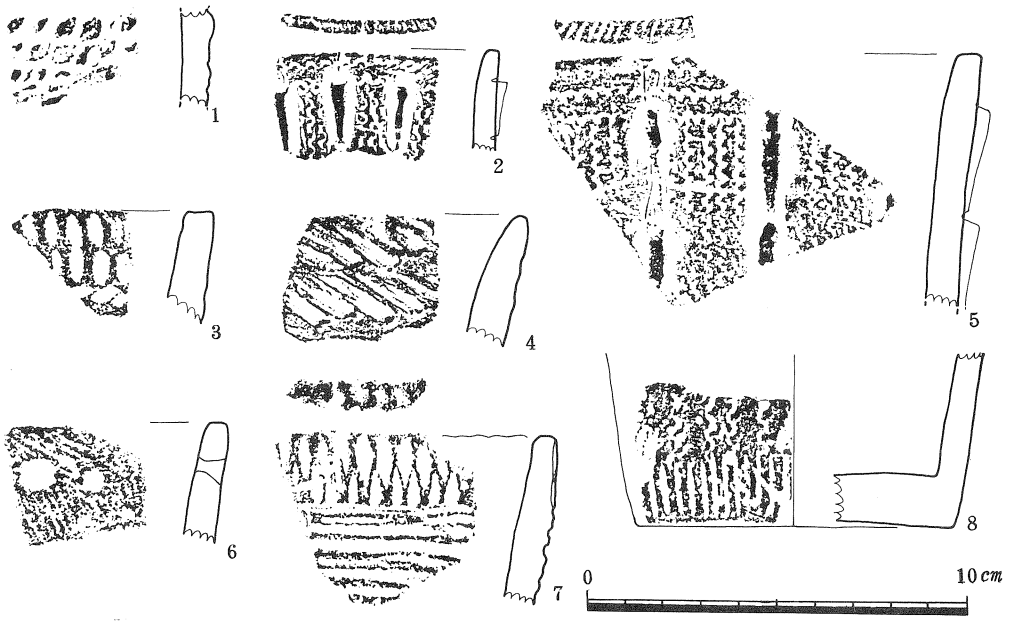
遺物は，B－1，2，C－3・4，D－2，E－3・4区等で貝殻文土器，押型文土器等が出土するが，その数はあまり多くない。この中でC－3，E－3・4区では若干多く出土し，E－3区で確認された竪穴状遺構との関係が注目される。

縄文早期の包含層である第Ⅵ層黒褐色土層には挙大の角礫が点在するが，これは，集石遺構と関連があるものと推定される。

2. 出土遺物（第5図）

遺物は，縄文早期の土器や石器，平安期と推定される布痕土器が出土している。布痕土器は少片であるが，県内で発見される円錘形に近い器形と考えられる。縄文土器は，押型文（楕円文，山形文）が数点出土した他は，大半が吉田・前平式系の貝殻文土器である。2・5は，口縁下に楔形凸帯をもち，凸帯の上・下に刺突文があり，凸帯の周囲を沈線が一巡している。また，凸帯間及び胴部には縦位の貝殻刺突文が施文されている。色調は，赤褐色ないし黄褐色を呈する。3・4・7は，口縁直下にヘラ様施文具により短沈線ないし押点が2段施文され，7は，その下部に条痕文が横走する。このタイプの土器の出土量は，少ない。6は，穿孔をもつ撚糸文土器である。

石器は，C－3で磨石片が1点出土しているのみである。（面高哲郎）



第5図　1号地出土遺物

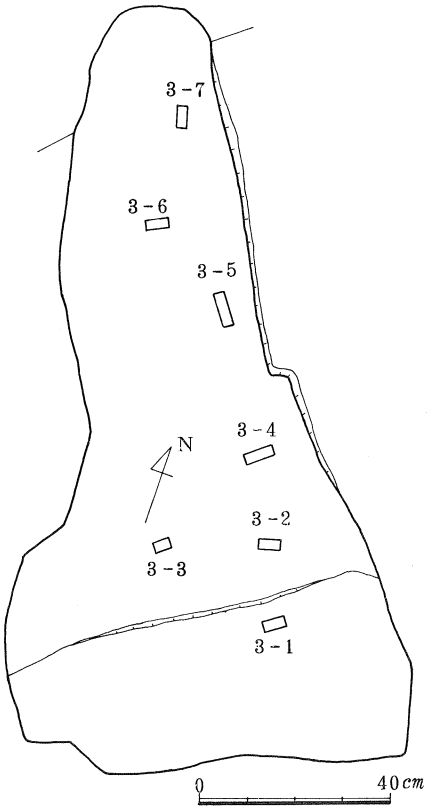
3. 3号地

調査区の設定と概要

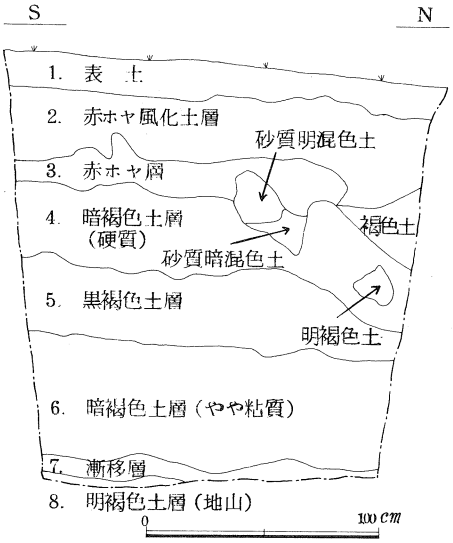
3号地は，1号地と谷を挟んで南に対峙する標高155～165 m の舌状台地の先端に位置する（第2図）。2 m × 5 m のトレンチを7本設定して試掘を行ない（第6図），以下のような結果を得た。第一に，3号地における基本層序は，1号地と同様に，第Ⅰ層（表土），第Ⅱ層（赤ホヤ風化土），第Ⅲ層（赤ホヤ層），第Ⅳ層（硬質の暗褐色土），第Ⅴ層（黒褐色土），第Ⅵ層（粘質の暗褐色土），第Ⅶ層（明褐色土の地山）である（第7図）。第二に，第Ⅲ層（赤ホヤ層）以上の文化層は耕作によって完全に削平されていたが，第Ⅲ層（赤ホヤ層）下の第Ⅴ層（黒褐色土）で集石遺構と早期の縄文土器・打製石鏃・剥片等を確認した。

遺　構

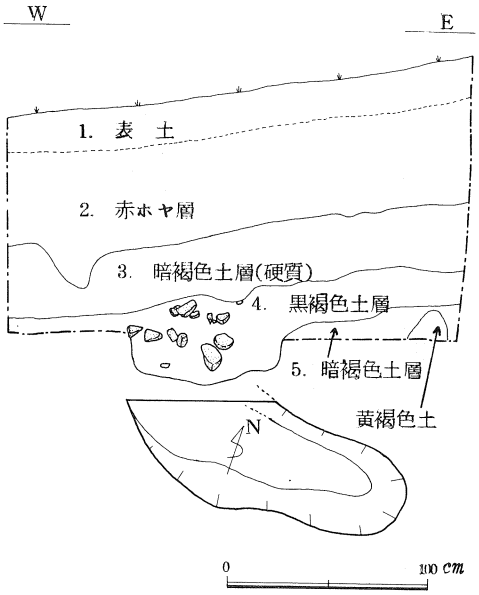
2.・4・5・6トレンチの第Ⅴ層（黒褐色土層）において集石遺構が確認された。特に5トレンチでは第Ⅴ層全面に挙石の焼石が検出され，集石下の掘り込みを6ケ所確認した。6トレンチでも第Ⅴ層に掘り込んだ集石遺構を1ケ所確認した（第8図）。



第6図　前平地区遺跡3号地トレンチ配置図



第7図　2トレンチ西壁土層図



第8図　6トレンチ遺構実測図

遺　物

(1) 縄文土器(第　図1～14)

1・2は4トレンチ出土である。1は条痕文，2は貝殻条痕文を表面に施した胴部片である。1・2は所謂「前平式」である。

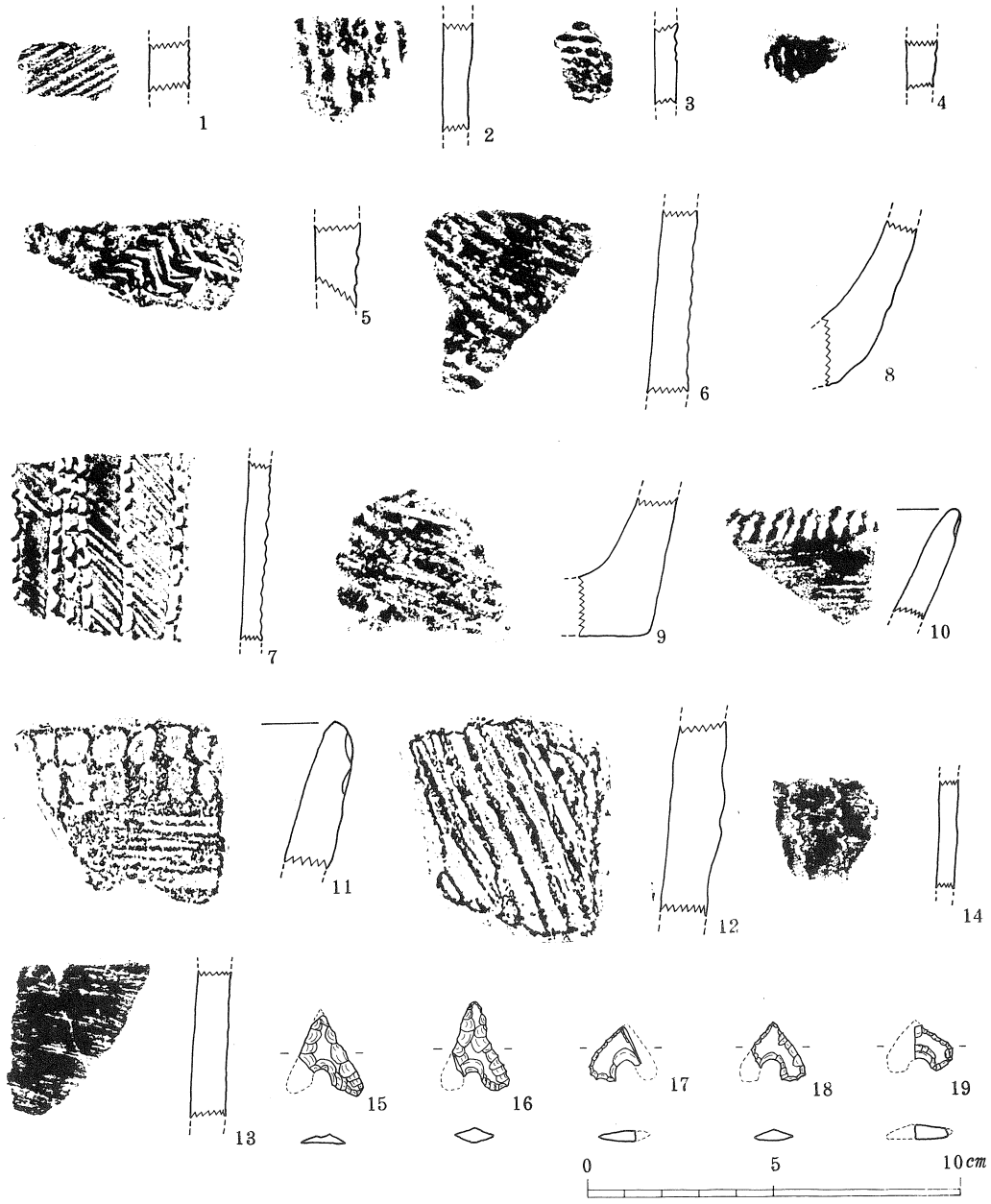
1・2は5トレンチ出土である。3・4は楕円押型文，5は山型押型文，6は貝殻条痕文，7は貝殻腹縁刺突文・条痕文を表面に施した胴部片である。8はナデを表面に施した尖底気味の底部片である。9は貝殻条痕文を表面に施した平底の底部である。7は所謂「吉田式」である。

10～14は6トレンチ出土である。10は貝殻腹縁刺突文と貝殻条痕文を施こし，平坦気味の口唇部を有する口縁部片である。11はヘラ描き凹凸文と貝殻条痕文を施こし，平坦気味の口唇部を有する口縁部片である。12は貝殻条痕文，13は条痕文，14は貝殻腹縁刺突文を表面に施した胴部片である。10～13は所謂「前平式」，14は所謂「吉田式」である。

(2) 石　器(第　図15～19)

15～19は5トレンチ出土の打製石鏃である。15～19は凹基式で，15・16はチャート，17～19は黒耀石である。

(長津宗重)



第９図　３号地出土の縄文土器と打製石鏃

Ⅲ まとめ

今回の前平地区の調査は，4地区で実施した結果，1号地は縄文早期及び平安，3号地は縄文早期の遺跡であることが確認された。1・3号地の縄文早期の包含層は，深い位置に存在したため，後世の影響を受けずに良好な状態である。1号地で検出された竪穴遺構は，遺物の出土状態から住居跡と考えられ，さらに集落が存在する可能性が高い。3号地で検出された集石遺構と角礫層は，集石遺構の機能，あり方などを解明するうえで好資料である。

1号地の平安期の包含層は舌状台地中央部が削平を受け大半が消滅しているが，E－5で確認されたように舌状台地の東西端においては包含層が残存しているものと推定される。

分布調査では，3号地において縄文後期前半の沈線文土器が採集されていたが，包含層は既に消滅していた。また，箱式石棺の確認は，今調査の目的の1つであったが，その存在は確認されなかった。今回，諸事情により未調査である4号地東部では，板石の散乱が見られ，また，今調査の際，土師器小片も出土していることから，箱式石棺の確認は，今後の調査に期待したい。

（面高哲郎）

"註"

(1) 茂山護「宮崎郡田野町採集の貝殻条痕文土器」　宮崎考古第4号　1978

(2) 岩永哲夫，北郷泰道「黒草遺跡」　九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書(3)　宮崎県教育委員会　1979

(3) 鈴木重治「宮崎県田野町青木遺跡の調査」　日本考古学協会28回大会研究発表要旨　1963

(4) 田中茂「宮崎郡田野町灰ケ野地下式横穴」　宮崎県総合博物館研究紀要No.1　1972

・石川恒太郎「田野町灰ケ野地下式古墳調査報告書」　宮崎県文化財調査報告集　第17集　宮崎県教育委員会　1973

(5) 日高正晴「高野原地下式1号墳発掘調査」　宮崎県文化財調査報告書第24集　宮崎県教育委員会　1981

(6) 宮崎県教育委員会「九州縦貫自動車道（宮崎県）関係遺跡分布調査報告書」　1971

(7) 註5に同じ

(8) 牧ノ原古墳群は，北諸県郡高城町大井手に所在し，前方後円墳（3基），円墳（9基），箱式石棺，地下式横穴から成る古墳群である。

(9) 註6に同じ

旭台地下式横穴群発掘調査報告

西諸県郡高原町大字広原旭台

（人　骨　編）

例　　言

1. 本報告は，昭和５０年１２月４日から同月１２日まで宮崎県教育委員会及び高原町教育委員会で実施した西諸県郡高原町旭台地下式横穴群発掘調査において出土した埋葬人骨にかかる報告である。
2. 人骨の考証は，長崎大学医学部解剖学第二教室に依頼し，同教室講師松下孝幸，同助手分部哲秋，同研究生野田耕一氏に執筆いただいた。記して感謝申し上げる。
3. 発掘調査の報告は，宮崎県文化財調査報告書第１９集に掲載している。

宮崎県高原町旭台地下式横穴出土の古墳時代人骨

松下孝幸*・野田耕一**

はじめに

宮崎県西諸県郡高原町大字広原にある旭台地下式横穴群は１９７５年の１２月に発掘調査が行なわれ，この調査によって３０体を超える人骨が出土した。当教室では，かねてから地下式横穴（古墳）から出土する古墳時代人骨に特に関心を寄せ，この古墳人の形質を明らかにするため，人骨の収集に力を注いできたが，関係機関および地元の研究者の方々のご協力によって次第に資料も増えつつある。資料の増加に伴ない，地下式横穴（古墳）出土の古墳人（以下「地下式古墳人」）の形質は当初考えていたより複雑で，地方差の存在を示唆する資料も発掘されている。こういった新たな問題に対応し，更に研究を進めていくためには，従来発掘されている人骨を早急に整備し資料化しておく必要がある。

保存状態は必ずしも十分なものではないが，上述したように３０数体の資料は貴重であり，今後，地下式古墳人の形質を考察する上では欠かすことのできない資料になると考えられるので，計測ならびに人類学的観察を行なった。その結果を報告したい。

なお，本横穴は石川（1976）によれば，古墳時代後期の前半に属するものである。

資　料

1975年１２月に調査されたのは１号墳から１２号墳までの１２基の地下式横穴であったが，県文化課の調査以前に人骨が取り上げられていた墳墓が１基あるので，これを「番外１号墳」とよぶことにする。旭台地下式横穴から出土した人骨は解剖学的精査の結果，表１のとおり，３６体の人骨であった。３６体のうち成人骨は２８体で，残りの８体は小児骨・成年骨であった。成人骨２８体のうち１５体が男性，９体が女性で，あとの４体は性別を明らかにできなかった。なお各地下式横穴から出土した人骨の性別・年令は表２のとおりである。番外１号墳から出土した人骨は一括されていたために，個体別に正確に分けることは不可能であったが，頭蓋は５体分あり，そのうちの１体は小児骨であった。

*　長崎大学医学部解剖学第二教室
**　長崎大学医学部研究生

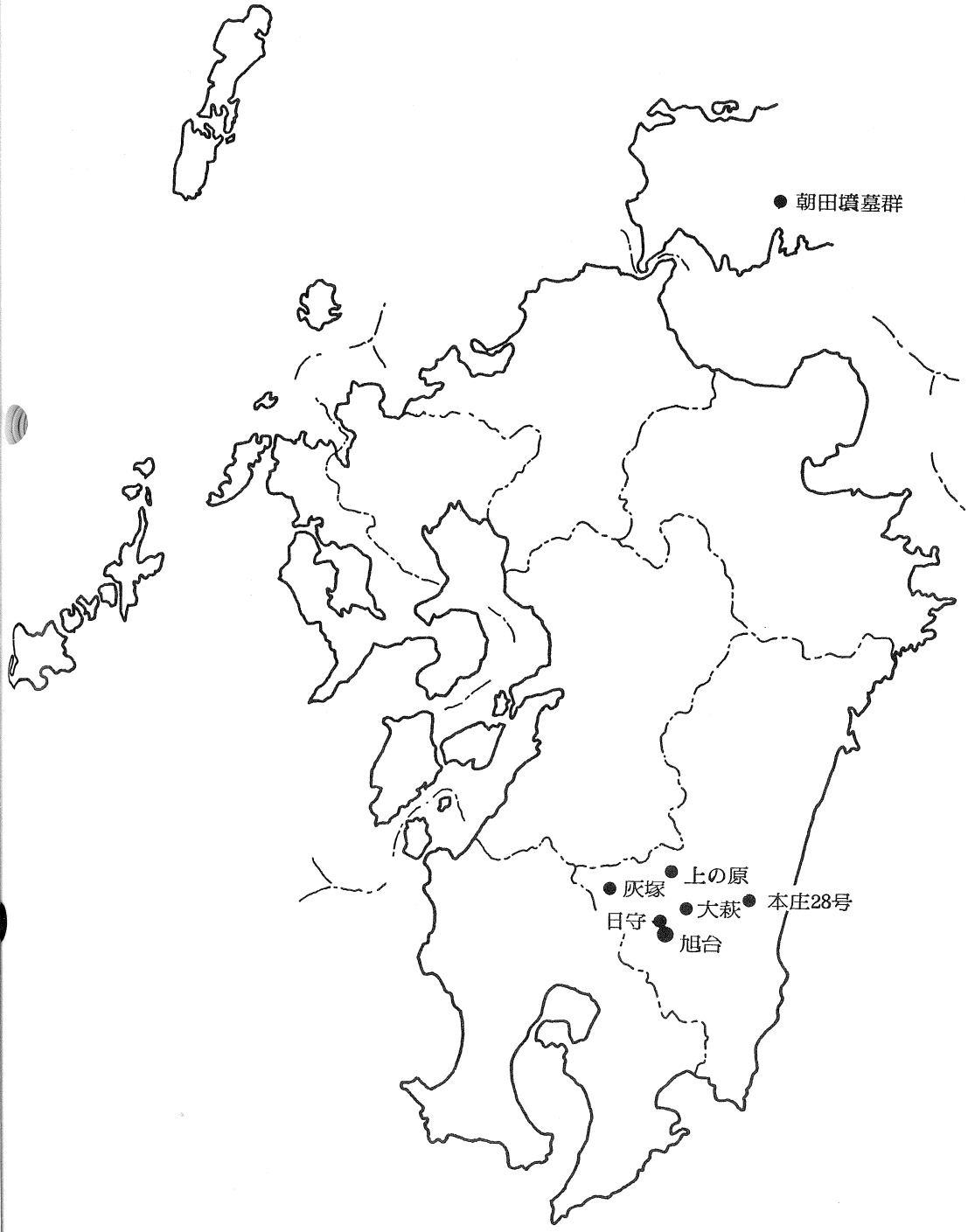


図1　遺　　跡

計測方法はMarfin-Saller（1957）の方法で行ない，一部はHowells（1973）の方法で，また鼻根部は鈴木（1963）と松下（1983）の方法で計測した。

表1　資料数

成人			小児・成年	合計
男性	女性	不明		
15	9	4	8	36

比比較資料としては，宮崎県の例として，灰塚（内藤，1973），大萩（内藤，1974），日守（松下，1981），上の原（松下，1981）本庄28号墳（松下・分部，1982）および山口市の朝田墳墓群第II地区にある横穴墓から出土した古墳人（以下「朝田古墳人」）（松下，1982）を用いた。なお表中の宮崎県地下式古墳人とは，上記の灰塚，大萩，日守，上の原の各地下式横穴から出土した人骨を一括して平均値を算出したものである。

本地下式横穴から出土した人骨のうち，小児・成年骨については分部が別項で詳述しているので，本稿では成人骨についてのみ報告する。

表2　出土人骨一覧

人骨番号	性別	年令
3号墳1号人骨	女性	熟年
2号人骨	男性	熟年
3号人骨	−	成年
7号墳1号人骨	男性	熟年
2号人骨	女性	熟年
3号人骨	男性	壮年
4号人骨	女性	不明
5号人骨	男性	壮年
6号人骨	−	成年
7号人骨	女性	壮年
8号墳1号人骨	女性	熟年
2号人骨	−	小児（I期）
3号人骨	不明	熟年
9号墳1号人骨	男性	熟年
2号人骨	女性	壮年
3号人骨	−	小児（I期）
4号人骨	女性	熟年
5号人骨	男性	熟年
10号墳1号人骨	不明	熟年
2号人骨	男性	熟年
3号人骨	不明	不明
11号墳1号人骨	男性	壮年
2号人骨	−	成年
3号人骨	男性	熟年
4号人骨	−	小児（I期）
5号人骨	−	小児（II期）
12号墳1号人骨	男性	壮年
2号人骨	女性	熟年
3号人骨	男性	壮年
4号人骨	男性	壮年
5号人骨	男性	熟年
番外1号墳頭蓋A	男性	熟年
B	男性	熟年
C	女性	熟年
D	不明	不明
E	−	小児（I期）

（小児の区分は分部の分類方法（1981）による。）

所　見

(1) 頭　蓋

1. 脳頭蓋

顔面頭蓋に比べ脳頭蓋の保存状態は著しく悪く，とくに後頭部が大部分の個体で欠如しており，従って計測できない項目が多い。男性脳頭蓋の計測値は表２２に示すとおりで，頭蓋最大長，頭蓋水平周および正中矢弧長などは計測できず，従って頭蓋長幅示数を算出することはできなかった。しかし観察によって頭型を推定することが出来るものが４例あり，いずれも短頭に傾いている。

頭蓋最大幅は143.33㎜（３例），バジオン・ブレグマ高は136.00㎜（３例），横弧長は312.00㎜（２例）である。

女性脳頭蓋の計測値は表２３に示すとおり，頭蓋最大長は179.50㎜（２例），頭蓋最大幅140㎜（１例），バジオン・ブレグマ高133.00㎜（２例）であるが，頭蓋長幅示数を算出できるものは男性同様１例もなかった。しかし，観察によって頭型を推定できるものが３例あり，そのうちの２例は明らかに短頭へ傾いたもので，残りの１例は中頭型に属していた。

次いで，すでに報告されている地下式古墳人と朝田古墳人との比較を行なってみると，(表３，４），男性では，前述しているように本古墳人の頭型は短頭に傾いており，朝田古墳人が長頭へ傾いているのと対称的である。また頭蓋最大幅は朝田古墳人と大差ないが，バジオン・ブレグマ高は朝田古墳人よりやや高い。

表３　脳頭蓋計測値（男性）　（㎜）

		旭台地下式古墳人		宮崎県地下式古墳人		朝田横穴墓古墳人	
		n	M	n	M	n	M
1.	頭蓋最大長		—	3	185.00	4	183.00
8.	頭蓋最大幅	3	143.33	1	146	2	143.00
17.	バジオン・ブレグマ高	3	136.00	2	143.50	2	130.00
8／1	頭蓋長幅示数		—		—	2	76.71
17／1	頭蓋長高示数		—	2	76.57	2	73.93
17／8	頭蓋幅高示数	1	89.93	1	93.79	1	92.25
23.	頭蓋水平周		—		—	1	525
24.	横　弧　長	2	312.00		—	1	306
25.	正中矢状弧長		—	1	380	2	359.00

女性では，頭蓋最大長および頭蓋最大幅は朝田古墳人よりもやや大きく，頭型は前述しているとおり，男性同様短頭に傾いているようである。朝田古墳人の頭蓋長幅示数の２例の平均値は78.04であるが，観察所見を考慮すれば，実際はもう少し長頭へ傾いており，本例はこの朝田古墳人の頭型とは異なっている。

表４　脳頭蓋計測値（女性）

（mm）

		旭台地下式古墳人		宮崎県地下式古墳人		朝田横穴墓古墳人	
		n	M	n	M	n	M
1.	頭蓋最大長	2	179.50	2	177.50	6	172.50
8.	頭蓋最大幅	1	140	1	140	3	134.67
17.	バジオン・ブレグマ高	2	133.00	2	130.50	5	131.20
8／1	頭蓋長幅示数		—		—	2	78.04
17／1	頭蓋長高示数	1	72.57		—	4	75.57
17／8	頭蓋幅高示数		—	1	73.45	3	97.27
23.	頭蓋水平周		—		—	1	508
24.	横　弧　長	1	304	2	300.50	3	301.00
25.	正中矢状弧長	1	360		—	2	357.00

2. 顔面頭蓋

男性の顔面頭蓋の計測値は表２４に示すとおり，頬骨弓幅が135.00mm（２例），中顔幅99.00mm（４例），顔高111.67mm（２例），上顔高65mm（５例），コルマンの顔示数および上顔示数は，それぞれ82.31（１例），48.46（１例）で，ウィルヒョーの顔示数および上顔示数は，それぞれ113.10（２例），64.84（２例）となり，低顔の傾向が著しい。

眼窩幅は44.00mm（右，３例），43.67mm（左，３例），眼窩高は33.33mm（右，６例），32.67mm（左，６例）で，眼窩示数は76.65（右，３例），75.62（左，３例）となり，右はmeskonch（中眼窩），左はchamaekonch（低眼窩）に属している。

鼻幅は28.71mm（７例），鼻高は48.50mm（６例）で，鼻示数は59.16（６例）となり，hypercchamaerrhin（過低鼻）に属している。

また全側面角は76.67度（３例），鼻側面角は78.00度，歯槽側面角は73.67度（３例）である。

女性の顔面頭蓋の計測値は表２５に示すとおりで，中顔幅101.00mm（２例），顔高109.67mm（３例），上顔高62.00mm（２例）で，ウィルヒョーの顔示数および上顔示数は，それぞれ

107.44（2例），61.39（2例）となり，男性同様低顔である。

眼窩幅は40.33㎜（右，3例），40.33㎜（左，3例），眼窩高は33.00㎜（右，2例），33.00㎜（左，2例）で，眼窩示数は75.00（右，1例），84.61（左，2例）となり，右は chamaekonch（低眼高）に，左は mesokonch（中眼窩）に属している。

鼻幅は26.75㎜（4例），鼻高は49.00㎜（2例）で，鼻示数は55.47（2例）となり，chamaerrhin（低鼻）に属している。

全側面角は80.00度（2例），鼻側面角は85.67度（3例），歯槽側面角は63.00度（2例）で，歯槽側面角は小さく，4例のうちの2例にはやや強い歯槽性突顎が認められる。

次いで，男性について他の資料と比較してみると（表5），頬骨弓幅や中顔幅は他の地下式古墳人や朝田古墳人よりも小さく，顔高や上顔高も朝田古墳人よりも小さく，他の地下式古墳人に比較的近い。顔示数や上顔示数についても同様の傾向が認められ，朝田古墳人よりもより低頭の傾向がうかがえる。

眼窩についても同様で，眼窩幅もあまり広いものではないが，高径はより低く，従って眼窩示数は小さくなり，朝田古墳人よりも小さい示数値を示し，従来報告されている地下式古墳人のそれと一致している。

また鼻根部の計測値は表26•6に示しているように，鼻根部は広く扁平であるが，朝田古墳人と比較してみると，幅は旭台地下式古墳人の方がやや広いが，扁平度は朝田古墳人の方が強い。

鼻部についてもその高径が著しく低く，鼻示数は大きな値となっている。

表5　顔面頭蓋計測値（男性）　（㎜）

		旭台地下式古墳人		宮崎県地下式古墳人		朝田横穴墓古墳人	
		n	M	n	M	n	M
40.	顔長	3	100.00		—	3	93.33
45.	頬骨弓幅	2	135.50	1	146	1	(140)
46.	中顔幅	4	99.00	4	103.25	3	104.67
47.	顔高	3	111.67	4	114.25	3	118.00
48.	上顔高	5	65.00	5	64.40	5	67.60
47/45	顔示数（K）	1	82.31	1	82.01	1	(85.00)
48/45	上顔示数（K）	1	48.46	1	46.04	1	(48.57)
47/46	顔示数（V）	2	113.10	2	113.13	2	115.86
48/46	上顔示数（V）	2	64.84	2	62.23	3	66.59
51.	眼窩幅（左）	3	43.67	6	44.00	3	45.67
52.	眼窩高（左）	6	32.67	6	33.17	3	36.67
52/51	眼窩示数（左）	3	75.62	6	75.48	3	80.41
54.	鼻幅	7	28.71	7	27.57	4	27.25
55.	鼻高	6	48.50	7	50.14	5	52.40
54/55	鼻示数	6	59.16	7	54.94	4	51.44

歯槽側面角については，朝田古墳人よりも大きく，歯槽性突顎の傾向は弱いものである。

女性について同様に比較を行なってみると（表７）中顔幅は比較資料と大差ないが，顔高および上顔高は２群よりもわずかに大きく，従って顔示数もわずかに大きい。しかし，２群と同様低頭の傾向は強いものである。

表６　鼻根部計測値（男性）　（mm，度）

	旭台地下式古墳人		朝田横穴墓古墳人	
	n	M	n	M
前眼窩間幅	4	20.50	5	19.60
鼻根横弧長	2	24.00	5	22.00
鼻根彎曲示数	2	79.17	5	88.98
鼻骨最小幅	3	9.00	5	8.80
前頭突起上幅（右）	3	11.00	5	9.60
（左）	2	10.50	5	9.60
前頭突起水平傾斜角	1	98	4	113.75
グラベラ・ナジオン投影距離	2	2.50	1	2
鼻　根　角	2	137.00	4	144.75
鼻根陥凹示数	2	19.62	4	13.08

眼窩幅はやや狭く，眼窩高はわずかに高いので，眼窩示数はこの２例をみるかぎりでは大きな示数値である。

鼻根部の計測値は表２７・８に示すとおりで，鼻根部は広く扁平であるが，男性と同様，鼻根の幅は本例の方が幅広く，扁平度は朝田古墳人の方がやや強いようである。

鼻幅は２群の比較資料と大差なく，鼻高はわずかに大きいので，鼻示数もわずかに小さいが，ほとんど２群と大差ない。

また歯槽側面角は小さく，朝田古墳人と同様，女性には強い歯槽性突顎が認められる例があった。

表７　顔面頭蓋計測値（女性）　（mm）

		旭台地下式古墳人		宮崎県地下式古墳人		朝田横穴墓古墳人	
		n	M	n	M	n	M
40.	顔　長	1	95		—	4	100.00
45.	頬骨弓幅		—	1	134		—
46.	中顔幅	2	101.00	2	100.00	3	100.00
47.	顔　高	3	109.67	3	107.33	5	106.40
48.	上顔高	2	62.00	3	61.33	7	60.57
47／45	顔示数（K）		—	1	81.34		—
48／45	上顔示数（K）		—	1	47.76		—
47／46	顔示数（V）	2	107.44	2	108.24	3	105.91
48／46	上顔示数（V）	2	61.39	1	58.72	3	62.50
51.	眼窩幅（左）	3	40.33	5	40.60（右）	6	42.00（右）
52.	眼窩高（左）	2	33.00	5	31.80（右）	7	32.57（右）
52／51	眼窩示数（左）	2	84.61	5	77.55（右）	6	77.03（右）
54.	鼻　幅	4	26.75	4	26.00	7	26.43
55.	鼻　高	2	49.00	5	45.60	7	46.86
54／55	鼻示数	2	55.47	4	56.53	7	56.32

表８　鼻根部計測値（女性）　（㎜度）

	旭台地下式古墳人		朝田横穴墓古墳人	
	n	M	n	M
前眼窩間幅	3	20.00	7	17.29
鼻根横弧長	2	26.00	7	20.57
鼻根彎曲示数	2	82.74	7	85.35
鼻骨最小幅	3	9.33	7	8.14
前頭突起上幅　（右）	2	9.50	7	9.57
（左）	4	10.25	7	9.14
前頭突起水平傾斜角	2	89.50	6	101.50
グラベラ・ナジオン投影距離	4	1.75	6	1.00
鼻　根　角	2	160.00	6	153.83
鼻根陥凹示数	2	7.41	6	11.42

(2)　四　肢　骨

1)　上　肢　骨

1.　上　腕　骨

男性の計測値は表31に示すとおりで，最大長が計測可能なものは１例もなかった。推定中央位での最大径は23.50㎜（右，４例），24.33㎜（左，３例），最小径は17.50㎜（右，４例）18.33㎜（左，３例）で，骨体断面示数は74.37（右，４例），75.39（左，３例）となり，骨体はやや扁平である。また骨体最小周は61.25㎜（右，４例），63.00㎜（左，３例），中央周は66.75㎜（右，４例），69.33㎜（左，３例）で，骨体はやや細い。

女性の計測値は表32に示すとおり，最大長は263㎜（右，１例）で，やや短かく，骨体最小周は54.00㎜（右，２例），53.00㎜（左，３例），中央周は59.00㎜（右，４例），60.33㎜(左，３例）で，骨体は細く，長厚示数は20.53（右，１例）となり，示数値はあまり大きなものではない。また中央最大径は20.00㎜（右，４例），21.00㎜（左，３例），中央最小径は15.50㎜（右，４例），15.67㎜（左，３例）で，骨体断面示数は77.67（右，４例），74.64（左，３例）となり，左側の方がやや扁平である。

次いで，比較資料との比較を行なってみると（表９，１０），朝田古墳人よりもわずかに大きいのが，ほとんど大差ない。また女性についても，朝田古墳人よりもわずかに大きいようであるが，これも大差なく，男女ともに骨体は細い。骨体の扁平性は男性では認められるが，女性では弱いものである。

表 9　上腕骨計測値（男性，右）　（mm）

		旭台地下式古墳人		朝田横穴墓古墳人	
		n	M	n	M
1.	上腕骨最大長		—	1	299
2.	上腕骨全長		—	1	294
5.	中央最大径	4	23.50	4	22.50（左）
6.	中央最小径	4	17.50	4	16.50（左）
7.	骨体最小周	4	61.25	2	62.50（左）
7(a).	中　央　周	4	66.75	4	65.00（左）
6／5	骨体断面示数	4	74.37	4	73.47（左）
7／1	長厚示数		—	1	20.74

表 10　上腕骨計測値（女性，右）　（mm）

		旭台地下式古墳人		朝田横穴墓古墳人	
		n	M	n	M
1.	上腕骨最大長	1	263	1	264
2.	上腕骨全長	1	258	1	262
5.	中央最大径	4	20.00	2	19.50
6.	中央最小径	4	15.50	2	15.00
7.	骨体最小周	2	54.00	2	53.00
7(a).	中　央　周	4	59.00	2	57.50
6／5	骨体断面示数	4	77.67	2	76.84
7／1	長厚示数	1	20.53	1	19.70

2.　橈骨・尺骨

橈骨の計測値は表33，34に示すとおりで，男性について朝田古墳人と比較してみると（表11），諸径は朝田古墳人の1例よりも小さく，また骨体の扁平性は強い。

一方，女性橈骨の最大長はやや長いが，骨体はやや細い。

表 11　橈骨計測値（男性，右）　（mm）

		旭台地下式古墳人		朝田横穴墓古墳人	
		n	M	n	M
3.	最　小　周	1	41		—
4.	骨体横径	3	17.33	1	17（左）
4a	骨体中央横径	3	16.67	1	17（左）
5.	骨体矢状径	3	12.33	1	13（左）
5a	骨体中央矢状径	3	12.00	1	13（左）
5(5)	骨体中央周	3	45.00	1	47（左）
5／4	骨体断面示数	3	71.13	1	76.47（左）
5a／4a	中央断面示数	3	71.94	1	76.47（左）

尺骨の計測値は表35，36に示すとおりで，男性について朝田古墳人との比較を行なってみると（表12），長径は長いが，骨体諸径については大差ないようである。

女性についてもその長径は長く，骨体はやや細い傾向が認められる。

表 12　尺骨計測値（男性，右）

		旭台地下式古墳人		朝田横穴墓古墳人	
		n	M	n	M
1.	最大長	1	266	1	244
2.	機能長	1	233	1	213
3.	最小周	2	37.00	1	33
11.	尺骨矢状径	2	14.00	1	13
12.	尺骨横径	2	17.50	1	17
S	中央最小径	2	13.50	1	13
L	中央最大径	2	17.50	1	17
C	中央周	2	49.50	1	49
3／2	長厚示数	1	15.02	1	15.49
11／12	骨体断面示数	2	79.90	1	76.47
S／L	中央断面示数	2	76.96	1	76.47

2）下肢骨

1. 大腿骨

男性大腿骨の計測値は表37に示すとおりで最大長を計測することができるものは1例もなかった。推定中央位での矢状径は28.25 ㎜（右，4例），28.75㎜（左，4例），横径は27.00㎜（右，4例），27.00㎜（左，2例）で，骨体中断面示数は104.88（右，4例），103.71（左，2例）となり，骨体後面の発達は悪く，粗線の発達も悪いものである。また上骨体断面示数は80.84（右，2例）79.04（左，2例）で，骨体上部の扁平性はあまり強いものではない。

女性大腿骨の計測値は表38に示すとおりで，最大長は375㎜（左，1例）で，中央周は78.20㎜（右，5例），76.00㎜（左，3例）で，長厚示数は19.46（左，1例）である。骨体中央矢状径は24.80㎜（右），24.00㎜（左），骨体中央横径24.40㎜（右，5例），23.67㎜（左，3例）で，骨体中央断面示数は102.12（右，5例），101.57（左，3例）となり，骨体後面の発達は悪く，粗線の発達も著しく悪いものである。上骨体断面示数は80.41（右，3例），72.12（左，3例）となり，右側の扁平性は弱いが，左側は著しく強い。

次いで，朝田古墳人と比較してみると，（表13，14），男性では骨体の諸径は朝田古墳人よりもやや大きく，朝田古墳人程，きゃしゃな傾向は認められない。

女性については，長径は朝田古墳人よりも短かいが，骨体の諸径は朝田古墳人と大差なく，女性大腿骨にはやや細い傾向が認められるが，粗線の発達などは朝田古墳人よりもやや強いようである。

すなわち，朝田古墳人の大腿骨は男女ともきゃしゃで，骨体の形態は現代人にきわめて近い形態をしているが，本例の大腿骨も朝田古墳人と同じように骨体が細くなり，ややきゃしゃになってはいるが，粗線の発達や骨体後面の発達はこれよりもやや強いものである。

表 13　大腿骨計測値（男性，右）　（mm）

		旭台地下式古墳人		朝田横穴墓古墳人	
		n	M	n	M
1.	最　大　長			2	410.00
2.	自然位全長			2	402.50
6.	骨体中央矢状径	4	28.25	6	27.17（左）
7.	骨体中央横径	4	27.00	6	26.67（左）
8.	骨体中央周	4	87.75	6	85.17（左）
9.	骨体上横径	2	31.00	6	30.17（左）
10.	骨体上矢状径	2	25.00	6	24.50（左）
8／2	長厚示数			2	21.03
6／7	骨体中央断面示数	4	104.88	6	102.03（左）
10／6	上骨体断面示数	2	80.84	6	81.29（左）

表 14　大腿骨計測値（女性，右）　（mm）

		旭台地下式古墳人		朝田横穴墓古墳人	
		n	M	n	M
1.	最　大　長	1	375　（左）	2	386.00（左）
2.	自然位全長			1	385.　（左）
6.	骨体中央矢状径	5	24.80	7	24.00
7.	骨体中央横径	5	24.40	7	25.29
8.	骨体中央周	5	78.20	7	77.43
9.	骨体上横径	3	27.00	4	28.75
10.	骨体上矢状径	3	21.67	4	22.75
8／2	長厚示数	1	19.46（左）	1	20.52（左）
6／7	骨体中央断面示数	5	102.12	7	95.47
10／9	上骨体断面示数	3	80.41	4	79.15

2. 脛　　骨

男性脛骨の計測値は表39のとおりで，最大長は1例も計測できなかった。推定中央位での最大径は30.25mm（右，4例），31.50mm（左，4例），横径は22.50mm（右，4例），21.25mm（左，4例）で，中央断面示数は74.95（右，4例），67.82（左，4例）で，左骨体はやや扁平である。また骨体周は83.00mm（右，4例），83.75mm（左，1例）最小周は74.00mm（右，2例），74.00mm（左，1例）で，骨体はやや大きい。

女性脛骨の計測値は表40に示すとおりで，女性についても最大長は1例も計測できなかった。推定中央位における最大径は27.33mm（右，3例），24.75mm（左，4例），横径は19.33mm（右，3例），17.50mm（左，4例）で，中央断面示数は70.72（右，3例），71.01

（左，4例）となり，骨体の扁平性はほとんど認められない。骨体周は73.00㎜（右，3例）67.50㎜（左，4例），最小周は69㎜（右，1例），65.50㎜（左，2例）で，骨体はあまり大きいものではない。

次いで，朝田古墳人と比較を行なってみると（表15），男性については，骨体の諸径は朝田古墳人よりも大きく，断面示数も大きい。

一方，女性についても（表16）同様の傾向が認められ，骨体は朝田古墳人よりも大きいが，断面示数は本例の方が小さい。

すなわち，脛骨の諸径は朝田古墳人程きゃしゃな傾向は認められず，むしろ大きい傾向を示している。

表15　脛骨計測値（男性，右）　（㎜）

		旭台地下式古墳人		朝田横穴墓古墳人	
		n	M	n	M
8.	中央最大径	4	30.25	2	29.50
8a.	栄養孔位置最大径	3	33.00	2	34.00
9.	中央横径	4	22.50	2	21.50
9a。	栄養孔位横径	3	24.00	2	24.00
10.	骨体周	4	83.00	2	80.00
10a.	栄養孔位周	3	92.00	2	92.00
10b。	最小周	2	77.00	2	75.00
9／8	中央断面示数	4	74.95	2	72.81
9a／8a	栄養孔位断面示数	3	72.96	2	70.48

表16　脛骨計測値（女性，右）　（㎜）

		旭台地下式古墳人		朝田横穴墓古墳人	
		n	M	n	M
8.	中央最大径	3	27.33	6	26.00
8a.	栄養孔位最大径	3	31.00	7	29.57
9.	中央横径	3	19.33	7	19.14
9a。	栄養孔位横径	3	21.67	7	21.43
10.	骨体周	3	73.00	6	71.33
10a。	栄養孔位周	3	83.67	6	79.17
10b。	最小周	1	69	4	65.00
9／8	中央断面示数	3	70.72	6	75.19
9a／8a	栄養孔位断面示数	3	69.84	6	75.19

3) 四肢骨比

各四肢骨間の関係については，女性の橈骨と上腕骨との比を1例のみ算出することができたにすぎない。表17に示すとおり，示数位は80.61となり，上腕骨の長さの割には橈骨はやや長く，このような関係は宮の本弥生人の1例にも認められている。

(3) 推定身長値

推定身長値を算出することができたのは女性のみで，大腿骨，上腕骨および橈骨のそれぞれ最大長から，Pearson および藤井の式を用いて算出した（表18）。左大腿骨からの推定身長値は，145.78 cm（Pearson），145.22 cm（藤井）で，右上腕骨からの推定値は，143.91 cm（Pearson），143.90 cm（藤井）となり，いずれも低身長であるが，右橈骨から算出すると，152.10 cm（Pearson），149.29 cm（藤井）となり，やや高い推定値が出る。大腿骨から推定値を朝田古墳人と比較してみると（表19），本例は朝田古墳人よりも低身長である。

表17　四肢骨比（女性）

	旭台地下式古墳人		宮の本弥生人		大友弥生人		二塚山弥生人		宇久弥生人	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
橈骨／上腕骨	1	80.61	1	80.84	2	78.14	1	74.60	1	78.55

表18　推定身長値（女性，cm）

	7－2		9－2	
	Peason	藤井	Pearson	藤井
大腿骨（左）	145.78	145.22	—	—
上腕骨（左）	—	—	143.91	143.90
橈骨（左）	—	—	152.10	149.29

表19　大腿骨長大長からの推定身長値（女性，cm）

	旭台地下式古墳人		朝田横穴墓古墳人	
	n	M	n	M
Pearson の式	1	145.78（左）	2	147.92（左）
藤井の式	1	145.22（左）	2	147.78（左）

(4) 特殊所見

病的所見に関しては，田代（1982）が詳しく報告しているように，9号墳1号人骨（男性・熟年）に脊椎カリエスが認められており，また外耳道骨腫も観察されている。

1. 外耳道骨腫

外耳道骨腫については，田代が観察したものの他に追加例があるのでこれを合わせると表

20のとおり，14体（男6体，女性4体，小児・成年4体）に認められた。観察対象資料のうち両側とも観察ができたのが9体（男性5体，女性4体），片側のみ観察可能なものが15体（男性7体，女性3体，小児・成年5体）で，合計24体のうち14体（58.33％）に外耳道骨腫が認められた。

表20　外耳道骨腫

男　性	女　性	小児・成年
9−1（両側）	9−2（両側）	7−6（左）
11−3（両側）	12−2（両側）	3−3（左）
12−1（両側）	9−4（右）	9−3（左）
12−4（両側）	I−C（左）	11−5（右）
9−5（右）		
12−3（左）		

2. 抜　歯

7号墳7号人骨（女性・壮年）の下顎骨に抜歯の痕跡と考えられる所見が認められた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと次のとおりである。

／	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	／
／	M_2	M_1	P_2	P_1	C	⊗	／	／	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	／

（／：不明（破損）　⊗：歯槽閉鎖）

下顎右側の側切歯の歯槽は閉鎖しており，歯槽部は稜状を呈している。隣接する犬歯や小臼歯などは健全であり，またこの歯槽部にも病的異常は認められないので，下顎右側切歯は抜去された可能性が強い。ただし，これが縄文時代や弥生時代に認められるいわゆる風習的な抜歯であるかどうかは現時点では判断しがたい。

3. カラベリーの結節・臼旁結節

カラベリーの結節が7号墳6号人骨（性別不明・成年），9号墳2号人骨（女性・壮年），11号墳1号人骨（男性・壮年）に認められ，臼旁結節は12号墳2号人骨（女性・熟年）に観察された。カラベリーの結節はいずれも上顎第1大臼歯の舌側近心咬頭の舌側に，また臼旁結節は上顎第2大臼歯の頬側近心隅に認められた（表21）。この両結節は南九州では鹿児島県の成川古墳人（松下，1983）にも比較的高頻度に観察されている。

表21　カラベリーの結節・臼旁結節

カラベリーの結節			臼旁結節	
7−6（成年）	?	M_1	12−2（女性）	M_2
9−2（女性）	M_1	M_1		
11−1（男性）	M_1	M_1		

総　　括

宮崎県西諸県郡高原町にある旭台地下式横穴から総数36体の古墳時代人骨が出土した。1ケ所の横穴群から30体を超える古墳時代人骨が出土したのは宮崎県でも例がなく，地下式古墳人の研究を進める上では重要な資料となるものである。計測ならびに人類学的観察と検討を行なった。その結果を要約すれば次のとおりである。

1. 出土総数36体のうち，成人骨は28体，小児・成年骨は8体で，成人骨のうち男性は15体，女性は9体で，性別を明らかにすることができなかったものが4体あった。
2. 頭型については，男女とも頭蓋長幅示数を算出できるものは1例も存在しなかったが，観察によって頭型を推測できるものが男性4例，女性3例あり，男性は4例とも短頭に傾いており，女性は2例が短頭型を呈していた。
3. 男女とも顔面の幅径はあまり広いものではないが，高径は著しく低く，低顔である。また眼窩および鼻部の高径も低い。
4. 鼻根部は男女とも幅広く扁平であるが，その扁平度は朝田古墳人よりも弱いものである。
5. 男性には歯槽性突顎の傾向はほとんど認められないが，女性には強い歯槽性突顎を示す例が認められる。
6. 四肢骨は一般的に細いが，朝田古墳人程きゃしゃな傾向は認められない。また女性については，上腕骨の割には橈骨はやや長いという特徴が認められる。
7. 推定身長値を算出することができたのは女性のみで，左大腿骨からの推定身長値は145.78㎝（1例）で，低身長であった。
8. 特殊所見として，脊椎カリエス，外耳道骨腫，抜歯，カラベリーの結節および臼旁結節が認められた。外耳道骨腫の出現頻度は高く，また抜歯については風習的なものかどうかは判断しがたい。
9. 既に報告されている資料のうち，大萩地下式古墳人や上の原地下式古墳人には短頭の傾向が認められるが，日守地下式古墳人（55年出土資料）には短頭性は認められない。本例の頭型も短頭に傾いたものであった。また顔面には著しい低顔の傾向が認められ，この点は従来の地下式古墳人と全く共通する特徴であるが，最近報告した本庄28号地下式横穴出土の古墳人（松下，他，1982）には高顔の傾向が認められ，顔面の形態は必ずしも一様ではなく，あるいは地理的変異が存在するのかもしれない。四肢骨の性状や身長などもまだ不明な点が多い。今後も1つひとつの例を着実に資料化していき，地下式古墳人の形資人類学的な解明を進めていきたい。

＜擱筆するにあたり，本研究の機会を与えていただいた宮崎県教育委員会文化課ならびに人骨研究に関してご指導いただいた内藤芳篤教授に感謝致します。＞

参考文献

1. 城一郎，1938：古墳時代日本人人骨の人類学的研究。人類学輯報，1。
2. 石川恒太郎，他，1976：旭台地下式古墳群発掘調査。宮崎県文化財調査報告書，第19集：1－48。
3. Marfin－Saller，1957：Lehrbuch der Anfhropologie. Bd. I. Gustav Fisher Verlag. Stuttugart：429－597
4. 松下孝幸，1981：日守地下式古墳出土の人骨。宮崎県文化財調査報告書，第23集：169－178。
5. 松下孝幸，1981：宮崎県上の原地下式古墳出土の人骨。宮崎県文化財調査報告書，第24集：114－133。
6. 松下孝幸，1982：山口県朝田墳墓群第Ⅱ地区出土の人骨。山口県埋蔵文化財調査報告。第64集：179－206。
7. 松下孝幸，1982：鹿児島県諏訪野地下式土壙3号出土の古墳時代人骨。大口市埋蔵文化財発掘調査報告書，第2集：11－15。
8. 松下孝幸，分部哲秋，1982：宮崎県国富町本庄28号地下式古墳出土の人骨。宮崎考古第8号。16－20。
9. 松下孝幸，他，1983：山口県豊北町土井ケ浜遺跡出土の人骨。
10. 永井昌文，1981：古墳時代人骨。季刊人類学，12：18－26。
11. 内藤芳篤，1973：灰塚地下式横穴人骨。灰塚遺跡：72－77。
12. 内藤芳篤，1974：人骨とその埋葬方法。大萩遺跡（1）：55－62。
13. 内藤芳篤，松下孝幸，1976：南九州出土の古墳時代人骨。解剖誌，51：279。
14. 佐野一，1965：九州地方古墳時代人々骨の研究（予報）。日本人類学会・日本民族学会連合大会第20回紀事：212－214。
15. 島五郎，寺門之隆，1957：近畿地方古墳時代人頭骨について（略報）。人類誌，66：57－64。
16. 田代和則，1982：九州出土人骨の古病理学的研究。長崎医学会雑誌，57：77－102。
17. 寺門之隆，1981：古墳時代人骨。人類学講座，5：101－121。
18. 鈴木尚，1963：日本人の骨。岩波書店，東京。
19. SuzuKi，H.，1969：Microevolution in the Japanese Population from the Present-day。J.Fac. Sci., Univ. Tokyo. Sec. V, 3：279－309。

表 22. 脳頭蓋計測値（男性，mm）

		3−2	7−1	9−1	9−5	11−1	11−3	12−4	12−5	平均 n	平均 M	u^2
1.	頭蓋最大長	—	—	—	—	—	—	—	—		—	
8.	頭蓋最大幅	—	—	150	—	149	—	131	—	3	143.33	
17.	バジオン・ブレグマ高	138	—	—	—	134	—	—	136	3	136.00	
8／1	頭蓋長幅示数	—	—	—	—	—	—	—	—		—	
17／1	頭蓋長高示数	—	—	—	—	—	—	—	—		—	
17／8	頭蓋幅高示数	—	—	—	—	89.93	—	—	—	1	89.93	
9.	最小前頭幅	95	92	—	97	98	97	—	—	5	95.80	5.71
10.	最大前頭幅	118	—	—	—	121	—	—	—	2	119.50	
5.	頭蓋底長	97	—	—	—	—	101	—	95	3	97.67	
11.	両耳幅	123	—	132	—	132	129	117	—	5	126.60	42.25
12.	最大後頭幅	—	—	115	—	—	—	115	—	2	115.00	
13.	乳突幅	100	—	108	—	—	—	—	—	2	104.00	
7.	大後頭孔長	35	—	35	—	—	35	—	—	3	35.00	
16.	大後頭孔幅	31	—	34	—	—	—	—	31	3	32.00	
16／7	大後頭孔示数	88.57	—	97.14	—	—	—	—	—	2	92.86	
23.	頭蓋水平周	—	—	—	—	—	—	—	—		—	
24.	横弧長	308	—	—	—	316	—	—	—	2	312.00	
25.	正中矢状弧長	—	—	—	—	—	—	—	—		—	
	Vertex Rad	—	—	—	—	127	—	—	—	1	127	
	Nasion Rad	88	—	—	—	—	92	—	—	2	90.00	
	Subsp. Rad	86	—	—	—	95	98	—	—	3	93.00	
	Prosth。Rad	97	—	—	—	(103)	105	—	—	2	101.00	

表 23. 脳頭蓋計測値（女性，mm）

		3－1	7－7	9－2	12－2	n	平均 M	u^2
1.	頭蓋最大長	—	—	175	184	2	179.50	
8.	頭蓋最大幅	—	140	—	—	1	140	
17.	バジオン・ブレグマ高	139	—	127	—	2	133.00	
8／1	頭蓋長幅示数	—	—	—	—		—	
17／1	頭蓋長高示数	—	—	72.57	—	1	72.57	
17／8	頭蓋幅高示数	—	—	—	—		—	
9.	最小前頭幅	92	96	—	—	2	94.00	
10.	最　前頭幅	116	118	—	—	2	117.00	
5.	頭蓋底長	96	—	97	—	2	96.50	
11.	両　耳　幅	122	130	—	—	2	126.00	
12.	最大後頭幅	—	—	—	—		—	
13.	乳　突　幅	—	—	—	—		—	
7.	大後頭孔長	—	—	32	—	1	32.	
16.	大後頭孔幅	29	—	30	—	2	29.50	
16／7	大後頭孔示数	—	—	93.75	—	1	93.75	
23.	頭蓋水平周	—	—	—	—		—	
24.	横　弧　長	—	304	—	—	1	304	
25.	正中矢状弧長	—	—	360	—	1	360	
	Vertex Rad	—	122	116	—	2	119.00	
	Nasion Rad	86	88	89	93	4	89.00	8.64
	Subsp. Rad	86	91	94	95	4	91.50	16.32
	Prosth。Rad	94	98	—	—	2	96.00	

表 24. 顔面頭蓋計測値（男性）

(mm)

		3−2	7−1	9−1	9−5	11−1	11−3	12−4	12−5	平均 n	平均 M	平均 u^2
40.	顔長	95	—	—	—	(104)	108	—	97	3	100.00	
41.	側顔長	68	—	74	—	75	72	—	70(右)	4	72.25	9.61
42.	下顔長	109	—	—	—	117	124	—	—	3	116.67	
43.	上顔幅	107	109	—	—	111	109	—	—	4	109.00	2.66
45.	頬骨弓幅	130	—	141	—	—	—	—	—	2	135.50	
46.	中顔幅	100	98	99	99	—	—	—	—	4	99.00	0.67
47.	顔高	107	—	—	118	—	110	—	—	3	111.67	
48.	上顔高	63	(58)	—	66	—	64	67	65	5	65.00	2.50
47／45	顔示数（K）	82.31	—	—	—	—	—	—	—	1	82.31	
48／45	上顔示数（K）	48.46	—	—	—	—	—	—	—	1	48.46	
47／46	顔示数（V）	107.00	—	—	119.19	—	—	—	—	2	113.10	
48／46	上顔示数（V）	63.00	(59.18)	—	66.67	—	—	—	—	2	64.84	
50.	前眼窩間幅	21	17	—	—	—	20	24	—	4	20.50	8.35
44.	両眼窩幅	99	101	—	—	102	104	—	—	4	101.50	4.33
50／44	眼窩間示数	21.21	16.83	—	—	—	19.23	—	—	3	19.09	
51.	眼窩幅（右）	42	46	—	—	—	44	—	—	3	44.00	
	（左）	42	45	—	—	—	44	—	—	3	43.67	
52.	眼窩高（右）	33	32	—	35	—	36	30	34	6	33.33	4.71
	（左）	32	32	—	35	30	35	32	—	6	32.67	3.84
52／51	眼窩示数（右）	78.57	69.57	—	—	—	81.82	—	—	3	76.65	
	（左）	76.19	71.11	—	—	—	79.55	—	—	3	75.62	
54.	鼻幅	28	27	—	31	29	29	29	28	7	28.71	1.59
55.	鼻高	45	47	—	50	—	49	52	48	6	48.50	5.90
54／55	鼻示数	62.22	57.45	—	62.00	—	59.18	55.77	58.33	6	59.16	6.55
57.	鼻骨最小幅	12	7	—	—	—	8	—	—	3	9.00	
57(1)	鼻骨最大幅	19	—	—	—	—	—	—	—	1	19	
60.	上顎歯槽長	53	—	—	—	—	—	—	—	1	53	
61.	上顎歯槽幅	65	63	64	67	63	66	69	—	7	65.29	4.88
61／60	上顎歯槽示数	122.64	—	—	—	—	—	—	—	1	122.64	
72.	全側面角	82	—	—	74	—	74	—	(91)	3	76.67	
73.	鼻側面角	87	—	—	71	—	76	—	(94)	3	78.00	
74.	歯槽側面角	65	—	—	86	—	70	—	(80)	3	73.67	

表 25.　顔面頭蓋計測値（女性）　(mm)

		3−1	7−7	9−2	12−2	平均 n	平均 M	
40.	顔長	95	−	(95)	−	1	95.	
41.	側顔長	68	71	70(右)	76	3	71.67	
42.	下顔長	100	−	109	−	2	104.50	
43.	下顔幅	104	107	−	−	2	105.50	
45.	頬骨弓幅	−	−	−	−		−	
46.	中顔幅	100	102	−	−	2	101.00	
47.	顔高	109	108	112	−	3	109.67	
48.	上顔高	62	62	(68)	−	2	62.00	
47／45	顔示数 (K)	−	−	−	−		−	
48／45	上顔示数 (K)	−	−	−	−		−	
47／46	顔示数 (V)	109.00	105.88	−	−	2	107.44	
48／46	上顔示数 (V)	62.00	60.78	−	−	2	61.39	
50.	前眼窩間幅	−	17	21	22	3	20.00	
44.	両眼窩幅	(98)	99	−	94	2	96.50	
50／44	眼窩間示数	−	17.17	−	23.40	2	20.29	
51.	眼窩幅 (右)	−	44	40	37	3	40.33	
	(左)	40	43	−	38	3	40.33	
52.	眼窩高 (右)	33	33	(33)	−	2	33.00	
	(左)	34	(34)	−	32	2	33.00	
52／51	眼窩示数 (右)	−	75.00	(82.50)	−	1	75.00	
	(左)	85.00	(79.07)	−	84.21	2	84.61	
54.	鼻幅	27	24	27	29	4	26.75	4.24
55.	鼻高	35	(46)	53	(47)	2	49.00	
54／55	鼻示数	60.00	(52.17)	50.94	(61.70)	2	55.47	
57.	鼻骨最小幅	9	−	9	10	3	9.33	
57(1)	鼻骨最大幅	−	−	−	−		−	
60.	上顎歯槽長	−	−	(53)	−		−	
61.	上顎歯槽幅	54	66	63	65	4	62.00	30.03
61／60	上顎歯槽示数	−	−	(118.87)	−		−	
72.	全側面角	83	77	(86)	(83)	2	80.00	
73.	鼻側面角	88	81	88	(87)	3	85.67	
74.	歯槽側面角	67	59	(79)	(71)	2	63.00	

表 26.　鼻根部計測値（男性）

（mm，度）

	3−2	7−1	11−3	12−4	n	M
前眼窩間幅	21	17	20	24	4	20.50
鼻根横弧長	24	24	−	−	2	24.00
鼻根彎曲示数	87.50	70.83	−	−	2	79.17
鼻骨最小幅	12	7	8	−	3	9.00
前頭突起上幅　（右）	8	14	11	−	3	11.00
（左）	8	13	−	−	2	10.50
前頭突起水平傾斜角	98	−	−	−	1	98
グラベラ・ナジオン投影距離	4	−	1	−	2	2.50
鼻　根　角	140	−	134	−	2	137.00
鼻根陥凹示数	19.23	−	20.00		2	19.62

表 27.　鼻根部計測値（女性）

（mm，度）

	3−1	7−7	9−2	12−2	平均 n	平均 M
前眼窩間幅	−	17	21	22	3	20.00
鼻根横弧長	−	−	25	27	2	26.00
鼻根彎曲示数	−	−	84.00	81.48	2	82.74
鼻骨最小幅	9	−	9	10	3	9.33
前頭突起上幅　（右）	−	12	7	−	2	9.50
（左）	9	13	8	11	4	10.25
前頭突起水平傾斜角	−	69	110	−	2	89.50
グラベラ・ナジオン投影距離	3	2	1	1	4	1.75
鼻　根　角	−	−	155	165	2	160.00
鼻根陥凹示数	−	−	10.81	4.00	2	7.41

表 28.　下顎骨計測値　（mm）

		男性			女性	
		n	M	u^2	n	M
65.	下顎関節突起幅		—			—
65(1)。	下顎筋突起幅		—			—
66.	下顎角幅	1	102			—
68.	下顎長	1	68			
69.	オトガイ高	4	29.25	8.94	1	27
69(1).	下顎体高（右）	5	29.60	1.80	2	27.50
	（左）	2	29.00		1	27
69(2).	下顎体高（右）	4	26.75	1.59	2	23
	（左）	2	23.50		1	26
69(3).	下顎体厚（右）	6	11.33	1.08	2	15.20
	（左）	4	11.50	1.00	1	15
70.	枝高（右）	2	58.00			—
	（左）	2	60.00		1	56
70(3).	下顎切痕高（右）	2	10.50		1	10
	（左）	1	13		2	12.00
71.	枝幅（右）	2	30.50		2	31.50
	（左）	3	36.00		1	36
71a。	最小枝幅（右）	2	30.50		2	31.50
	（左）	3	36.00		1	36
71(1).	下顎切痕幅（右）	2	31.50		1	31
	（左）	1	40		2	34.50
79.	下顎枝角（右）	2	121.50		1	120
	（左）	2	126.00		1	133
68／65	幅長示数		—			—
69(2)／69	下顎高示数（右）	2	101.00			—
	（左）	1	70.00			—
71／70	下顎枝示数（右）	2	52.62			—
	（左）	2	57.52		1	64.29
69(3)／69(1)	下顎体高厚示数（右）	4	40.14	3.46	1	35.71
	（左）	2	41.43		1	55.56
66／65	下顎幅示数		—			—
70(3)／71(1)	下顎切痕示数（右）	2	33.33		1	32.26
	（左）	1	32.50		2	34.98

表 29.　鎖骨計測値（男性）

(mm)

		9−1 右	9−1 左	9−5 右	11−1 右	11−1 左	I−A 左	右 n	右 M	左 n	左 M
1.	鎖骨最大長	144	−	−	−	−	−	1	144		
2.	骨体彎曲高	5	−	−	10	−	−	1	5		
2a.	骨体彎曲高	28	−	−	−	−	−	1	28		
2(1).	肩峰端彎曲高	28	−	−	−	−	−	1	28		
3.	骨体彎曲弦長	99	−	−	−	−	−	1	99		
4.	中央垂直径	12	13	12	10	12	10	3	11.33	3	11.67
5.	中央矢状径	13	14	12	14	14	13	3	13.00	3	13.67
6.	中央周	42	41	41	41	42	40	3	41.33	3	41.00
6／1	長厚示数	29.17	−	−	−	−	−	1	29.17		
2a／1	彎曲示数	19.44	−	−	−	−	−	1	19.44		
4／5	鎖骨断面示数	92.31	92.86	100.00	71.43	85.71	76.92	3	87.91	3	35.16
2(1)／1	肩峰端彎曲示数	19.44	−	−	−	−	−	1	19.44		

表 30.　鎖骨計測値（女性）

(mm)

		3−1 右	9−2 右	9−2 左	9−4 右	平均 右 n	平均 右 M	平均 左 n	平均 左 M
1.	鎖骨最大長	−	134	−	147	2	140.50		−
2.	骨体彎曲高	−	5	−	8	2	6.50		−
2a.	骨体彎曲高	−	33	−	27	2	30.00		−
2(1).	肩峰端彎曲高	−	26	−	26	2	26.00		−
3.	骨体彎曲弦長	−	89	−	104	2	96.50		−
4.	中央垂直径	9	8	8	8	3	8.33	1	8
5.	中央矢状径	9	11	10	10	3	10.00	1	10
6.	中央周	29	30	31	30	3	29.67	1	31
6／1	長厚示数	−	22.39	−	20.41	2	21.40		−
2a／1	彎曲示数	−	24.63	−	18.37	2	21.50		−
4／5	鎖骨断面示数	100.00	72.73	80.00	80.00	3	84.24	1	80.00
2(1)／1	肩峰端彎曲示数	−	19.40	−	17.69	2	18.55		−

表 31.　上腕骨計測値（男性）

(mm)

		7−3 右	9−1 右	9−1 左	9−5 右	9−5 左	11−1 右	11−3 左	平均 右 n	平均 右 M	平均 右 u2	平均 左 n	平均 左 M
5.	中央最大径	22	24	24	25	25	23	24	4	23.50	1.66	3	24.33
6.	中央横径	16.	19	19	19	18	16	18	4	17.50	2.99	3	18.33
7.	骨体最小周	57	64	63	65	−	59	63	4	61.25	14.90	2	63.00
7(a).	中央周	62	69	68	72	71	64	69	4	66.75	20.88	3	69.33
6／5	骨体断面示数	72.73	79.17	79.17	76.00	72.00	69.57	75.00	4	74.37	17.06	3	75.39

表 32.　上腕骨計測値（女性）

(mm)

		3－1 右	7－4 左	7－2 左	9－2 右	9－2 左	12－2 左	I－A 右	I－A 左	I－B 右	右 n	右 M	右 u^2	左 n	左 M
1.	上腕骨最大長	(275)	－	－	263	－	－	－	－	－	1	263			－
2.	上腕骨全長	(273)	－	－	258	－	－	－	－	－	1	258			－
5.	中央最大径	20	20	21	20	－	22	19	－	21	4	20.00	0.67	3	21.00
6.	中央最小径	16	15	16	16	－	16	14	－	16	4	15.50	1.00	3	15.67
7.	骨体最小周	54	－	56	54	53	－	－	50	－	2	54.00		3	53.00
7(a).	中央周	60	58	60	59	－	63	57	－	60	4	59.00	1.99	3	60.33
6／5	骨体断面示数	80.00)	75.00	76.19	80.00	－	72.73	73.68	－	76.19	4	77.67	9.49	3	74.64
7／1	長厚示数	(19.64)	－	－	20.53	－	－	－	－	－	1	20.53			－

表 33.　橈骨計測値（男性）

(mm)

		9－1 右	9－1 左	9－5 右	9－5 左	11－1 右	11－3 左	平均 右 n	平均 右 M	平均 左 n	平均 左 M
3.	最小周	－	46	－	－	41	－	1	41	1	46
4.	骨体横径	18	18	17	17	17	17	3	17.33	3	17.33
4a.	骨体中央横径	17	17	17	17	16	15	3	16.67	3	16.33
5.	骨体矢状径	13	14	13	12	11	12	3	12.33	3	12.67
5a.	骨体中央矢状径	13	13	12	12	11	12	3	12.00	3	12.33
5(5)	骨体中央周	47	47	45	45	43	43	3	45.00	3	45.00
5／4	骨体断面示数	72.22	77.78	76.47	70.59	64.71	70.59	3	71.13	3	72.99
5a／4a	中央断面示数	76.47	76.47	70.59	70.59	68.75	80.00	3	71.94	3	75.69

表 34.　橈骨計測値（女性）

(mm)

		3－1 右	9－2 右	9－4 左	平均 右 n	平均 右 M	平均 左 n	平均 左 M
1.	最大長	－	212	－	1	212		－
1b.	平行長	－	208	－	1	208		－
2.	機能長	－	201	－	1	201		－
3.	最小周	－	45	－	1	45		－
4.	骨体横径	14	14	16	2	14.00	1	16
4a.	骨体中央横径	14	14	16	2	14.00	1	16
5.	骨体矢状径	10	10	10	2	10.00	1	10
5a.	骨体中央矢状径	10	11	11	2	10.50	1	11
5(5)	骨体中央周	38	38	41	2	38.00	1	41
3／2	長厚示数	－	22.39	－	1	22.39		－
5／4	骨体断面示数	71.43	71.43	62.50	2	71.43	1	62.50
5a／4a	中央断面示数	71.43	78.57	68.75	2	75.00	1	68.75

表 35.　尺骨計測値（男性）

（mm）

		9－1 右	9－1 左	9－5 左	11－1 右	平均 右 n	平均 右 M	平均 左 n	平均 左 M
1.	最大長	－	－	－	266	1	266		－
2.	機能長	－	－	－	233	1	233		－
3.	最小周	39	39	－	35	2	37.00	1	39
11.	尺骨矢状径	15	15	14	13	2	14.00	2	14.50
12.	尺骨横径	18	17	17	17	2	17.50	2	17.00
S	中央最小径	15	14	12	12	2	13.50	2	13.00
L	中央最大径	18	17	15	17	2	17.50	2	16.00
C	中央周	51	50	44	48	2	49.50	2	47.00
3／2	長厚示数	－	－	－	15.02	1	15.02		－
11／12	骨体断面示数	83.33	88.24	82.35	76.47	2	79.90	2	85.30
S／L	中央断面示数	83.33	82.35	80.00	70.59	2	76.96	2	81.18

表 36.　尺骨計測値（女性）

（mm）

		3－1 右	7－2 右	9－2 右	平均 右 n	平均 右 M
1.	最大長	－	－	233	1	233
2.	機能長	－	－	207	1	207
3.	最小周	－	－	31	1	31
11.	尺骨矢状径	11	13	12	3	12.00
12.	尺骨横径	15	16	14	3	15.00
S	中央最小径	11	11	11	3	11.00
L	中央最大径	15	16	14	3	15.00
C	中央周	42	45	41	3	42.67
3／2	長厚示数	－	－	14.98	1	14.98
11／12	骨体断面示数	73.33	81.25	85.71	3	80.10
S／L	中央断面示数	73.33	68.75	78.57	3	73.55

表 37.　大腿骨計測値（男性）

（mm）

		7－3 右	11－3 右	11－3 左	12－3 右	12－3 左	12－5 右	I－A 右	I－A 左	平均 右 n	平均 右 M	平均 右 u^2	平均 左 n	平均 左 M	平均 左 u^2
6.	骨体中央矢状径	30	31	31	27	28	30	25	26	4	28.25	7.56	4	28.75	4.93
7.	骨体中央横径	27	26		26		28	28	27	4	27.00	1.32	2	27.00	
8.	骨体中央周	87	92		84		92	83	84	4	87.75	24.21	2	85.50	
9.	骨体上横径	31	30		－		－	32	31	2	31.00		2	31.00	
10.	骨体上矢状径	25	26		－		－	24	24	2	25.00		2	24.50	
6／7	骨体中央断面示数	111.11	119.23	－	103.85		107.14	89.29	96.30	4	104.88	151.54	2	103.71	
10／9	上骨体断面示数	80.65	86.67		－		－	75.00	77.42	2	80.84		2	79.04	

表 38.　大腿骨計測値（女性）

(mm)

		3－1		7－2		9－2		12－2		I－B	I－C	平均				
		左	右	左	右	右	左	右	右	左		右			左	
												n	M	u2	n	M
1.	最大長	—	—	375	—	—	—	—	—	—			—		1	375
2.	自然位全長	—	—	370	—	—	—	—	—	—			—			
6.	骨体中央矢状径	25	23	23	25	26	24	26	24	—		5	24.80	1.69	3	24.00
7.	骨体中央横径	24	23	22	22	27	25	24	26	—		5	24.40	4.28	3	23.67
8.	骨体中央周	77	72	72	76	83	79	81	79	—		5	78.20	18.66	3	76.00
9.	骨体上横径	30	27	27	—	—	—	26	28	29		3	27.00		3	28.67
10.	骨体上矢状径	22	21	20	—	—	—	23	21	20		3	21.67		1	20.67
6／7	骨体中央断面示数	104.17	100.00	104.55	113.64	96.30	96.00	108.33	92.31	—		5	102.12		3	101.57
10／9	上骨体断面示数	73.33	77.78	74.07	—	—	—	88.46	75.00	68.97		3	80.41		3	72.12

表 39.　脛骨計測値（男性）

(mm)

		7－3	9－5	11－3		12－5	I－A		12－3		平均					
		左	右	右	左	右	右	左	右	左	右			左		
											n	M	u2	n	M	u2
8.	中央最大径	32	28	28	29	32	—	32	33	33	4	30.25	6.92	4	31.50	2.99
8a.	栄養孔位最大径	38	—	31	—	34	34	37	—	—	3	33.00		2	37.50	
9.	中央横径	23	24	22	23	23	—	20	21	19	4	22.50	1.66	4	21.25	4.24
9a.	栄養孔位横径	26	—	25	—	24	23	22	—	—	3	24.00		2	24.00	
10.	骨体周	88	82	79	82	86	—	84	85	81	4	83.00	9.99	4	83.75	9.61
10a.	栄養孔位周	100	—	90	—	96	90	94	—	—	3	92.00		2	97.00	
10b.	最小周	—	75	73	74	—	—	—	—	—	2	74.00		1	74.	
9／8	中央断面示数	71.88	85.71	78.57	79.31	71.88	—	62.50	63.64	57.58	4	74.95	88.74	4	67.82	93.90
9a／8a	栄養孔位断面示数	68.42	—	80.65	—	70.59	67.65	59.46	—	—	3	72.96		2	63.94	

表 40.　脛骨計測値（女性）

(mm)

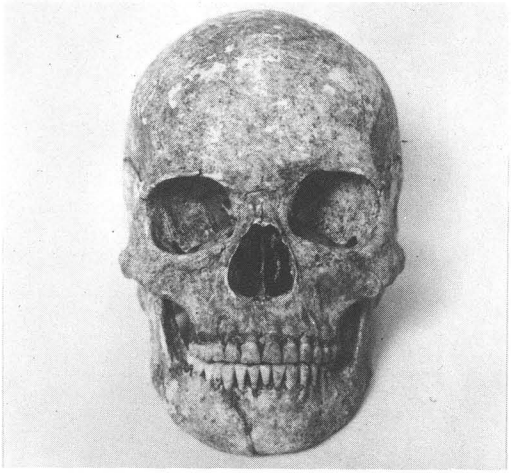
		3－1		7－2		7－4	7－7	12－2	I－B	平均				
		右	左	右	左	左	左	右	左	右		左		
										n	M	n	M	u2
8.	中央最大径	27	—	27	26	25	22	28	26	3	27.33	4	24.75	3.57
8a.	栄養孔位最大径	30	27	31	30	28	—	32	—	3	31.00	3	28.33	
9.	中央横径	20	—	18	17	19	17	20	17	3	19.33	4	17.50	1.00
9a.	栄養孔位横径	21	20	20	18	19	—	24	—	3	21.67	3	19.00	
10.	骨体周	73	—	71	70	69	62	75	69	3	73.00	4	67.50	
10a.	栄養孔位周	80	76	83	83	74	—	88	—	3	83.67	3	77.67	
10b.	最小周	—	—	—	66	—	—	69	65	1	69	2	65.50	
9／8	中央断面示数	74.07	—	66.67	65.38	76.00	77.27	71.43	65.38	3	70.72	4	71.01	42.38
9a／8a	栄養孔位断面示数	70.00	74.07	64.52	60.00	67.86	—	75.00	—	3	69.84	3	67.31	

表 41. 腓骨計測値（男性）　(mm)

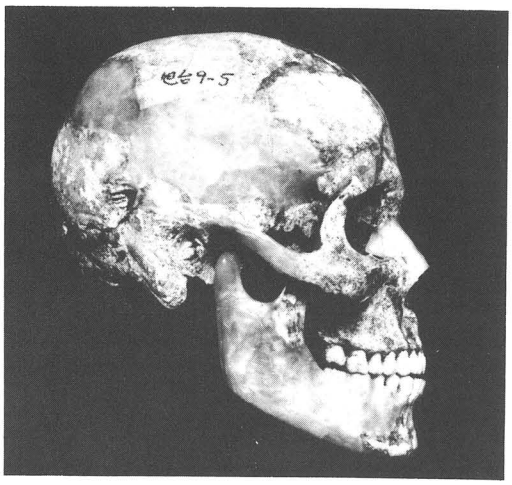
		左	右	右	左	右		左	
						n	M	n	M
2.	中央最大径	17	16	14	15	2	15.00	2	16.00
3.	中央最小径	11	9	12	10	2	10.50	2	10.50
4.	中　央　周	45	43	43	41	2	43.00	2	43.00
3／2	中央断面示数	64.71	56.25	85.71	66.67	2	70.98	2	65.69

表 42. 腓骨計測値（女性）　(mm)

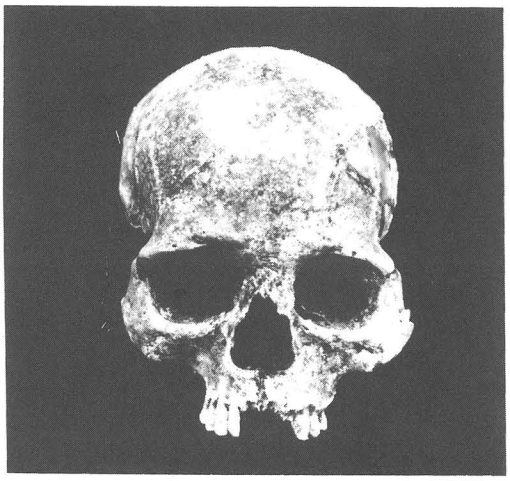
		7－2		9－2	12－2	平　均			
		右	左	右	右	右		左	
						n	M	n	M
2.	中央最大径	15	15	15	12	2	13.50	2	15.00
3.	中央最小径	11	9	10	9	2	10.00	2	9.50
4.	中　央　周	45	42	44	36	2	40.50	2	43.00
3／2	中央断面示数	73.33	60.00	66.67	75.00	2	74.17	2	63.34



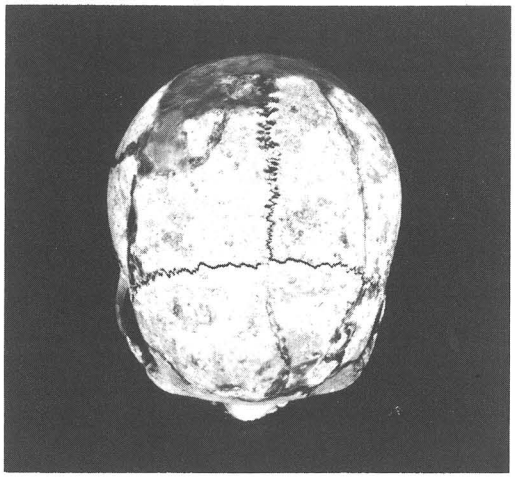
3 号墳 2 号人骨　（男性・熟年）



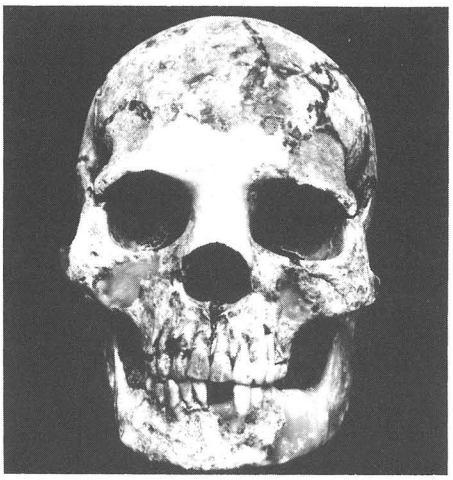
9 号墳 5 号人骨　（男性・熟年）



7 号墳 1 号人骨（男性・熟年）　　11 号墳 3 号人骨（男性・熟年）

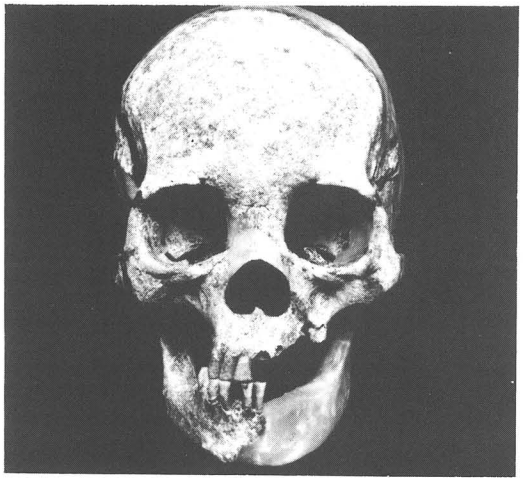


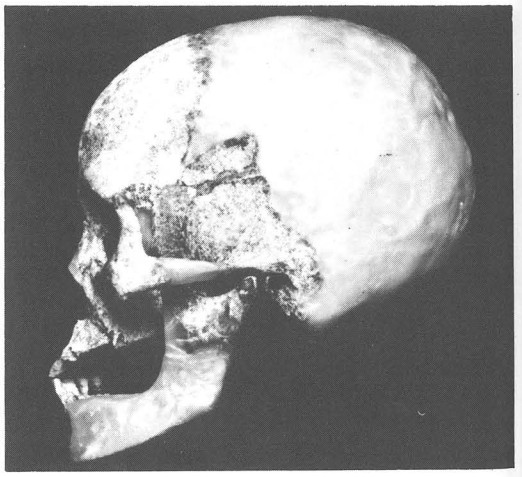
11号墳1号人骨（男性・熟年）



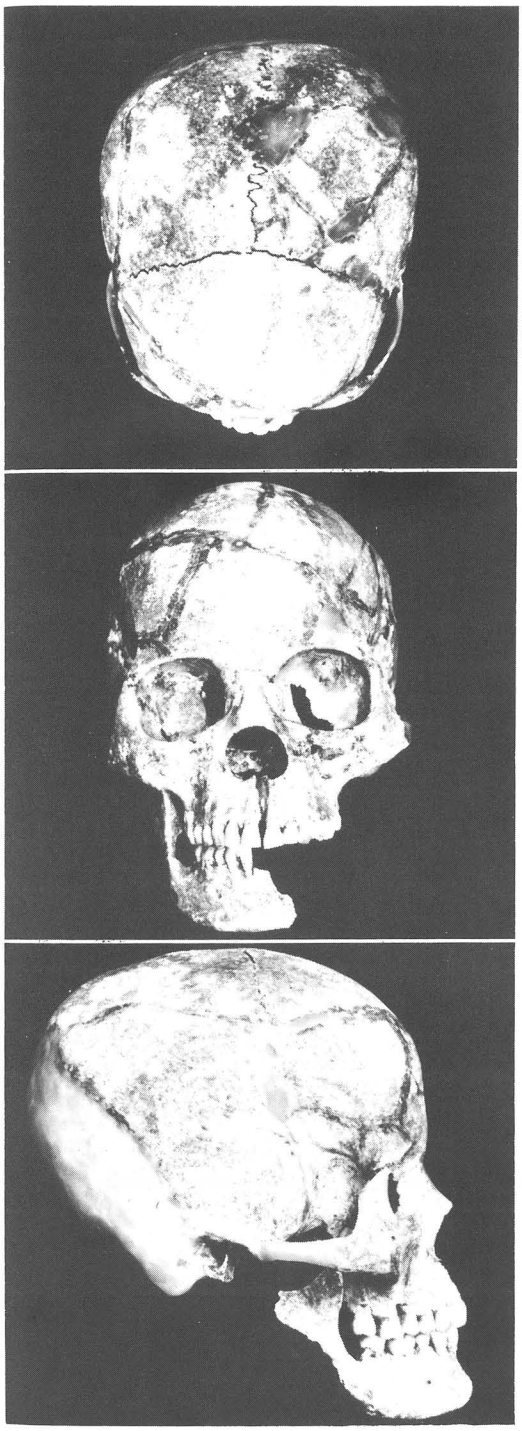
11号墳1号人骨（男性・壮年）

外耳道骨腫（11－1）

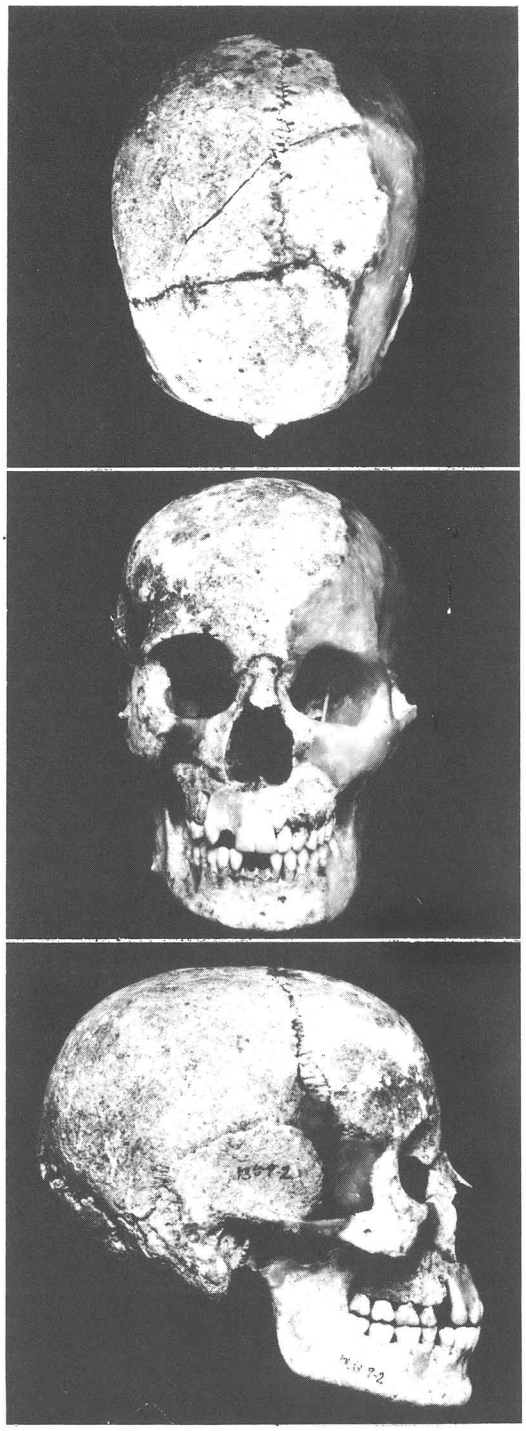




3号墳1号人骨（女性・熟年）



7 号墳 7 号人骨（女性・壮年）



9 号墳 2 号人骨（女性・壮年）

宮崎県高原町旭台地下式横穴出土の古墳時代小児・成年骨

例　　言

1. 本報告は，昭和５０年１２月４日から同月１２日まで宮崎県教育委員会及び高原町教育委員会で実施した西諸県郡高原町旭台地下式横穴群発掘調査において出土した埋葬人骨にかかる報告である。
2. 人骨の考証は，長崎大学医学部解剖学第二教室に依頼し，同教室講師松下孝幸，同助手分部哲秋，同研究生野田耕一氏に執筆いただいた。記して感謝申し上げる。
3. 発掘調査の報告は，宮崎県文化財調査報告書第１９集に掲載している。

宮崎県高原町旭台地下式横穴出土の古墳時代小児・成年骨

分　部　哲　秋*

はじめに

宮崎県西諸県郡高原町にある旭台地下式横穴（古墳）群が，１９７５年に調査され，総数３６体の人骨が出土した。そのうち８体が小児・成年骨で，これらの人骨群は，考古学所見（石川，１９７６）より古墳時代後期の前半に属するものである。

筆者は，生活環境の著しく異なる縄文時代から，弥生，古墳時代を経て，歴史時代に至る幼小児・成年の成長，化骨あるいは歯の萌出などの問題を研究することは，きわめて重要であると考え，現在，資料を収集するとともに，各遺跡ごとの報告を行なっている。

旭台地下式横穴出土の小児・成年骨は，資料数の少ない古墳時代のもので，今後貴重な資料になると考えられ，詳細な観察，計測および年令の推定を行なったので，その結果を報告したい。

資　　料

旭台地下式横穴出土の小児・成年骨８例の年令および年令区分は，表１に示すとおりである。

年令については，藤田（１９６５）の歯の萌出時期，金田（１９５７）の歯根形成時期により，現代と古墳時代のそれらが大差ないと仮定したうえで推定したものである。なお，成年骨に関しては，鈴木（１９４３）の化骨に関する線学的研究に従った。

幼小児骨の性差については，種々の研究がなされているが，なお，性別を同定することは難しいのが現状である。成年骨についても，大坐骨切痕部が欠損しており，同定することはできなかった。

計測は，Marfin-Saller（１９５７）の方法で行なったが，脛骨の横径については森本（１９７１）の方法に従った。

比較資料としては，旭台成人骨（松下）および上の原地下式古墳８号（成年）（分部，１９８１）の成績を用いた。

表１．小児・成年骨資料

人骨番号	推定年令	年令区分	人骨番号	推定年令	年令区分
３号墳３号人骨		成年	１１号墳２号人骨		成年
７号墳６号人骨		成年	１１号墳４号人骨	８才	小児（Ⅰ期）
８号墳２号人骨	７～８才	小児（Ⅰ期）	１１号墳５号人骨	１２才	小児（Ⅱ期）
９号墳３号人骨	７才	小児（Ⅰ期）	番外Ⅰ号墳Ｅ人骨	７才	小児（Ⅰ期）

＊　長崎大学医学部解剖学第２教室

所　見

3号墳3号人骨（成年）

1）頭　蓋

脳頭蓋は右側頭部から後頭部を欠き，顔面頭蓋では下顎骨の右半分が欠如していた。

脳頭蓋の骨壁は薄く，前頭部には弱い膨隆が認められる。主要計測値は，表2に示すように，頭蓋最大長が174㎜，頭蓋最大幅は復元値ではあるが（147㎜），バジオン・ブレグマ高が136㎜で，頭蓋長幅示数は（84.48）となり，頭型は短頭型に属している。これらの3主径は，表2に示すように，上の原8号（成年）よりはかなり大きく，旭台成人骨に近い値を示している。

顔面頭蓋は，眉間部に弱い隆起が認められるが，眉上弓の発達は弱い。また，鼻根部の陥凹は浅く，扁平である。計測値は表3に示すように，中顔幅が94㎜，上顔高57㎜で，従ってウィルヒョーの上顔示数は60.63となる。顔型は過低顔に属し，低・広顔の傾向が著しい。また，これらの計測値は，表3に示すように，旭台成人骨に比べて小さく，上の原成年骨とほぼ同じである。

眼窩については，幅径が計測できないが，眼窩高が32㎜（左）である。鼻幅は25㎜，鼻高43㎜で，鼻示数は58.14となり，過低鼻に属している。

残存した歯を歯式で示すと次のとおりである。歯はM_3の他はすべて萌出し，歯根もM_2まで完成している。咬耗度は，M_1がBroca 2度で，その他は1度である。

$(M_3)\ M_2\ M_1\ P_2\ P_1\ C\ I_2\ I_1$	$I_1\ I_2\ C\ P_1\ P_2\ M_1\ M_2\ (M_3)$
$(M_3)\ M_2\ M_1\ /\ P_1\ C\ I_2\ \bigcirc$	$\bigcirc\ I_2\ C\ P_1\ P_2\ M_1\ M_2\ (M_3)$

（● 遊離歯　（ ）歯槽内埋伏　○歯槽開存　／不明）

2）四肢骨

1.　上肢骨

右側の橈骨および尺骨が残存していたが，橈骨のみが計測可能である。計測値は表5に示すとおりで，旭台成人骨よりもかなり小さく，旭台11－2（成年）とほぼ同じ値を示し，骨体は細長い。

2.　下肢骨

大腿骨は，長さの割に骨体が細く，粗線の発達も悪い。計測値は表7に示すように，最大

長は374㎜（左），中央矢状径23.3㎜（左），中央横径19.9㎜（左），中央周67.0㎜（左）で，中央断面示数は116.00となる。また，両骨端を除いた骨体の最大長は341㎜である。

最大長は表7に示すように，旭台成人女性骨の値とほぼ同じであるが，中央部の諸径は，女性骨の平均値より小さく，従って骨体は，これらよりもさらに細長いものである。

ちなみに，Pearsonの公式を用いて推定身長値を算出してみると，男性と仮定した場合は151.62㎝，女性と仮定した場合は145.59㎝となり，低身長である。

脛骨の推定中央位での計測値は，表8に示すように，最大径が23.5㎜（右），横径18.2㎜（右），中央周66.0㎜（右）で，断面示数は77.45となり，扁平性は全く認められない。また，最小周は62.5㎜である。これらの諸径は，表8に示すように，旭台成人骨よりもかなり小さく，旭台11－2とほぼ同じで，上の原成年骨よりも大きい。

3）化　骨

軟骨結合部の骨癒合は，表9に示すように，恥骨坐骨間がすでに完了しているが，その他は未癒合である。

4）年令の推定

年令は，歯については歯根がM_2まで完成しているので，15才以上と推定される。しかし，化骨の状態は，恥骨坐骨間（7～8才）の他は未癒合で，これを合わせ推測すると，成年期前半と推定される。

7号墳6号人骨（成年）

1）頭　蓋

左側頭部，後頭骨の鱗部上半と底部および遊離歯6本が残存していた。

これらの骨壁は薄く，乳様突起も小さい。歯を歯式で示すと，次のとおりである。歯根はM_2まで完成しており，咬耗度は，M_1がBroca 2度，その他は1度である。

／／／ P_2 ／／／／	／／／／／ M_1 M_2	● 遊離歯
／／／ P_2 ／／／／	／／／／／ M_1 M_2	／不明

2）四肢骨

左肩甲骨の烏口突起と関節窩および四肢骨片が残存するのみであった。

3）化　骨

表9に示しているように，後頭骨蝶形骨間と烏口突起はともに，未癒合である。

4）年令の推定

歯は，M_2の歯根が完成しており，年令は15才以上と考えられるが，烏口突起は未癒合である。従って，年令は，成年期前半と推定される。

8号墳2号人骨（7～8才）

頭　蓋

前頭骨，脳頭蓋の骨片および遊離歯2本が残存するのみであった。

前頭骨の眉間には弱い隆起が認められるが，眉上弓には，認められず扁平である。残存した歯は$\underline{I_1}$と$\underline{|M_1}$で，咬耗度は$\underline{|M_1}$がBroca 1度であるが，$\underline{I_1}$には認められない。従って，$\underline{|M_1}$は萌出し，$\underline{I_1}$は萌出直前か萌出直後と考えられ，本人骨の年令は，7～8才と推定される。

9号墳3号人骨（7才）

頭　蓋

脳頭蓋は前頭骨の一部と左側頭骨が残っているのみで，頭型を知ることはできない。

顔面頭蓋は，右上顎骨の頬骨突起，右頬骨および両側の下顎枝を欠損している。計測値は，表3に示すように，幅径は計測できないが，顔高は92㎜，上顔高51㎜で高径は小さく，成人骨はもとより，他の成年骨に比べて著しく低顔である。

鼻幅は21㎜，鼻高41㎜で，鼻示数は52.50となり，低鼻に属している。

歯を歯式で示すと次のとおりである。咬耗度は，乳歯がBroca 2度，I_1とM_1が1度である。

$\overset{\bullet}{(M_2)}$ ／　○ ○	I_1 $\underset{\vee}{I_2}$　$M_1(M_2)$		● 遊離歯
m_2 m_1 C	○ m_1 m_2		( )歯槽内埋伏
m_2 m_1 ○	○ m_1 m_2		∨萌出途中
(M_2) M_1　I_2 I_1	○ I_2　／ ／		○歯槽開存
			／不明

年令は，歯が下顎I_2まで萌出し，上顎I_2が萌出途中であることから，7才と推定される。

11号墳2号人骨（成年）

1）頭　蓋

脳頭蓋は，前頭部から頭頂部にかけてが残存し，前頭部はやや膨隆している。主要計測項目での計測はできないが，正中矢状前頭弧長は131㎜，正中矢状前頭弦長は110㎜である。

顔面頭蓋は，右頬骨と左下顎枝を欠く他は，ほぼ完全である。眉間には弱い隆起が認められるが，眉上弓は扁平である。また，鼻根部は広く，陥凹も弱い。

計測値は表3に示すように，顔高は101㎜，上顔高59㎜と低く，頬骨弓幅は計測できないが，中顔幅はやや広い。従って，ウィルヒョーの顔示数，上顔示数は，それぞれ103.06，60.20となり，低・広顔の傾向が著しい。

眼窩示数は76.19（左），鼻示数は58.14で，それぞれ，中眼窩，過低鼻に属している。

歯は上顎，下顎ともM_3まで萌出しており，歯根もM_2まで完成している。咬耗度は，I_1，I_2，M_1がBroca 2度で，その他は1度である。なお，残存した歯を歯式で示すと，次のとおりである。

M_3 M_2 M_1 P_2 P_1 C ○ ○	I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 M_2 M_3	（○歯槽開存）
M_3 M_2 M_1 P_2 P_1 C I_2 I_1	I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 M_2 ○	

2）四肢骨

1.　上肢骨

左肩甲骨の烏口突起，右上腕骨，左右の橈骨および右尺骨が残存していた。

上腕骨の計測値は，表4に示すように，骨頭を除いた骨体の最大長は236㎜（右）で，中央部での最大径は17.6㎜（右），最小径13.2㎜（右）で，断面示数は75.00（右）となる。また，中央周，最小周は，それぞれ51.0㎜（右），49.0㎜（右）である。これらの計測値は，表4に示すとおり，成人骨に比べてかなり小さく，上の原成年骨とほぼ同じである。

橈骨および尺骨の推定中央位での計測値は，表5，6に示すとおりであり，両骨とも，成人男性はもとより，女性よりも小さく，骨体は細い。また，断面示数も大きく，骨体は扁平なものではない。

2.　下肢骨

寛骨，大腿骨および脛骨が残存していた。

大腿骨の推定中央位における計測値は，表7に示すように，矢状径が22.3㎜（右），横径19.6㎜（右），中央周66.5㎜（右）で，断面示数は113.78となる。

これらの計測値を成年期のものと比較すると，表7に示すとおり，この大腿骨の骨体は，上の原成年骨よりもやや大きく，旭台3－3とほぼ同じである。

脛骨の推定中央位での計測値は，表8に示すように，最大径が24.2㎜（左），横径17.3㎜（左），骨体周65.0㎜（左）で，断面示数は71.4（左）となる。この示数値は，成年期人骨の中ではやや小さいものであるが，扁平性は認められない。

各計測値を成年期のものと比較してみると，表8に示すとおり，上の原成年骨よりもかなり大きく，旭台3－3とほぼ同じである。

3）化　骨

化骨の状態は，表9に示すとおりで，肩甲骨の烏口突起ならびに上腕骨滑車が，骨癒合を完了している。また，上腕骨の外側上顆および小頭は $^{2}/_{3}$ 程度，尺骨の近位端は $^{1}/_{3}$ 程度まで癒合している。その他は，未癒合である。

4）年令の推定

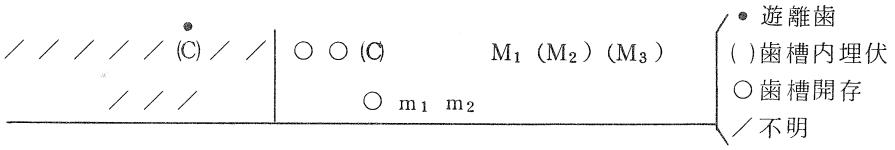
年令は，歯については萌出状態あるいは歯根の形成程度から15才以上と推定される。しかし，化骨の状態は，骨癒合を完了していない部が多く，このことから年令は，成年期前半に属するものと推定される。

11号墳4号人骨（8才）

1）頭　蓋

脳頭蓋では，前頭骨右半と左側頭部が残存していた。前頭部には弱い膨隆が認められ，乳様突起も小さい。

顔面頭蓋でも，左上顎骨および歯が残存するのみであった。歯は$\underline{|M_1}$が萌出，$\underline{|I_1}$と$\underline{|I_2}$は欠如しているが，歯槽の開存状態からすでに，萌出していたものと考えられる。咬耗度は，乳歯がBroca 2度で，$\underline{|M_1}$が1度である。なお，残存した歯を歯式で示すと，次のとおりである。



2）四肢骨

上肢骨は残存しておらず，下肢骨の右側大腿および脛骨が残っていた。

大腿骨の推定中央位での計測値は，表７に示すように，矢状径が１６.９㎜，横径１６.４㎜，中央周５４.０㎜で，従って，断面示数１０３.０５となる。これらの計測値は，旭台11－５（12才）とほぼ同じである。

脛骨の推定中央位での計測値は，表８に示すように最大径が１９.４㎜，横径１６.３㎜，中央周５６.０㎜で，断面示数は８４.０２となる。示数値は大きく，扁平性は全く認ゆられない。

これらの計測値は，表８に示すとおり，旭台 11－５に比べてやや小さいものである。

3）化　骨

表９に示しているように，後頭骨蝶形骨間が未癒合であるが，その他は，欠如しているために観察不能であった。

4）年令の推定

歯の萌出状態は，上顎 I_2 まで萌出し，上顎のＣ，P_1，P_2 は未萌出である。従って，年令は，８才と推定される。

11号墳５号人骨（12才）

1）頭　蓋

脳頭蓋は，顔面部に比べて保存状態が悪く，前頭部から右側頭部にかけてが，残存するのみであった。前頭部には，弱い膨隆が認められる。計測は，最小前頭幅のみが行なえ，９０㎜である。

顔面頭蓋は，鼻骨と下顎体左半が欠如している他は，ほぼ完全であった。眉間および眉上弓における隆起は認められず，扁平である。

計測値は，表３に示すように，上顔高が（５６㎜）と小さく，上顔幅が９６㎜，中顔幅９５㎜と幅径はやや大きい。従って，ウィルヒョーの上顔示数は５８.９５となり，低・広顔の傾向が著明である。

眼窩幅は３８㎜（左），眼窩高３１㎜（左）で，眼窩示数は８１.５８（左）となり，中眼窩に属している。また，鼻幅は２３㎜，鼻高４２㎜で，鼻示数は５４.７６となり，低鼻に属している。

残存した歯を歯式で示すと，次のとおりである。上顎 M_2 は萌出しているが，歯冠が M_1 より低位にあり，萌出直後と考えられる。咬耗度は，すべて Broca １度である。

$(M_3)\ M_2\ M_1\ P_2\ P_1$ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ $P_2\ M_1\ M_2\ (M_3)$	● 遊離歯
$(M_3)\ M_2\ M_1\ P_2\ P_1\ C\ I_2\ I_1$	／／／／ $P_2\ M_1\ M_2\ (M_3)$ ● ● ●	( )歯槽内埋伏 ○歯槽開存 ／不明

2) 四肢骨

1. 上肢骨

右側の橈骨および尺骨が残存していた。推定中央位での計測値は，表5，6に示すとおりであるが，橈骨，尺骨の両骨とも，旭台11－2に比べて小さく，骨体は細いものである。

2. 下肢骨

大腿骨および脛骨が両側とも残存していた。

大腿骨の推定中央位での計測値は，表7に示しているように，矢状径が17.0㎜（右），横径15.8㎜（右），中央周53.0㎜（右）で，断面示数は107.59（右）となる。

これらの計測値を旭台11－4（8才）のものと比較すると，表7に示すとおり，ほぼ同じ値を示している。しかし，観察によれば，本人骨の大腿骨は，旭台11－4のそれよりも明らかに長いことから，長さの割にかなり細いものと考えられる。

脛骨の推定中央位での計測値は，最大径が19.8㎜（右），横径16.8㎜（右），骨体周57.5㎜で，断面示数は84.85（右）となる。示数値は大きく，扁平性は全く認められない。

3) 化　骨

表9に示すように，観察が可能な部すべてにおいて，骨癒合は認められない。

4) 年令の推定

歯は上顎M_2が萌出直後であることから年令は12才と推定される。

番号I号墳E号人骨（7才）

1) 頭　蓋

左下顎枝を欠如する下顎骨と歯が残存していた。

残存した歯を歯式で示すと，次のとおりである。歯は下顎I_2まで萌出している。 咬耗度は，乳歯がBroca 2度であるが，永久歯には咬耗が認められない。

○ m_1 ○	⊗ m_1 m_2
（M_2）○　　I_2 I_1	○ I_2　　○ ／

（）歯槽内埋伏
○ 歯槽開存
⊗ 歯槽閉鎖
／ 不明

2) 四肢骨

右上腕骨のみが残存していた。

上腕骨は細長く，三角筋粗面の発達もきわめて悪い。推定中央位での計測値は，表4に示

すように，最大径が13.3㎜，最小径10.9㎜，中央周44.0㎜で，断面示数は81.95となる。示数値は大きく，扁平性は認められない。

3) 化　骨

すべての項目について，観察が不可能であった。

4) 年令の推定

年令は，歯の萌出状態と歯根の形成程度から，7才と推定される。

総　　括

宮崎県西諸郡高原町にある旭台地下式横穴から，総数36体の古墳時代人骨が出土し，そのうち8体が小児・成年骨であった。

これらの小児・成年骨に関する計測ならびに観察の結果を要約すると，次のとおりである。

1. 出土総数36体のうち，小児・成年骨8体の占める割合は，22.22％で，古墳時代としては比較的高い出土率である。
2. 成年骨1例の頭蓋長幅示数は（84.48）で，頭型は短頭型に属している。
3. 顔面頭蓋は，小児，成年両人骨とも，幅径に比べ高径は低く，低・広顔の傾向が著しい。また，眼窩型はいづれも中眼窩に属し，鼻型は，小児期のものが低鼻に，成年期のものが過低鼻に属している。
4. 四肢骨は，成人骨に比べて細長いもので，筋付着部の発達も悪い。また，骨体における扁平性は認められない。
5. Pearsonの公式を用い，左大腿骨から算出した3号墳3号人骨の推定身長値は，男性と仮定した場合145.59㎝となり，いずれにしても低身長である。
6. 以上のように，旭台地下式横穴出土の小児・成年骨には，短頭かつ低顔の傾向が強く認められ，これは旭台成人骨の特徴と一致するものである。

しかし、幼小児・成年期人には、元来このような特徴が認められ、河野（1961）の生体計測の結果によれば、頭蓋および顔面の型態が成人のそれに達するのは、20才前後とされている。

したがって、旭台成人骨の形質がどの年令から生じるのかについては、今後、さらにこの地域において、成年期後半の人骨を収集することによって考察してゆきたい。

＜擱筆するにあたり，本研究の機会を与えていただいた宮崎県教育委員会文化課ならびに御指導いただいた内藤芳篤先生に感謝いたします。＞

参考文献

1. 石川恒太郎，他，1976：旭台地下式古墳群発掘調査。宮崎県文化財調査報告書19，1-48。
2. 金子丑之助，1956：日本人体解剖学，南山堂，東京，25-245。
3. 金田義夫，1957：日本人の永久歯における歯根完成時期の研究，歯科月報，30，165-172。
4. 河野通彬，1961：鹿児島県出水市青年の身体発育に関する研究，鹿児島大学医学部解剖学教室業績輯，21，485—504。
5. 鈴木重一，1943：四肢化骨核発育に関するL線学的研究，千葉医会誌，21，349-417。
6. 藤田恒太郎，1965：歯の話，岩波書店，東京，57-98。
7. Martin-Saller，1957：Leherbuch der Anthropolgie。Bd.I. Custav Fiseher Verlag, Stuttgart.
8. 分部哲秋，1980：長崎県宮の本遺跡出土の幼小児骨，宮の本遺跡，佐世保市教育委員会編，110-113，147。
9. 分部哲秋，1981：鹿児島県松之尾遺跡出土の乳児・小児骨，松之尾遺跡，枕崎市教育委員会編，229-235。
10. 分部哲秋，1981：宮崎県日守地下式古墳出土の幼児骨，宮崎県文化財調査報告書，23，179-184。
11. 分部哲秋，1981：宮崎県上の原地下式古墳出土の成年骨，宮崎県文化財調査報告書，24，135-140。
12. 分部哲秋，1981：佐賀県大友遺跡出土の幼小児骨，大友遺跡，佐賀県呼子町文化財調査報告書第1集。
13. 分部哲秋，1981：山口県朝田墳墓群第II地区出土の幼小児・成年骨，朝田墳墓群V，山口県埋蔵文化財調査報告，64，207—211。

表 2　　脳頭蓋主要計測値

(mm)

人骨番号		旭台11—5	旭台3—3	旭台(男性)		旭台(女性)		上の原8
項目 ＼ 推定年令		12才	成年	成人 n	成人 M	成人 n	成人 M	成年
1.	頭蓋最大長		174			2	179.50	164
8.	頭蓋最大幅		(147)	3	143.33	1	140	127
17.	バジオン・ブレグマ高		136	3	136.00	2	133.00	127
8/1	頭蓋長幅示数		(84.48)					
17/1	頭蓋長高示数		78.16			1	72.57	77.44
17/1	頭蓋幅高示数		92.52	1	89.93			
9.	最小前頭幅	90	99	5	95.80	2	94.00	96
10.	最大前頭幅		123	2	119.50	2	117.00	

表 3　顔面頭蓋主要計測値

（mm）

人骨番号	旭台9-3	旭台11—5	旭台3—3	旭台11—2	旭台(男性)		旭台(女性)		上の原8
項目＼推定年令	7 才	12 才	成 年	成 年	成人 n	成人 M	成人 n	成人 M	成 年
40、顔　長			94		3	100	1	95	
43、上顔幅		96	106		4	109.00	2	105.50	
46、中顔幅		95	94	98	4	99.00	2	101.00	95
47、顔　高	92			101	3	111.67	3	109.67	
48、上顔高	51	(56)	57	59	5	65.00	2	62.00	58
47/46 顔示数(V)				103.06	2	113.10	2	107.44	
48/46 上顔示数(V)		(58.95)	60.63	60.20	2	64.84	2	61.39	61.05
51、眼窩幅 (右)		38			3	44.00	3	40.33	
51、眼窩幅 (左)		38		42	3	43.67	3	40.33	42
52、眼窩高 (右)		32	33		6	33.33	2	33.00	33
52、眼窩高 (左)		31	32	32	6	32.67	2	33.00	33
52/51 眼窩示数 (右)		84.21			3	76.65	1	75.00	
52/51 眼窩示数 (左)		81.58		76.19	3	75.62	2	84.61	78.57
54、鼻　幅	21	23	25	25	7	28.71	4	26.75	25
55、鼻　高	41	42	43	43	6	48.50	2	49.00	45
54/55 鼻示数	52.50	54.76	58.14	58.14	6	59.16	2	55.47	55.56

表4　上腕骨骨体主要計測値　（右）

（mm）

人骨番号	旭台Ｉ－Ｅ	旭台11－２	旭台（男性）		旭台（女性）		上の原８
項目＼推定年令	７才	成年	成人 n	成人 M	成人 n	成人 M	成年
１、上腕骨最大長		２３６　※			１	２６３	
５、中央最大径	１３.３	１７.６　※	４	２３.５０	４	２０.００	１８
６、中央最小径	１０.９	１３.２　※	４	１７.５０	４	１５.５０	１２
７、骨体最小周		４９.０　※	４	６１.２５	４	５４.００	４７
７(a)中央周	４０.０	５１.０　※	４	６６.７５	４	５９.００	５１
6/5 骨体断面示数	８１.９５	７５.００※	４	７４.３７	４	７７.６７	６６.６７
7/1 長厚示数		２０.７６※			１	２０.５３	

（※は骨頭を除いた計測値，示数値）

表5　橈骨骨体主要計測値　（右）

（mm）

人骨番号	旭台11－５	旭台３－３	旭台11－２	旭台（男性）		旭台（女性）	
項目＼推定年令	12才	成年	成年	成人 n	成人 M	成人 n	成人 M
３、最小周		３１.５		１	４１	１	４５
４、骨体横径	１０.３	１２.３	１２.４	３	１７.３３	２	１４.００
４a、骨体中央横径	１０.１	１２.０	１２.０	３	１６.６７	２	１４.００
５、骨体矢状径	８.７	９.５	９.３	３	１２.３３	２	１０.００
５a、骨体中央矢状径	８.２	９.２	９.１	３	１２.００	２	１０.５０
５(5) 骨体中央周	２９.０	３４.０	３４.０	３	４５.００	２	３８.００
5/4 骨体断面示数	８４.４７	７７.２４	７５.００	３	７１.１３	２	７１.４３
5a/4a 中央断面示数	８１.１９	７６.６７	７５.８３	３	７１.９４	２	７５.００

表 6　尺骨骨体主要計測値　（右）

（mm）

人骨番号	旭台11—5	旭台11—2	旭台（男性）		旭台（女性）	
推定年令 / 項目	12 才	成 年	成人			
			n	M	n	M
3、最小周	24.5		2	37.00	1	31
11、尺骨矢状径		11.0	2	14.00	3	12.00
12、尺骨横径		22.9	2	17.00	3	15.00
S、中央最小径	9.0	10.7	2	13.50	3	11.00
L、中央最大径	11.3	12.5	2	17.50	3	15.00
C、中央周	31.5	36.5	2	49.50	3	42.67
11/12 骨体断面示数		85.27	2	79.90	3	80.10
S/L 中央断面示数	79.65	85.60	2	76.96	3	73.55

表 7　大腿骨主要計測値　（右）

（mm）

人骨番号	旭台11-4	旭台11-5	旭台3-3		旭台11-2	旭台(男性)		旭台(女性)		上の原8
推定年令 / 項目	8 才	12 才	成 年		成 年	成人				成 年
						n	M	n	M	
1、最大長			374(∅)	341(∅)※				1	375	
2、自然位全長				339(∅)※				1	370	
6、骨体中央矢状径	16.9	17.0	23.3(∅)	23.2(∅)※	22.3	4	28.25	5	24.8	22
7、骨体中央横径	16.4	15.8	19.9(∅)	20.0(∅)※	19.6	4	27.00	5	23.67	18
8、骨体中央周	54.0	53.0	67.0(∅)	67.0(∅)※	66.5	4	87.75	5	78.20	63
8/2 長厚示数				19.76(∅)※				1	19.46	
6/7 骨体中央断面示数	103.05	107.59	117.06(∅)	116.00(∅)※	113.78	4	104.88	5	102.12	122.22

（※は両端を除いた計測値，示数値）

表8　脛骨骨体主要計測値　（右）

（mm）

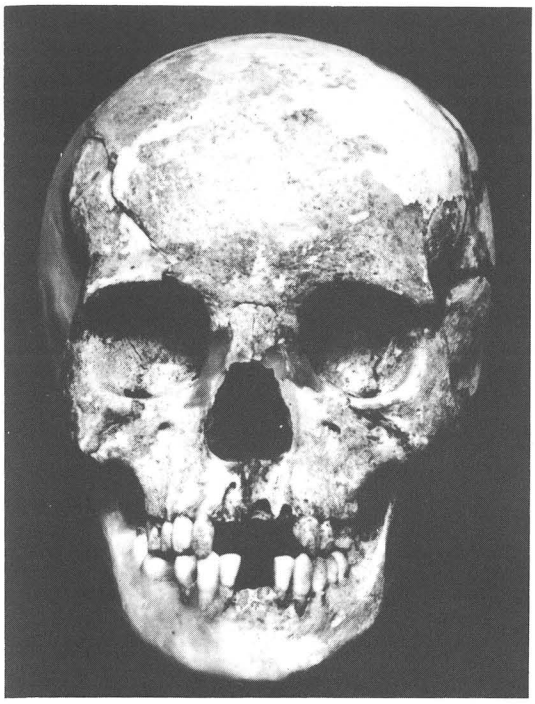
人骨番号	旭台11－4	旭台11－5	旭台3－3	旭台11－2	旭台（男性）		旭台（女性）		上の原8
項目＼推定年令	8才	12才	成年	成年	成人 n	成人 M	成人 n	成人 M	成年
8、中央最大径	19.4	19.8 (ℓ)	23.5	24.2 (ℓ)	4	30.25	3	27.33	20
8a、栄養孔位最大径		21.0 (ℓ)	25.4		3	33.00	3	31.00	
9、中央横径	16.3	16.8 (ℓ)	18.2	17.3 (ℓ)	4	22.50	3	19.33	16
9a、栄養孔位横径		18.0 (ℓ)	19.5		3	24.00	3	21.67	
10、骨体周	56.0	57.5 (ℓ)	66.0	65.0 (ℓ)	4	83.00	3	73.00	58
10a、栄養孔位周		62.5 (ℓ)	70.0		3	92.00	3	83.67	
10b、最小周			62.5		2	74.00	1	69	54
9/8 中央断面示数	84.02	84.85 (ℓ)	77.45	71.49 (ℓ)	4	74.95	3	70.72	80.00
9a/8a 栄養孔位断面示数		85.71 (ℓ)	76.77		3	72.96	3	69.84	

表9　化骨について

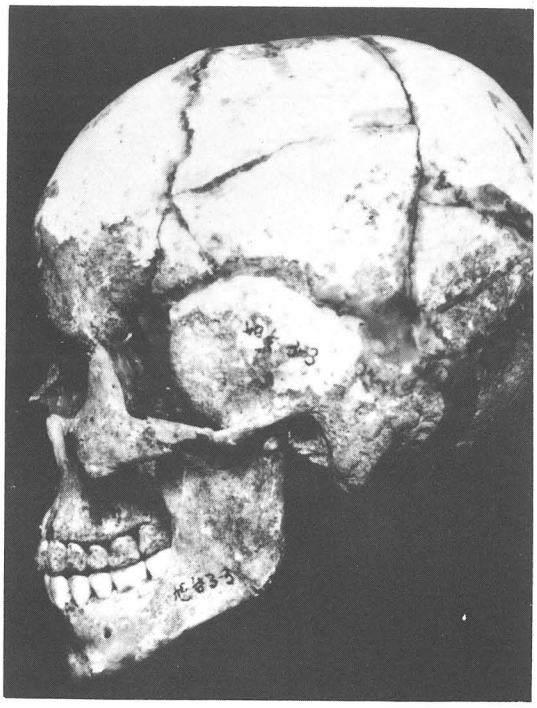
人骨番号		I－E	11－4	3－3	7－6	11－2	現代人骨癒合年令（鈴木）（男性）	（女性）
項目＼推定年令		7才	8才	成年	成年	成年		
頭蓋	後頭骨蝶形骨間	×	×	×	×			
肩甲骨	烏口突起				×	○	16.5(才)	15(才)
上腕骨	骨頭					×	17.5	17
	滑車					○	16.5	14.5
	小頭					△2/3	15	13
	内側上顆					×	17	15
	外側上顆					△2/3	16	14.5
橈骨	近位端	×				×	16	14
	遠位端			×			18	17
尺骨	近位端					△1/3	15.5	13.5
	遠位端						18	17
寛骨	寛骨臼	×		×		×	16	14
	恥骨坐骨間			○			8	7
	腸骨稜	×				×	20	20
	坐骨結節					×	20	20
大腿骨	骨頭	×		×		×	16	15
	遠位端	×		×		×	18	16.5
	大転子	×		×			17	16
	小転子	×		×		×	17	16
脛骨	近位端					×	16.5	16.5
	遠位端					×	16.5	15

（○骨癒合完3，△骨癒合途中，×未癒合，空白は観察不能）

〔旭台8－2，9－3，11－5は，すべての項目について観察不能〕

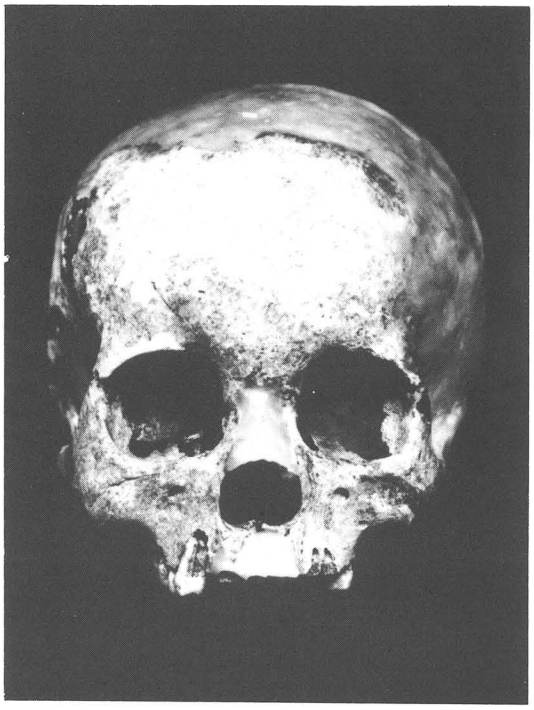


旭台 3 — 3（成年）、頭蓋正面観

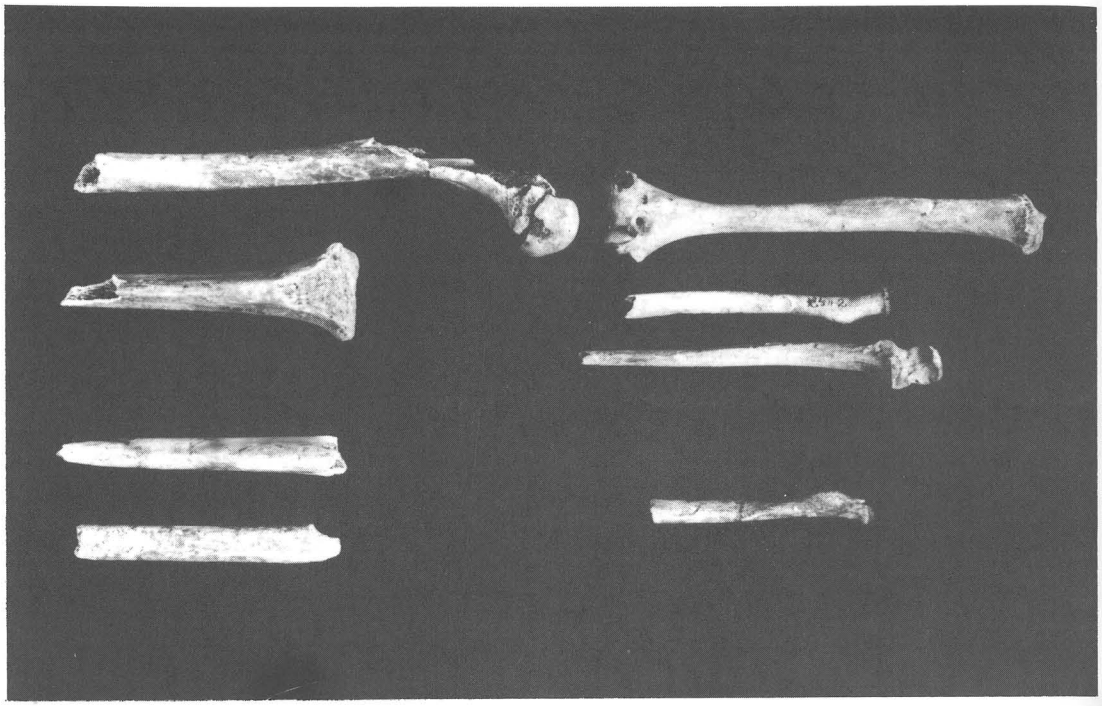


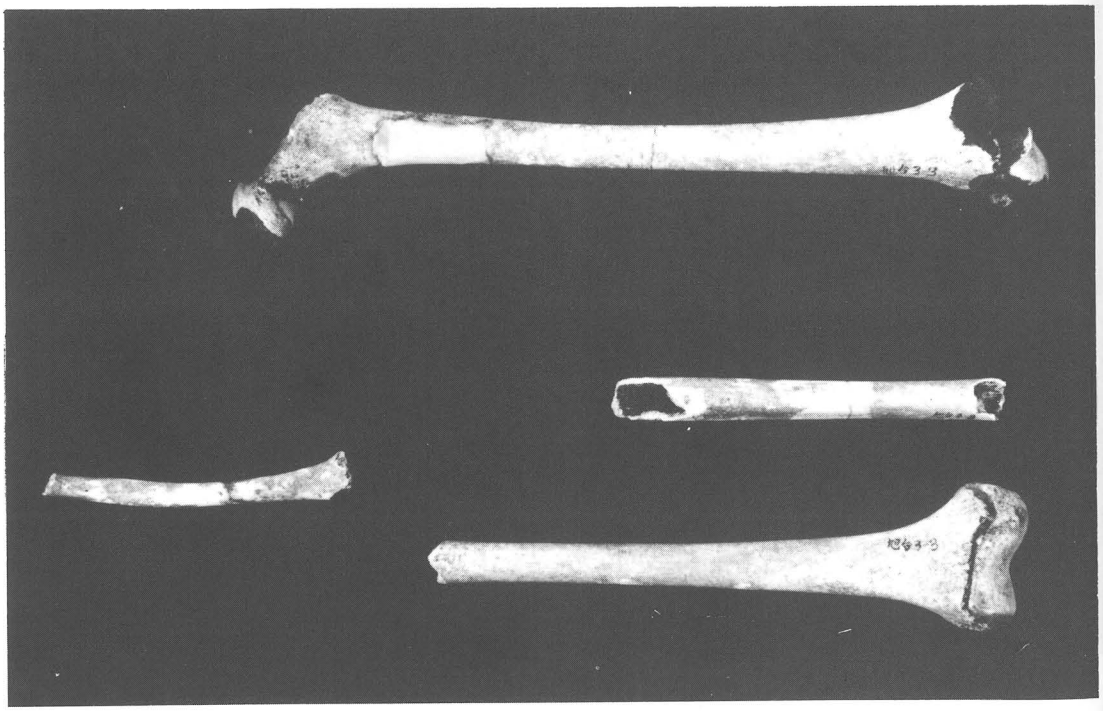
旭台 3 — 3（成年）、頭蓋側面観

旭台 3 — 3（成年）、頭蓋上面観



旭台 11—5（ 12 才）、頭蓋正面観





昭和５６・５７年度　埋蔵文化財発掘調査一覧

（付）　　（昭56.10.～昭58.2）

番号	遺跡名	所在地	発掘調査日	調査主体	調査員	遺構・遺物	備考
1	宮崎学園都市遺跡（１４号地他）	宮崎市熊野 他	56.7.20～	県教委	文化課職員	集石遺構、竪穴住居跡 掘立柱建築跡 縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器 陶磁器、石器他	
2	祝吉遺跡	都城市祝吉町５７０２番地他	56.9.21～11.14	都城市教委	面高哲郎	縄文土器、弥生土器、石器、鉄器、陶磁器	昭和57年3月報告
3	新田原遺跡	新富町大字新田２１４４７番地他	56.12.7～12.25	新富町教委	石川恒太郎	縄文土器、弥生土器、石器	
4	新田原遺跡	新富町大字新田２１４４６番地他	57.1.25～2.20	新富町教委	山中悦雄 永友良典 菅付和樹	集石遺構（縄文）竪穴住居跡（弥生） 縄文土器 弥生土器、石器	
5	土器田横穴群	佐土原町大字下那珂字土器田１２８３２番地	57.2.4.～2.13	佐土原町教委	永友良典 長津宗重	土師器、須恵器 砥石 直刀、鉄器、耳環 玉	
6	北迫遺跡	高崎町大字大牟田４０８２番地他	57.2.23～2.27	高崎町教委	面高哲郎	溝状遺構、竪穴遺構、縄文土器 石器	本報告
7	元米良の塚	西米良村大字竹原１３の及び２	57.3.10～3.12	西米良村教委	日高正晴	中世墳墓 鉄器片、白磁片	
8	永谷遺跡	高鍋町大字南高鍋１２３７７～２番地	57.3.25～3.31	高鍋町教委	日高正晴	横穴墓 金環、銅環、刀子、刀 他	
9	宮崎女子短期大学運動場遺跡	清武町大字木原字坂ノ下６７０番地	57.3.29～4.5	宮崎女子短期大学	石川恒太郎	近世墳墓 磁器、古銭、煙管、鉄釘、人骨	

番号	遺跡名	所在地	発掘調査日	調査主体	調査員	遺構・遺物	備考
10	下北方周辺遺跡	宮崎市北方町塚原 5785番1	57. 4.20 ～ 5.13	宮崎市 教委	野間重孝	地下式横穴 須恵器、土師器 刀子、鉄鏃、直刀、金環、縄文土器、石斧	
11	前平地区遺跡	田野町字前平甲 9268番地 他	57. 5.10 ～ 5.22	田野町 教委	面高哲郎 長津宗重	集石遺構 縄文土器、石鏃、石片、磨石片、土師器	本報告
12	都城・中ノ城	都城市都島町 865番地 他	57. 5.17 ～ 7.10	都城市 教委	岩永哲夫 谷口武範	中世山城 陶磁器、土師器、鉄器、古銭	
13	井水地下式横穴群	国富町大字深年 3495番地	57. 6. 3 ～ 6.10	国富町 教委	永友良典 北郷泰道	鉄鏃、剣、刀子、鉄器、勾玉、小玉、算盤玉、須恵器、土師器	
14	正祐寺横穴群	高鍋町大字持田字宮ヶ谷4108番地	57. 8. 9 ～ 8.21	高鍋町 教委	野間重孝 永友良典	土器、玉	
15	横谷・原村地下式横穴	高城町大字縄瀬字原村上1702～1番地	57. 8.12 ～ 8.14	高崎町 教委	菅付和樹	土器片、鉄器、人骨	
16	宮田遺跡	三股町大字樺山字宮田2833番地2	57.10.18 ～ 10.26	県教委	岩永哲夫 菅付和樹	土師器	
17	川南古墳群	川南町大字川南 618番地12他	57.11. 4 ～ 12. 3	川南町 教委	長津宗重	土師器、須恵器	
18	大塚古墳	宮崎市大塚町字西原1320番地	57.11. 4	宮崎市 教委	野間重孝		
19	中岡遺跡	宮崎市北川内町中岡4882番地	57.11. 8 ～ 2.26	宮崎市 教委	野間重孝	土師器製作所跡 土師器、須恵器 石器	
20	菓子野地下式横穴群	都城市菓子野町 9480番地の6	57.11.29 ～ 12. 4	都城市 教委	石川恒太郎	剣、刀、鉄鏃、石突 人骨	

番号	遺跡名	所在地	発掘朝査日	調査主体	調査員	遺構・遺物	備考
21	菓子野地下式横穴群	都城市菓子野町9454番地の1	57.11.29 ～ 12. 4	都城市教委	面高哲郎	鉄鏃、貝輪、土師器、人骨	
22	清武古墳第1号	清武町大字加納甲下岩見田2401番地	57.12. 9	清武町教委	石川恒太郎		古墳でないことが判明する
23	市ノ瀬地下式横穴群	国富町大字深年5019番地	58. 1.10 ～ 1.23	国富町教委	田中茂 菅付和樹	直刀、剣、鏡、鉄鏃、刀子、鋤先、貝輪、朱玉耳環、玉、骨製品、土師器 他	
24	上三財地下式横穴	西都市大字上三財7503番地	58. 1.10 ～ 1.19	西都市教委	日高正晴	須恵器、土師器銀環、刀子、鉄鏃、人骨	
25	野首遺跡	日向市大字日知屋字野首147番地	58. 1.24 ～ 1.28	県教委	谷口武範 面高哲郎	土錘、陶磁器、青磁、須恵器、土師器	
26	新田原遺跡	新富町大字新田21457番地	58. 1.31 ～ 2.15	新富町教委	面高哲郎 山中悦雄	竪立住居跡 弥生土器、石鏃他	

宮崎県文化財調査報告書

第２６集

昭和５８年３月３１日

発　行　　宮崎県教育委員会

編　集　　宮崎県教育庁文化課